

令和6年度
研修集録
第39号

秋田市立秋田商業高等学校



「渋沢からの宿題」

校長 瀧澤 徳彦

2024年は「2024年問題」が様々な分野で噴出した。物流の2024年問題が顕著だが、運送業者、建築業者、医師の時間外労働の上限規制が始まり、社会的に大きな注目を集めた。これらの社会的影響力の大きい問題は、とりも直さず、私たちがAfterコロナのモデルを再構築する過渡期を迎えていることを実感させた。もはやコロナ前に「戻る」ことを目指すのではないということが求められた年だとも言える。

また、7月には20年ぶりに新紙幣が発行された。新しい「顔」となったのは、日本の近代化に貢献した3名であり、壱万円札には実業家の渋沢栄一が描かれている。「近代日本資本主義の父」とも呼ばれる渋沢栄一の残した言葉に触れながら、教職員として現代を生きる私たちが学ぶべきヒントを探りたいと思う。

「一人ひとりに天の使命があり、その天命を楽しんで生きることが処世上の第一要件である。」

江戸時代末期から昭和初期まで激動の時代を生き抜いた渋沢は「天命を楽しむ」という人生観を備えていた。自分の天命を知り、楽しむこと、・・・我々教職員が生徒に常に伝えていることは間違いではないと背中を押してもらえる言葉だ。一方で、渋沢は「信用」や「信」という言葉をとても大切にしていた。

「事業には信用が第一である。世間の信用を得るには世間を信用することだ。個人も同じである。自分が相手を疑いながら、自分を信用せよとは虫のいい話だ。」

「最も重んずべきは信である。信を守らねばたちまち失敗す。」

生涯で500以上の企業の設立に関わった「ベンチャーの元祖」の極意がここにあるように思われる。ビジネスチャンスの機会を逃さず、人脈を広げていく。ともすれば、利益を独占したくなるのが人情だが、渋沢には「多くの人々が経済発展の恩恵を受けられる社会にしたい」という理念があった。まさに商業教育における「豊かな人間性」がここに凝縮されている。自らが掲げる理想のもとに、計画、立案し、実行、修正する。渋沢の信念と行動力が新たな時代を切り拓いたのだと確信した。彼は、観察眼に優れ、意見の異なる人物を実に上手く組織に巻き込んで、新たな価値を生み出すことに成功した。リモート、オンライン・・・非接触がスタンダードになりつつある現状において、渋沢の、人を信用し、人への好奇心を持ち、一見「不完全」と見える集団を支える、個々の多様性を尊重する姿勢は、これからの教育をはじめ、難問山積で閉塞感のある現代にとって、最も必要なマネジメント能力だと言えるのではないだろうか。

「目的には理想が伴わねばならない。その理想を実現するのが、人の務めである。」

これは、学習、部活動、進路実現にもぴたり当てはまると思い、メモした言葉だ。人を大切にする、行動力を大切にする、プロセスを大切にする、という秋商が様々な場面で掲げる理念を分かりやすく伝えている言葉だと思っている。

渋沢は世の中の変革をむしろチャンスと捉え、楽しむ気概があった。今回の新紙幣発行はキャッシュレス化の推進を強力に後押しすることになり、これほどの規模での紙幣発行は、最後になるのでは、と言われている。没後100年になろうかという令和の時代にも「渋沢イズム」は確かに息づいている。今後も迫り来る、「〇〇問題」という「ピンチをチャンスに」変えていく力をいかにして育み、伸ばさせていくか・・・渋沢からの「宿題」に今日も応えているか、自問自答している。

目 次

◎巻頭言	校 長 瀧 澤 徳 彦 ……	1
I 指導主事訪問		
1 日程	教 務 部 ……	3
2 研究授業の指導案と協議会		
① 英語：授業者(今野 千佳)	英 語 科 ……	4
② 商業：授業者(石崎絵里香・山崎翼)	商 業 科 ……	10
3 全体協議会	教 務 部 ……	16
II 校内職員研修		
1 年間実施報告	研 修 部 ……	19
2 授業公開週間 実施報告	研 修 部 ……	20
3 SDGsを取り入れた授業実践例	研 修 部 ……	41
III 報告		
1 ビジネス実践		
① AKISHOP	商 業 科 千 葉 知 美 ……	46
② キッズビジネスタウン	地歴・公民科 小 林 稔 幸 ……	48
③ エコロジカルビジネス	英 語 科 石 塚 禎 子 ……	50
④ 総括	商 業 科 柏 谷 亜 紀 子 ……	52
⑤ 商業科通信	商 業 科 柏 谷 亜 紀 子 ……	54
2 センター研修		
A講座		
① 教職5年目研修講座(高等学校)	商 業 科 佐 藤 正 志 ……	58
② 実践的指導力向上研修講座(高等学校8年目)	商 業 科 石 崎 絵 里 香 ……	60
	保健体育科 佐 藤 悠 香 ……	62
③ 中堅教諭等資質向上研修講座(高等学校)	国 語 科 柴 田 佳 代 子 ……	63
	英 語 科 今 野 千 佳 ……	70
④ 実践的指導力発展研修講座	国 語 科 児 玉 睦 子 ……	78
⑤ 高等学校新任学年主任研修講座	国 語 科 鈴 木 恵 一 ……	79
⑥ 高等学校新任道德教育推進教師研修講座	地歴・公民科 櫻 田 伸 吾 ……	80
C講座		
① 「話す力・聞く力」を育む指導の工夫	国 語 科 糸 田 由 香 子 ……	81
② 学校におけるICT活用の基礎	商 業 科 佐 藤 珠 美 ……	82
③ いじめの理解と対応／不登校や集団不適応の悩みを抱えた児童生徒の支援	商 業 科 佐 々 木 一 秀 ……	83
3 その他		
① 全国商業教育指導者研修会	商 業 科 石 田 雄 哉 ……	88
② 秋田県教育研究発表会発表	数 学 科 山 崎 史 織 ……	93

IV 編集後記

令和6年度 指導主事学校訪問

1 期日 令和6年10月29日(火)

2 訪問指導主事

秋田市教育委員会学校教育課 副参事指導主事	花田 守 先生
秋田市教育委員会学校教育課 副参事指導主事	工藤 香苗 先生
秋田県教育庁高校教育課 指導チーム指導主事	浅野 朋央 先生
秋田県教育庁高校教育課 指導チーム指導主事	近藤 俊春 先生

3 研修テーマ

主体的・探究的・協働的に取り組み、学びを深めるための授業実践
 ～ ICTの効果的活用／「問い」を生み出す授業展開～

4 日程

時間	校時	日 程	備 考
8:45～9:10		S H R ・ 清掃	
9:10～ 9:55(45)	1		火曜1校時授業
10:05～ 10:50(45)	2	10:30頃指導主事来校 10:35～10:50学校経営の説明<校長室>	火曜2校時授業
11:00～ 11:50(50)	3	一般授業	火曜3校時授業
11:50～		指導主事<校長室>	※特定授業以外の生徒は下校 ※当日の部活動なし
12:05～ 12:55(50)	4 特定 授業	科目名：英語コミュニケーションⅡ 内 容：Lesson9 The Sharing Economy 授業者：今野 千佳 生 徒：3年B組26名<3B教室> 科目名：簿記 内 容：その他の債権・債務 授業者：石崎 絵里香 山崎 翼 生 徒：1年E組35名<203教室>	※全教員がどちらかの授業に参加します。
12:55～ 13:40(45)		昼食	※教務部 協議会場設営
13:40～ 14:30(50)	研究 協議 会	○英語科<語学室> 協議題：言語活動とICT活用のバラン スについて ○商業科<204教室> 協議題：協働的な活動におけるICT活 用について	※見学した教科の研究協議会に参加します。
14:40～ 15:20(40)	全 体 会	<会議室> ①総評 ②校長より	

英語科 学習指導案

授業者：今野千佳

実施日時・場所：令和6年10月29日(火) 4校時

3年B組教室

実施科目：英語コミュニケーションII

学年・クラス：3年B組標準クラス

使用教科書：BIG DIPPER English Communication II (数研出版)

1 単元名 Lesson 9 The Sharing Economy: Something for Everyone?

2 単元の目標

シェアリングエコノミーについて、聞いたり読んだりしたことを基にそのメリットとデメリットを理解し、その仕組みを活用した新たなビジネスプランを自分の意見やアイデアを述べることができる。

3 単元とCAN-DO形式での学習到達目標との関連

関心のある事項に関する文章の概要や要点を簡単にまとめて表現できる。【話すこと(発表)】

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
語句や言語材料（未来完了／無生物主語構文／不定詞）を理解している。 語句や言語材料を用いて伝えたり、自分の考えを表現したり、発表や意見交換をしたりする技能を身に付けている。	シェアリングエコノミーについて理解を深めるために、各Part本文の内容を読み取り、概要や要点を把握している。 本文内容に関する話題について、自分の意見を話したり、書いたりしている。	シェアリングエコノミーについて理解を深めるために、各Part本文の内容を読み取り、概要や要点を把握しようとしている。 本文内容に関する話題について、自分の意見を話したり、書いたりしようとしている。

5 単元観

本単元では、近年増加しているシェアリングエコノミーについて取り上げている。ライドシェアリングやフードデリバリーサービスの具体例とともにそのメリットとデメリットを学び、シェアリングエコノミーは本当に関わった全員がwin-winになれるビジネスモデルなのか考えさせたい。また、扱われている言語材料は未来完了・無生物主語・不定詞である。本文や文法問題を中心にその使用に触れさせ、働きを理解させていく。

6 生徒観

基本的な学習態度が身に付いており、英語の学習に対して前向きな生徒が多い。発言を求められたり、ペアワークをしたりする場面でも積極的に活動を行おうとするが、その一方であまり深く考えずに発言するなど学習姿勢に幼さが見られる時もある。

授業時の英語を使ったコミュニケーションにはまだ課題が見られるが、臆することなく挑戦しようとする意志のある生徒が多い点を生かしたいと考えている。生徒に自分の力を実感させ自信をつけさせるためにも、帯活動としてのスモールトークやインタラクションでの英語使用の機会を増やしていきたい。

7 単元の指導と評価の計画(総時数：10時間)

主な言語活動等 (◎本時の内容)	評価
<ul style="list-style-type: none"> ・説明文を読み、シェアリングエコノミーのメリットやデメリットについて理解する。 ・読み取った内容に関する自分の考えを、ペアやグループに伝える。 ◎本文の内容を発展させ、既習事項を用いて自分の意見や考えを表現する。	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の観察 ・ベーシックノート ・ワークシート ・定期考査

8 本時の学習(本時10 / 10)

(1) 目標

高校生の自分たちがシェアできるもの・ことを考え、ビジネス案を顧客に提案することができる。

(2) 本時の展開

過程	学習活動	教師の支援及び留意点
導入 (10分)	○ Warm up	○ 本文で学んだシェアリングエコノミーについて復習し、その他の実在するビジネスについて情報を得る。
展開 (35分)	○ 本時の学習課題を確認する。	○ Google スライドを共有し、テキストボックスを使って意見を入力させる。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> Propose your "sharing economy" business to your customers. </div>	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教師のプレゼンのモデルから活動の流れを掴む。 ○ 高校生の自分たちがシェアできそうなもの・ことをクラスで共有する。 ○ シェアできそうなもの・ことを1つ選んでペアでビジネス案を考え、提案するプレゼンを1人1人が作る。 ○ 1人ずつ発表できるように練習する。 ○ グループに分かれてグループ内で全員が発表を行い、最も良いビジネス案を決める。 ○ いくつかのグループを指名し、数人クラスの前で発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ タブレットを用いて、プレゼンに必要な画像等を各自で用意させ PowerPoint を作成させる。 ○ ペアを分けてグループを組ませる。 ○ 発表者以外に司会や質問者等の役割を与える。 ○ 指名された人のタブレットを前のプロジェクタに接続する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>[評価] 高校生の自分たちがシェアできるもの・ことを考え、ビジネス案を顧客に提案することができる。(活動の観察・発表) 【思考・判断・表現/主体的に学習に取り組む態度】</p> </div>
まとめ (5分)	・ 本時のまとめと振り返りを行う。	○ 生徒の発表についてフィードバックを行う。

☆「生徒の様子」や「ICT活用」について、感想や気づいたこと

I <導入>参観のポイント ①本時の目標 ②授業の流れ

- ・本時の目標や流れを提示し生徒がやるべきことを理解していた。
- ・生徒は、今回の授業の形態に慣れている印象で、スムーズに指示に従って作業していた。ICTの活用のおかげで、本来であればもっと時間のかかる活動だったと思うが、1時間の中に収まっていた。
- ・①指示の示し方がスライドも声かけも明確だった。②教師側のモデルが多く示されて生徒にもわかりやすい。
- ・クラスの雰囲気が非常に良く、先生の問いかけにすぐに反応しており、日頃から先生との信頼関係が築かれていることが感じられました。
- ・生徒が教師の問いかけに反応し、効果的な導入でした。
- ・流れが切り替わる毎に提示される本時の流れが良かった。次に移るんだと分かりやすかった。
- ・目標提示までのPowerPointがわかりやすく、自然と生徒が学習内容に惹きつけられていた。
- ・先生が提示しているスライドが見やすく、生徒の興味を惹いていた。

II <展開>参観のポイント ③生徒の「なぜ」を引き出す発問の工夫

④生徒の主体的・探究的・協働的に取り組む学習活動

- ・グループでの役割に従い活動できていた。
- ・先生が示した例に沿って、みなスムーズにプレゼン資料を作成していた。まさにこれから必要とされる能力だと思うので、高校時代に慣れておけるとよいと思った。
- ・③生徒の一部は作業することに集中しすぎて教師の発問に答える余裕がなさそうに見えた。
- ・④生徒は日頃の授業でICT活用に慣れていてどの段階でもスムーズに活動していた。
- ・Google スライドを活用することによって生徒同士がアイデアを瞬時に共有できるので、とても参考になりました。
- ・ICT活用は効果的に行われていた。生徒の単独作業になっていたため、ペアで一つのスライドを作成するなど、協力する場面を設定した方が授業に動きが出るように感じた。
- ・Google スライドでプレゼンさせると、紙に書かせてやるより作業が速い。作ることで、プレゼンして英語を話させることに時間を多く使えて良いと思った。
- ・グループでの役割が与えられるので、どの生徒も発表を一生懸命聞いていた。
- ・英語が苦手な生徒も、単語とスライドを活用し自分の考えを伝えようという意欲が見えた。英語が苦手な生徒にとっては、スライドがあったおかげで表現しやすくなったのではないかと思います。グループワークの際、全員に役割が与えられていたおかげで一人一人の生徒が主体的に学習に取り組んでいた。
- ・生徒への指示がわかりやすく、意欲的に取り組んでいた。
- ・タブレットの活用に慣れている生徒が多く、素早く取り組んでいた。

III <整理>参観のポイント：本時の目標に対する振り返り

- ・時間後に生徒が振り返りをしっかり記入していた。
- ・まとめの時間は少なくなりましたが生徒が最後まで英語を駆使して活動できたのは良かった。
- ・生徒の意見をクラスで共有できたことで、十分振り返りとなっていたように思う。
- ・生徒に振り返りのGoogle Formsを送信させる時間が足りなかったが、本時の目標「自分たちがシェアできるもの・ことをビジネスとして顧客に提案することができる」は十分達成できていたと感じた。Google スライドの活用で、スライド作成より他の生徒の発表を聞く時間をしっかり取れていて、生徒が一生懸命発表していた。

☆授業全体を通して、感想や気づいたこと

- ・生徒はペアやグループでしっかり自分の意見を話していたのがよかった。
- ・前半のプレゼン資料の準備時間までが25分と多く、もったいないと思いました。一番盛り上がりのある英語のコミュニケーションが見たかったです。
- ・標準クラスにも関わらず、生徒たちはよく頑張っていたと思います。これから、もう少し応用的にプレゼン資料を作ったり、自分の意見を述べたりできるようになるといいですが、なかなか難しいですね。
- ・今回の方法(教師が1人)も良い授業だがウィリアム先生と2人でもさらに実のある授業になりそうだと感じた。
- ・タブレットを使用しつつも、英語を話す活動を多くする工夫が必要だと感じました。
- ・1時間の授業で発表までいけたのは今野先生の力量だと感じています。
- ・生徒は戸惑うことなく作業、発表していたので、このような授業が初めてではないと分かりました。普段からこのような授業をしていると、生徒にとっても力が付きそうです。素晴らしかったです。
- ・最後のプレゼンの際に、生徒の役割を分担しており、よかった。参考にしたい。
- ・ICTの活用法について、とても参考になりました。今後の自分の授業に活かしていきたいと思っています。
- ・自分の授業ではICTをほとんど時間短縮にしか使えていないので、視覚化、意見集約について考えるいい機会となりました。ありがとうございました。



令和6年度 指導主事訪問研究協議会<英語科>記録

日 時：令和6年10月29日(火) 13:40～14:30

場 所：語学室

司 会：伊 藤 史

授業者：今 野 千 佳

記 録：糸 田 由香子

協議題 言語活動とICT活用のバランスについて

1 はじめに

- ・指導主事紹介(副校長より)
- ・協議会の流れについて(司会より)

2 授業者(今野)より

- ・シェアできるものを提案するために他教科での様々な学びとの結びつきを大切にした。
- ・教科書の単元は既に終えている。今回はまとめの時間としての言語活動となった。
- ・Google スライドやPowerPointの操作は生徒の方が慣れている。
- ・いろいろトラブルもあったが授業内でICTを活用できた。
- ・発表した3人のうちの1人はWilliam Treasure先生の指名である。最後に発表した1人は英語が苦手で、授業は時間内に終わらなかったが、その生徒の頑張りを見ていただきたかった。

3 参観者ワークショップ(各グループからの質問と発表を抜粋)

- ・[質問] どうやって評価するのか。
→Google Classroomで生徒からのスライドやフィードバックを受け取る。それらも含め、活動全体を評価の対象とする。
- ・ビジネスプランを立てるという目標は、協働的な学びによって達成できた。
- ・言語活動には信頼関係も影響するので、今回の授業は様々な面でうまくいっていた。
- ・言語活動はどのレベルを目指すのかが大切である。今回は、各自が自分の課題を見つけて取り組むことができていた。
- ・英語で発表するには「英語を使って○○する」のように明確な理由が大切になる。
- ・生徒の役割がしっかり決まっていたこともあって、生徒が楽しく活動できていた。
- ・自分でスライドを作成すると、内容を理解しているため発表もしやすいように感じられた。スクリーンに発表の型を示すとさらに発表がしやすくなると思う。
- ・先生からの指示のバランスが良く、取り組む活動内容も明確だった。英語が苦手な生徒にとっては、プリントの裏側にヒントを書いておくと良かったと思う。
- ・先生がモデルで示したスライドが見やすかった。ただ、最初に「英語でスライドを作る」などの指示を出すとさらに良い。
- ・本来なら2時間はかかりそうで盛りだくさんな内容だが、ICTを活用して1時間でスムーズ

に実施できたのは良かった。

- ・生徒はPowerPointのフォーマットがなくても作業ができていた。
- ・ICTの利用は個人の活動になりやすいので、ペアで取り組むのはどうか。
- ・スライドは、フォーマットがあった方が作りやすいのではないか。スライドを作る時間を短縮できれば、相談する時間や発表の準備時間を増やせる。
- ・時間が足りなくなってしまったのは残念だが、ICTの利用を通して、あえて「難しいこと」に挑戦するのも大切であると思った。

4 指導助言

秋田市教育委員会学校教育課 副参事指導主事 工藤 香苗 先生

- ・中学校の視点になるが、今回の授業は生徒と教師の信頼関係があり、仕掛けや手立てがたくさんあって良かった。
- ・先生からのモデルの示し方など指示が明確で、導入部分で具体例をたくさん出していたため生徒の活動がスムーズに行われたと感じられた。
- ・教材の内容が身近でリアルなものであればあるほど英語でのコミュニケーションにつながる。
- ・ALTを巻き込み、視覚的教材を利用しながら、英語を活用する目的や場面や状況を大切にしていく必要がある。
- ・自分の学びが誰かに役立つと知るためにも、協働的な学びを言葉や文字にすることが重要となる。

秋田県教育庁高校教育課 指導チーム指導主事 浅野 朋央 先生

- ・高校の視点から、生徒が自分自身で学んだことを活かして「伝えよう」としていたのは良かった。
- ・順序立ててやっていて、モデルを2回示したのはタイミング的にも素晴らしい。
- ・生徒のプレゼンが一方的な発表ではなく、コメントや発表の機会などが双方向的なのが良い。
- ・グループの中で「1・2・3・4」と役割ができていたので流れがスムーズだった。
- ・原稿を細かい部分まで用意しなくてもスライドを見てやれているので今後も続けてほしい。
- ・スライド作成の時間を短縮するためにも「型」が必要だが、「型」を与えすぎないようにすることも大切である。
- ・少しいいので生徒が自分で調べる時間を設定してほしい。そのためにも、グループは4人よりも3人がいい。

第1学年 商業科(簿記)学習指導案

日 時 令和6年10月29日(火) 4校時

対 象 1年E組 35名

教科書 簿記(TAC出版)

授業者 T1 石 崎 絵里香 T2 山 崎 翼

1 単元(題材)名 第16章 その他の債権・債務

2 単元(題材)の目標

知識・技術	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
債権・債務の取引の記帳について理論と実務とを関連付けて理解しているとともに、関連する技術を身に付けている。	債権・債務の取引の記帳法の妥当性と実務における課題を見だし、科学的な根拠に基づいて課題に対応している。	債権・債務の取引の記帳について自ら学び、適正な会計帳簿の作成に主体的かつ協働的に取り組もうとしている。

3 単元(題材)と生徒

(1) 単元(題材)観

掛け取引・手形取引以外の以下の債権・債務について、言葉の意味を理解し、正しく取引を仕訳する力を身に付けさせたい。

(2) 生徒観

商業科1年E組は35名のクラスである。簿記の学習も一通り終えたが、理解度に大きな差が生まれている。理解度が低い生徒は、学習に対して苦手意識を持ち考えることを諦めているように感じる。しかし、クラス内では生徒同士が協力し教え合う姿が見られるため、生徒が主体的に学びに向かう姿勢を大切に、生徒の発言を拾いながら助言していきたい。

(3) 指導観

掛け取引・手形取引以外の債権・債務について、専門用語の意味を確認しながら、適切な処理方法について理解を深めさせたい。文章を理解し、取引を分解するプロセスを段階的に確認することで、正しく処理する力を身に付けさせたい。

4 本校における「授業改善の課題」との関連性

- ・主体的・探究的・協働的に取り組み、学びを深めるために思考を促す段階的な課題に取り組みさせる。
- ・ICTを効果的に活用し、他の考えを共有することで学びを深めさせる。

5 単元(題材)の指導計画[4時間]

- (1) 貸付金と借入金／手形貸付金と手形借入金 [1時間]
- (2) 前払金と前受金／未収金と未払金 [1時間]
- (3) 立替金と預り金／仮払金と仮受金／受取商品券 [1時間]
- (4) その他の債権・債務(まとめ) [1時間] …本時

6 単元の評価規準

A：知識・技術	B: 思考・判断・表現	C: 主体的に学習に取り組む態度
債権・債務の取引の記帳について意味を理解し、正しく仕訳することができる。	債権・債務の取引について、科学的な根拠に基づき課題に対応し、説明することができる。	債権・債務の取引の記帳について自ら学び、正しく取引を仕訳するために主体的かつ協働的に取り組もうとしている。

7 本時の指導計画

(1) 本時のねらい

- ・掛け取引・手形取引以外の債権・債務について、言葉の意味を理解し、正しく取引を仕訳する力を身に付けさせたい。

(2) 学習過程

段階時間	学習内容・活動	指導上の留意点	評価の観点【方法】
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・基本問題に取り組む。(個) ・基本問題の解答を共有・確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> T1 指示・タイマーセット T2 プリント配布 T1 T2 机間巡視で理解度を確認 ・惜しい間違いをしている生徒に解答を発表させる。(2～3名) 	
展開 30分	発問：なぜ、前受金は負債で前払金は資産になるの？		
	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の内容・目標を確認する。 ・ワークシートに取り組む。(個) ・グループで考えを共有する。 ・グループの考えを発表する。 ・他のグループの考えを聞き、メモを取る。 	<ul style="list-style-type: none"> T2 机間指導 T1 授業の流れ、目標を説明 T1 課題に取り組む際に、どのような方法を用いて調べてもいいということを伝える。 T1 T2 教員が情報を与えすぎないように注意する。 T1 T2 グループでの対話ができているかについてのみ机間指導する。 T1 発表者への指示・サポート T2 机間指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的に課題に取り組んでいる。T2 【C】 観察、ワークシート
整理 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・確認問題に取り組む。 ・本時の学習内容を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> T1 文章で表現するように指示する。 T2 机間指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・前払金と前受金について意味を理解し、根拠ある説明ができています。 T1 T2 【B】 Google Forms

☆「生徒の様子」や「ICT活用」について、感想や気づいたこと

I <導入>参観のポイント ①本時の目標 ②授業の流れ

- ・初めに仕訳をさせ、本時の目標の意図を生徒に示していた。
- ・生徒は悩んだり周囲を確認したりして前向きに取り組もうとしていたが、生徒にとっては基本問題ではなかった。
- ・本時の目標が設定された目的を生徒に気づかせる内容だった。
- ・Webタイマーを活用して時間を区切り生徒に導入部分の仕訳問題に取り組ませていた。
- ・意欲的に取り組んでいた。生徒間でコミュニケーションがとれていて、よく声が出る。
- ・本時の内容に関わる仕訳問題の演習を通して、教え込むのではなく、まずはやってみて失敗させてみることにより、生徒の気づきを引き出す工夫ができていた。
- ・生徒をよく観察して、指名する生徒や悩んでいる生徒に声をかけていた。T2の先生とまんべんなく生徒を観察し、声をかけていたと思う。
- ・スクリーンが小さいため、文字が見えていない生徒もいるのではないかと思います。

II <展開>参観のポイント ③生徒の「なぜ」を引き出す発問の工夫

④生徒の主体的・探究的・協働的に取り組む学習活動

- ・タブレットを使用して各自調べさせ、さらにグループ活動で、他の意見も聞くことで自分の理解度を高めていたと思う。
- ・ICTの活用方法が、調べ学習にならないようにしなければならないと感じた。
- ・グループで問いに対して協働している内容だった。
- ・この時間のテーマが「なぜ、前受金は負債で前払金は資産なの？」だったので、1時間いっぱいこれについて調べ、共有し、互いの意見を発表することがメインだった。自分で考える部分、情報を共有する部分、他者の意見を聞く部分と全てがバランス良く取り入れられていたと思う。
- ・理解して分かる言葉にすることで意味を深掘りできていたのではないか。
- ・机間巡視の際、グループ活動のゴール(「誰もが納得する説明を共有すること)」を明確に提示し、生徒に細かに指導をしていた。
- ・個人からグループで調べたり考えたりした内容を深める事で、内容を深めたり協働して取り組むことができていた。生徒が調べる検索のキーワードがほとんど同じだったため、考えさせる方法などを工夫できるといいと思います。
- ・通常の指導では見過ごしてしまいがちな「仕訳の科学的根拠」を生徒自身で調べることで、深い学びとなったと思う。

III <整理>参観のポイント：本時の目標に対する振り返り

- ・Google Formsを利用し、授業のまとめと理解度の確認をしていたところは自分も取り入れたい。
- ・整理に導入のような問題を解くようなことができれば、生徒の理解度を確認することができたと思う。
- ・最後にGoogle Formsで自分の考えをまとめて送信する部分にICTが活用されていた。毎時間は難しいかもしれないけれど、単元毎などに取り入れると評価にも入れやすいと感じた。
- ・Google Formsで集約したものを生徒に共有することで学びを深められないか。
- ・意見共有の場面で、短時間で話を聞きながらのメモなどで生徒も大変そうでした。ICTを活用することを考えてもいいと思います。

- ・検索のためのキーワードが同じであったため、同じサイトを生徒が開いていたため、同じような回答が多かったと思いました。悪いわけではないのですが、違う答えが出たらさらに学びが深くなると思いました。

☆授業全体を通して、感想や気づいたこと

- ・生徒は、活発的に活動していた。
- ・自分の授業ではTTで授業を行うことはないのですが、TTで授業を行う意味を考えさせられた。ICTの活用方法について難しさを感じた。
- ・他教科の授業でも参考になる内容だった。
- ・自分ならばこの難しい単元をどう授業するかを考えた。「キーワードを設定してそれを必ず使って説明すること」などにすればある程度同じ着地点にまとめられたのかなと思う。とても勉強になった。
- ・グループワークの後に、出た意見を共有する場面でICTを活用できないか。
- ・簿記会計ではかなり難しいテーマの授業だったと思いますが、どのように取り組ませるかなどのイメージができ、自分の授業に活かせる参観になりました。私も手段や方法などを工夫してやってみたいと思います。ありがとうございました。
- ・準備がしっかりとされていて授業の雰囲気も良く、素晴らしいと思いました。お疲れ様でした。
- ・検定に合格することが目的化してしまっているが、一つ一つの事象を深く学ぶことが大切であることを、改めて考えることができた。
- ・生徒が熱心に取り組んでいる姿勢が印象的でした。TTのよさが活かされている授業だったと思います。

令和6年度 指導主事訪問研究協議会〈商業科〉記録

日 時：令和6年10月29日(火) 13:40～14:30

場 所：204教室

司 会：小 林 稔 幸

授業者：T1 石 崎 絵里香 T2 山 崎 翼

記 録：後 藤 富 貴

協議題 協働的な活動におけるICT活用について

1 はじめに

- ・指導主事紹介(教頭より)
- ・協議会の流れについて(司会より)

2 授業者(石崎)より

- ・今回の授業は、東北商研大会で青森県の会計分野の研究会の発表内容をもとに実施したものである。言葉の意味を理解していないと、簿記会計分野の理解につながらないという発表に自分も同意見であったため、今回の授業でもそこを重視した。
- ・協働的な学びとして、グループで考えを共有し、意見を出し合うことで考えを深める活動ができると考え、タブレットや教科書を使わせて自分の言葉でまとめるという活動を考えた。しかし、どの生徒も、ネットに出ている言葉だけを使っての説明で同じような内容で終わっていた。先生方からは、ICTをうまく活用しながら協働的な学びを行うためにはどういう方法があるのか、ご意見をいただきたい。

3 質疑応答

- ・考えを深めさせるために、工夫した点はどこか。
→発問の前に、こちら側から生徒の疑問を想定し、問いかけをした。
- ・T2の役割は何か、どのような視点で授業の評価をしているのか。
→普段の授業では、生徒の作業状況を確認している。評価については、グループワークの取組の中で、自分の考えを書いているか、他人の意見を写すにとどまっていないかどうか注目しながら机間巡視している。
- ・プリントを使った学習をしていたが、最後のまとめでGoogle Formsにした理由は何か。
→T2と二人で評価をしているため、プリントよりもGoogle Formsの方が二人で確認しやすいからである。

4 参観者ワークショップ～グループ別協議 協議題にそった改善策について～

- ・ネットに頼らずに、自分たちがもっている知識で話し合わせるのはいかがでしょうか。こちらから質問を投げかけてそれについて話し合わせることで、協働的な学びになるのではないかと。話し合いの後にネットや教科書で調べる方法もある。
- ・調べて分かることと、考えて分かったことは違うのではないかと。

- ・複数のサイトで調べさせて、その違いに気付かせるというやり方も効果的である。ICTと教科書の記述との違いに気付かせ、なぜ違うのかをグループで話し合わせることで様々な意見が出て、学びにつながるのではないか。
- ・調べる観点をグループごとに分けるという方法もある。または、班内でネットから調べる人、教科書や問題集から調べる人などと役割分担してもよかったのではないか。
- ・Google Formsを使ったアンケートもいいが、生徒自身が確認できるようにしたらよい。グループの代表者の発表内容が見える形にしたほうが生徒の理解が深まるのではないか。
- ・(教頭) 協働的な学びをするときに一番大事なことは、最初に、生徒一人一人に自分の考えや意見を持たせることである。今回の授業では、導入の場面で白紙の生徒もいた。そういう「分からない」「お手上げだ」ということも自分の意見である。ネットの作業やグループ活動の前に、まず現在の自分の状況を確認させることが大事である。

5 指導助言

秋田県教育庁高校教育課 指導チーム指導主事 近藤 俊春 先生

- ・研究テーマを意識した授業構成になっており、自分の言葉で、相手にわかるよう話し方で伝える、という授業者からの指示は、深い学びのための手立てだと思われた。
- ・ICTを活用すればよい授業になるというわけではない。深い学びにつなげるためのICT機器の活用が大事である。
- ・指導案の単元の評価基準が「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三観点になっていたが、専門教科の場合は、「知識・技術」なので注意してもらいたい。また、今回の指導案では、単元の目標が評価規準に基づいて3つに分けて記されていた。その場合、「主体的に取り組む態度」ではなく「学びに向かう力、人間性等」であり、語尾の表現が「～すること」になるので、今後このような形で学習指導案を作成してもらいたい。

令和6年度 指導主事学校訪問 全体協議会

日 時：令和6年10月29日(火) 14:40～15:20

場 所：会議室

司 会：佐 藤 かおる

記 録：須 磨 薫

1 指導主事紹介(瀧澤校長)

秋田市教育委員会学校教育課 副参事指導主事 花 田 守 先生

秋田市教育委員会学校教育課 副参事指導主事 工 藤 香 苗 先生

秋田県教育庁高校教育課 指導チーム指導主事 浅 野 朋 央 先生

秋田県教育庁高校教育課 指導チーム指導主事 近 藤 俊 春 先生

今年度の研修テーマ

主体的・探究的・協働的に取り組み、学びを深めるための授業実践
～ ICTの効果的な活用／「問い」を生み出す授業展開～

重点的取り組み事項

- ① 授業公開週間の実施 生徒の共通理解と授業改善に役立てる
- ② 職員研修の実施 SDGsとの対応、授業実践例の集約
- ③ 校外研修の奨励 Google Classroomの活用

学校としては、授業改善の意識を常に持ちながら、あわせて研修の充実に向けて実践的な取り組みを進めている。指導主事の先生方には校内授業参観や研究授業を通して感じられた授業の感想、授業改善のあり方、本校の課題等についてご指導いただきたい。

2 総評

(1) 秋田県教育庁高校教育課 指導チーム指導主事 近藤 俊春 先生

- ・生徒たちの服装、あいさつ、起立回答がきちんとしていた。
- ・校舎が若干手狭。

研修テーマについて

主体的・探究的・協働的に取り組み、学びを深めるための授業実践
～ ICTの効果的な活用／「問い」を生み出す授業展開～

- ・ICTを活用することによって主体的・探究的・協働的なものへとつなげていかなければいけない。
- ・知識を詰め込むのではなく応用する力につなげていけるかどうか。
- ・多くの授業で目標、本時の流れが示され、見通しをもった学習がなされている。
- ・プロジェクターを多くの授業で活用している。
- ・言葉で伝える場面、ペアワーク、グループワークなど、工夫された授業づくりがなされている。

- ・現在求められている力に加えて、情報収集能力、課題解決能力など新しい力がこれから必要とされてくるので、授業の各場面でどのような力が身につけられるか考えていてもらいたい。

生徒指導について

- ・事故報告102件中、交通事故48件。そのうちほとんどが自転車が関係しているもの。交通安全の十分な指導をしていただきたい。
- ・不審者への対応。
- ・家出、深夜徘徊の増加。
- ・普段の生活からの変化をみること、校内での情報交換を活発に行ってもらいたい。
- ・いじめの早期発見、初期対応、早期対応、自己有用感を育む場面を設定する。
- ・保護者に誠実に対応していく。

(2) 秋田市教育委員会学校教育課 副参事指導主事 花田 守 先生

- ・授業態度、話し合っている様子からも落ち着いた雰囲気を感じられる。
- ・AKISHOPをはじめ、キャリア教育の推進、日頃の生徒と教師の関係性が秋田商業をつくっている。

秋田市学校教育の基本方針、学校経営について

本市教育の目指すべき姿

あきたの未来を ともにつくり ともに生きる 「自立と共生」の人づくり

学校教育の目標

「志を持ち『徳・知・体』の調和がとれた子どもをはぐくむ教育の充実」

重点項目

- 1 豊かな人間性の育成
 - 2 確かな学力の育成
 - 3 健やかな心と体の育成
 - 4 今日的な課題に対応した教育の充実
 - 5 系統性・連続性を踏まえた教育の充実
 - 6 家庭・地域・関係機関等との連携体制の充実
- ・主人公は生徒であり、生徒のための学校づくり、教職員が元気な学校づくりを推進している。
 - ・企業、地域と協力しながら、育てた生徒が地元をつくる、秋田をつくることを意識した学校経営をしている。

学習指導、一般授業

- ・ICTについて、授業のねらいにせまる効果的な活用がなされなければならない。
- ・QRコードをはじめ、学び方の選択、考えや学びを共有する場面など多くの場面での活用が考えられる。
- ・ICTの特長を活かしていくと同時に、デジタルの良さ、アナログの良さを整理する。
- ・1B家庭基礎 生活経験の乏しさが感じられるが、その実態を捉え補う手立てがなされている。
- ・1Dビジネス基礎 異なる検索キーワードを活用することで、個別最適化が図られている。

- ・2A商品開発と流通 学習内容が生活に直結しており、情報を批判的に読み取る力を身に付けられる。
- ・2F書道 I 板書の使い方 広いスペースを活用し、仮名の変化が読み取りやすい。
- ・3CD柔道 投げた相手への気遣い、想う心を育む。
- ・3E生物基礎 会話のキャッチボールで授業が進み、日頃からの人間関係が感じられる
- ・3F数学演習 Google Formsを活用し自作の問題に取り組み、学習の個別化が図られている。
- ・学校教育の重点より
 - ① ICTを活用した教育の推進のため、子どもたちの学びをより豊かで広がりや深まりのあるものにするためには、課題解決の方法を子ども自身で決めたり、新たな課題を発見したりするなど、自ら学びを深めることができるよう、各教科等の学習でICTを積極的に活用して、適切に情報を選択する力や、得られた情報と自分の発想とを組み合わせる新しいものを生み出す力を身に付けさせることが大切。
 - ② 子どもがICTを日常的に活用できるよう、全教職員でタブレット端末等の活用方法について共通理解を図ったり、スキルの向上に努めたりすることが必要。

教育委員会からのお願い

- ・すべての子どもたちの幸せのために、安心安全な居場所としての学校づくりを
 - ① 生徒一人一人を大切にすること
自己有用感、自己存在感 共感的な理解力を育む教師のことは、姿勢
 - ② 不登校児童生徒への支援
将来の自立に向け、前向きな声かけをする 学校や家庭、関係機関との連携
 - ③ 個人情報適切な管理
- ・学校教育の重点より
危機管理意識の向上、電子データの適切な管理、紙媒体からの流出の防止、サイバー攻撃・ウイルス感染への対策

3 校長より

秋田市教育委員会の皆様には学習環境や教育設備をはじめ、多くの面で多大なるご支援、ご配慮をいただいている。また、秋田県教育委員会の皆様には県立学校と同様に、学習指導や生徒指導、進路指導、職員研修等の分野においても、ご指導、ご支援をいただいている。

本校は、創立以来の教育方針として、いかなる時も地域産業の担い手として社会を支える生徒を世に輩出するという学校創生期からの理念がある。その理念を大事に、地元秋田を支える人材の育成が、専門高校である本校の使命のひとつだと思っている。

ひとりひとりの生徒を大事に育て、どのような状況下であっても、生徒の成長のために学びをとどめることなく指導をするという気概をもって職務の遂行に努めたい。両委員会の皆様には、今後とも引き続きご指導を賜りたい。

1 今年度の目標

- (1) 教職員の資質向上と生徒理解・指導に役立つ校内研修を実施する。
- (2) 指導力の向上と授業改善及び生徒理解のため、授業公開週間を実施する。
- (3) 校外研修の情報を提供し、参加を奨励する。

2 今年度の重点的取り組み事項

◎校内研修は学校全体で取り組むことを前提とする。

- (1) 校内研修の円滑な実施
時勢に合った研修を提案し、課題について教員間の共通理解を図る。
- (2) 授業公開週間の推進
研修テーマを設定し、アピール授業実施により活性化を図るとともに、参観者の掌握を徹底する。
- (3) 校外研修の奨励と研修者の掌握
適切な時期に適切な方法で案内し、研修参加者を一覧にして掌握する。

3 今年度の研修テーマ

主体的・探究的・協働的に取り組み、学びを深めるための授業実践
～ ICTの効果的活用／「問い」を生み出す授業展開～

4 今年度の実施研修内容

☆：ICT推進委員会と連携 ★：保健教育相談部と連携

時期	研修内容等	対象	研修形態
4/ 1	Google Classroom「研修部の部屋」開設	全職員	研修等の情報提供
4/ 4	① 秋田県教職員研修体系改訂と研修講座案内について ② 研修部ロッカーの活用について	全職員	職員会議
4/26	令和6年度研修テーマについて	全職員	職員会議
5/23	令和6年度授業公開週間実施要項提示・説明	全職員	職員会議
6/ 4～6/19	授業公開週間(前期)	全職員	アピール授業・授業公開
6/24	授業アンケート実施要項提示	全職員	職員会議
7/23★	救急救命講習	全職員	職員会議前研修
7/23	SDGsを取り入れた授業実践について	全職員	職員会議後職員研修
7/23	研修部の本棚へ書籍入荷	全職員	研修部の本棚
9/24	授業アンケート1回目結果報告	全職員	職員会議
10/22～11/1	授業公開週間(後期)	全職員	アピール授業・授業参観
11/11	Google スライド勉強会	希望者	実践研修
11/25	授業公開週間実施後アンケート結果報告	全職員	職員会議
11/25	「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体化した授業展開について	全職員	職員会議後研修
12/24	「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体化した授業展開についての意見・実践例共有	全職員	職員会議
12/23,24☆	ICT機器おさらい会	希望者	実践研修
1/23	授業アンケート2回目実施報告	全職員	職員会議
2/26	中堅教諭等資質向上研修報告	全職員	職員会議
随時	『研修部の本棚』への書籍の追加	全職員	書籍の設置・貸し出し
～年度末	年間の研修記録を集録し、研修集録にまとめる	全職員	配付

令和6年度 授業公開週間 実施報告

1. 趣 旨 お互いに授業を参観し合うことで、指導力の向上と授業改善を図るとともに生徒理解に役立てる
2. テー マ 主体的・探究的・協働的に取り組み、学びを深めるための授業実践
～ ICTの効果的活用／「問い」を生み出す授業展開～

【授業をするに当たっての重点的取り組み事項】

- ① 【本時の目標】を提示
- ② 【授業の流れ】を明示
- ③ 生徒の「なぜ」を引き出す発問を工夫
- ④ 生徒が主体的・探究的・協働的に取り組む学習活動の場面や時間を設定
(グループ活動・調べ学習・考察・発表など) ※ICT機器の活用
- ⑤ 【本時の目標】に対する振り返り

3. 期 間

前 期	6月 4日(火) ～ 6月19日(水)
後 期	10月22日(火) ～ 11月 1日(金)

4. 実施方法

- (1) 各教科 各教科代表者1名以上(アピール授業者)
商業科は分野ごとの代表者1名以上
家庭科・芸術科については毎年の実施は求めない
*アピール授業実施前に最低1回は科会を開き、科全体で協力してその授業に関わる

(2) アピール授業者

- ① 授業日時が決まり次第「アピール授業一覧」に授業内容を記入(授業変更板に掲示)
- ② 学習指導案(略案)を作成

「校務分掌 → 研修部 → R6 → 授業公開週間」に保存

- (3) 全職員 自教科1時間以上 + 他教科1時間以上 = 計2時間以上参観
家庭科・芸術科は他教科2時間以上参観
参観はフリー形式とし、授業時間の半分(25分)は参観する

*「参観シート」は1授業につき1枚持参、Google Formsに参観後1週間以内に入力

*Google Formsの回答状況で参観者を掌握 → 研修部でデータをとりまとめ → 授業者へ

国語科 学習指導案

授業者：柴 田 佳代子

実施日時・場所：令和6年6月12日(水) 1校時
3年E組教室

実施科目：論理国語

学年・クラス：3年E組

使用教科書：新編論理国語(大修館書店)

1 単元名 評論「ミロのヴィーナス」 清岡卓行

2 単元の指導目標

- (1) 「量の変化」と「質の変化」などの抽象的な表現を適切に理解する。
- (2) 「ミロのヴィーナスの腕は失われている必要があった」という筆者の主張の根拠を理解する。
- (3) 教科書の写真などを参照して、筆者の主張するミロのヴィーナスの魅力を具体的に理解する。

3 生徒の実態

男子20名、女子の22名の計42名のクラスである。国語に苦手意識をもつ生徒はいるものの、課題等には集中して取り組むことができる。好奇心の強い男子生徒が積極的に発言することで授業が活性化し、ペアワークや話し合い活動もスムーズに行うことができる。

4 単元の評価規準(4時間)

(1) 指導計画

- 第1時 本文の通読と語句調べ
- 第2時 第一段落の読解(本時)
- 第3時 第二段落の読解
- 第4時 第三段落の読解、自分の意見をまとめる

(2) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
「量の変化」と「質の変化」などの抽象的な表現を適切に理解している。	「ミロのヴィーナスの腕は失われている必要があった」という筆者の主張の根拠を理解している。	教科書の写真などを参照して、筆者の主張するミロのヴィーナスの魅力を具体的に理解しようとしている。

5 本時の計画

(1) 本時のねらい

- ・「特殊」と「普遍」がそれぞれ具体的にどのようなことを意味しているかを理解する。

(2) 授業の展開

	学習活動 (50分)	指導上の留意点	評価の観点 (方法)
導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・本単元及び本時の目標を確認する。 ・復元案を紹介する。 		
展開 (35分)	<ul style="list-style-type: none"> ・第一段落を音読する。 ・重要な点を確認させる。 ①「特殊から普遍への巧まざる跳躍」とはどのようなことか。 ②「部分的な具象の放棄による、ある全体性への偶然の肉迫」とはどのようなことか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音読を通して、抽象的な表現や分かり辛い表現を確認させる。 ・それぞれの表現が、両腕のないミロのヴィーナスまたは両腕が復元されたミロのヴィーナス、どちらを指しているのかを整理させる。 ・対比になっていることをとらえさせる。 	<p>両腕のないミロのヴィーナスに筆者がどうして魅力を感じているかを理解する。</p> <p>ワークシート 話し合い (ペア) 発表</p>
まとめ (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の振り返りをする。 ・第二段落の予告をする。 		



☆「生徒の様子」や「ICT活用」について、感想や気づいたこと

I <導入>参観のポイント ①本時の目標 ②授業の流れ

- ・前時に書かせたであろう生徒の「復元案」の紹介は、撮影して、あるいはスキャナーで読み込むなどしてGoogle スライドで提示すれば教室後方の生徒にもよく見えると思う。
- ・①途中ではあったが、目標は提示されていた。②押さえておきたいポイントを、生徒たちの予習した内容をふまえて確認する導入がよかったと思います。
- ・授業におけるしかけをねらったのなことかと思うが、導入時に目標や流れが明示されておらず到着点が分かりにくかった。
- ・板書や掲示など、Google スライドや書画カメラを使うと効率的になる場面があった。
- ・生徒は発問によく反応しており、教師との関係性の良好さがうかがえた。
- ・本時の目標は「～できる。」としましょうと、指導主事に指摘されたことがあります。
- ・先生との信頼関係が出来ていて、生徒が指示をよく聞いて活動している様子がよかったです。
- ・①②ともに明確に示されていたため、生徒たちは手際よく取り組んでいた。
- ・①本時の目標は明確であった。提示するタイミングはもう少し工夫して早く出してもよかったのではないか。(本時の目標を早く提示しないと生徒は本時の着地点が見えず、展開の意味が理解できないことが多い。)
- ・②授業は面白く生徒の理解度も高かったと思う。

II <展開>参観のポイント ③生徒の「なぜ」を引き出す発問の工夫

④生徒の主体的・探究的・協働的に取り組む学習活動

- ・「個」と「全体」の学習活動がうまく具合に往還していると感じた。
- ・生徒からの発言は黒板に書き留めておくなどしたほうがよかった。(黒板がほとんど使われていなかった)
- ・「この作品が難しい」という感想を生徒から引き出す必要性はあるのだろうか。
- ・④理解するのが難しいと感じるところに線を引ながら聞くことや、ペア学習など活発な授業態度であったと感じました。前時に生徒たちが想像力を働かせて描いた復元案は、実物投影機かPDFデータにしてプロジェクターで見せると、さらに興味をもったのではないかと思います。
- ・ペアで音読させた時に、分からない語句を共有させておいてもよいかと感じました。文章全体の印象を生徒に手短かに言わせる方法もあるかと思います。分からない語句は複数の生徒を指名し、黒板に書かせるなどして全体で共有してもよいかと感じました。板書の計画等があるため、可能かどうかは一概に判断できませんが。生徒はしっかり発言しており、素晴らしかったです。
- ・質問やプリントが、生徒の想像力や思考力を引き出すような工夫がなされていると思いました。
- ・③日頃の授業から生徒との信頼関係が構築されているのが分かった。分かりやすく、楽しく取り組める発問だった。
- ・③「『原型』『復元案』のどちらにあてはまるか」という問いが、本文の読みを深めていく上でも効果的な発問だった。④ペアで積極的に取り組んでいた。ミロのヴィーナスの腕の復元図を各々に描かせ、そこから本文の読解につなげていく活動が興味深く、面白かった。ICTも効果的に活用し、生徒の知的好奇心を引き出していた。
- ・③難しい表現をピックアップさせる作業は生徒を食いつかせたと思います。④難解な表現のニュアンスを生徒の言葉で表現させたのは思考を深めたと思う。
- ・ペアワークでもグループワークでも生徒が意欲的に取り組む場面が多く見られて良かった。

III <整理>参観のポイント：本時の目標に対する振り返り

- ・先生の独特なリズム感が、生徒を授業へと引きつけていた。
- ・最後の部分で、特殊と普遍が具体的に意味する内容についてしっかり触れられており、これからの授業展開も面白そうだと感じる単元でした。参観させていただき、ありがとうございました。
- ・最後時間が足りず、教師が畳んでしまったという印象は否めないが、次時に同クラスでポイントを確認したところちゃんと答えられたので、ねらいは達成できていると感じた。
- ・先述したとおり、生徒たちとの信頼関係が十分に構築されていたため、発言しやすい雰囲気があり、積極的に学習活動に取り組む姿が印象的であった。
- ・生徒数が多いクラスの授業であったが、しっかりと全員授業に参加していた。
- ・音読は読解するための有益な手立てになる。授業者の範読が事前であり、その上で生徒が音読することは理解度を高めるので、今後も続けていただきたい。

☆授業全体を通して、感想や気づいたこと

- ・音読や生徒の活動などが効果的に行われていたと思う。生徒が読んだところから主題へと結びつけたのは、いい流れであった。
- ・生徒の学習活動についての指示の言葉が、もう少し具体的であればよいと感じた。
- ・教科書を準備しているかどうかは、授業が始まる段階で確認すべき。
- ・50分間で学ぶ内容としては、薄かった(浅かった)ように思う。もっと生徒が思考・表現し、授業が終わったときに「疲れた、けど面白かった」と感じられるような授業になるよう工夫してほしい。
- ・少々まとまりに欠いた感があったが、とても明るくよい雰囲気の授業であった。
- ・評論の定番教材で研究授業に挑戦する試みは素晴らしいが、教科的には指導案を含め確認したい点が多数あるので、科会で疑問を解決したい。
- ・生徒の様子を見ていると、様々な考えが出てくる学級であるという印象を受けました。発言をどう拾っていくかが難しいかもしれませんが、授業の広がりがありそうでした。
- ・授業者の指示が明確で説明がわかりやすく、生徒が良い表情で授業を受けている様子が印象的でした。授業前からスクリーンに単元のタイトルや本時の目標等を映しておく、よりスムーズにいったのではないのでしょうか。
- ・内容が盛りだくさんだったこともあり、予定時間内に終了できなかったことが残念だった。
- ・評価の観点にあった「両腕のないミロのヴィーナスに筆者がどのような魅力を感じているのか」を問いにして授業を展開してもまた面白かったかなと思う。
- ・授業者の雰囲気も相まって、明るく楽しい学習環境が何よりも良かった。生徒たちも興味を持って授業に臨めると思う。
- ・作品の世界観を感じつつ、思考してほしいポイントを丁寧に押さえた、教師の力量と、生徒との信頼感が感じ取れる授業であった。
- ・日頃から生徒と良好なコミュニケーションが図れていることがうかがえた。良好なコミュニケーションが今後もクラスの学習意欲に結びつくと思う。今はとにかく「今年度の研修お疲れ様です」と柴田先生の一年間をねぎらいたい。

英語科 学習指導案

授業者：今野千佳

実施日時・場所：令和6年6月18日(火) 1校時
3年B組教室

実施科目：英語コミュニケーションⅡ

学年・クラス：3年B組標準クラス

使用教科書：BIG DIPPER English Communication II (数研出版)

1 単元名 Lesson 7 Learning from Nature

2 単元の目標

- (1) 生物の体の仕組みを模倣してどのように電化製品の部品が開発されているか理解する。
- (2) 聞いたり読んだりしたことを発展させ、自分の考えや意見を表現することができる。
- (3) 商品開発における近年の流行に興味をもち、既習事項を使ってさらに深く学ぼうとする。

3 単元とCAN-DO形式での学習到達目標との関連

まとまりのある説明文を理解したり、実用的な文章から必要な情報を得たりすることができる。

【GRADE 3 読むこと】

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・ 語句や言語材料（省略／動名詞の意味上の主語／未来進行形／完了形の不定詞）を理解している。 ・ 語句や言語材料を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりする技能を身に付けている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生物をヒントにして開発された電化製品や飛行機などについて理解を深めるために、各Part本文の要点を把握している。 ・ 本文内容に関する話題について、自分の意見を表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生物をヒントにして開発された電化製品や飛行機などについて理解を深めるために、各Part本文の要点を把握しようとしている。 ・ 自分の考えをわかってもらえるように既習事項を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりしようとしている。

5 単元観

本単元は、生物の体の仕組みを模倣して電化製品の部品が開発されていることを取り上げている。シャープ株式会社が提唱する「ネイチャーテクノロジー」の第一人者である大塚雅生氏の半生とともに、どのような生物が電化製品の設計のアイデアになったのか、またそのメリットは何かを整理しながら学ばせたい。また、扱われている言語材料は省略・動名詞の意味上の主語・未来進行形・完了形の不定詞である。本文や文法問題を中心にその使用に触れさせ、働きを理解させていく。

6 生徒観

基本的な学習態度が身に付いており、英語の学習に対して前向きな生徒が多い。発言を求められたり、ペアワークをしたりする場面でも積極的に活動を行おうとするが、その一方であまり深く考えずに発言するなど学習姿勢に幼さが見られる時もある。

授業時の英語を使ったコミュニケーションにはまだ課題が見られるが、臆することなく挑戦しようとする意志のある生徒が多い点を生かしたいと考えている。生徒に自分の力を実感させ自信をつけさせるためにも、帯活動としてのスモールトークやイントラクションでの英語使用の機会を増やしていく必要がある。

7 単元の指導と評価の計画(総時数：13時間)

主な言語活動等 (◎本時の内容)	評価
<ul style="list-style-type: none"> ・ 生物をヒントにして開発された電化製品や飛行機などに関する英文を読んで概要をつかみ、要点を理解する。 ◎本文の内容を発展させ、既習事項を用いて自分の意見や考えを表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 活動の観察 ・ ベーシックノート ・ Google Forms ・ 定期考査

II 校内職員研修

8 本時の学習(本時8 / 13)

(1) 目標

生物を模倣した新しい製品を考え、既習事項を用いて自分の意見や考えを表現することができる。

(2) 本時の展開

過程	学習活動	教師の支援及び留意点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> • Small Talk 	<ul style="list-style-type: none"> ○復習も兼ねて既習事項である未来進行形の質問をする。
展開 35分	<ul style="list-style-type: none"> • 教科書のまとめの要約問題を解く。 • 本時の学習目標を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○まずは何も見ずに、次に教科書を見て、最後にベーシックノートを見て、と段階を踏むように指示をする。
	<p>生物を模倣した新しい製品を考え、既習事項を用いて伝えることができる。 What kind of products that imitate animals or plants would you like to develop?</p>	
まとめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> • 教科書のまとめの問題を解く。 • 解いた問題を参考にペアで自分たちのアイデアを考える。 • Forms に英文を入力し、送信する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○発想や英作の助けになるようなヒントを与える。 ○机間指導を行い、必要に応じて添削する。 ○Forms で送信された回答より選んだものをクラスの前で発表させたり、フィードバックを与えたりする。
	<p>[評価] 生物を模倣した新しい製品を考え、既習事項を用いて伝えることができる。 (活動の観察・発表・Formsによる回答) 【思考・判断・表現／主体的に学習に取り組む態度】</p>	
まとめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> • シャープ株式会社のホームページより、その他の生物模倣の例を学ぶ。 • 振り返りを行い、Forms で送信する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○題材に対する興味関心を高める。 ○目標と照らし合わせながら、本時を振り返らせる。

9 協議の視点

- ICTの効果的な活用とそれに伴う評価について



☆「生徒の様子」や「ICT活用」について、感想や気づいたこと

I <導入>参観のポイント ①本時の目標 ②授業の流れ

- ・前時学習内容の未来進行形の復習からの導入がスムーズで良かった。全体に英語を話す時間がもう少しあってもよいと感じたので、この導入でペアワークしてもよかったかもしれないと感じました。
- ・英語を用いて会話をしていくスタイルを毎日コツコツと積み上げてこられたことが見ていて伝わりました。聞いている生徒も聞いたりその文章を理解しようとしていたりしていて素晴らしかったです。
- ・授業の冒頭を参観できなかったのですが、流れの提示は確認できませんでした。目標の提示は確認できました。途中でスクリーンからは消えてしまいましたが、教科書内に提示されていたのでOKだと思います。
- ・前時の復習がテンポ良く進められていた。
- ・既習の文法を用いて答えさせる限定的な質問がよい。
- ・適切なICT活用だったと思います。特に生徒に作文させる際には有効な方法であり、私もやってみたいと思います。
- ・生徒は積極的に話し合いを行っていて、自分の意見を仲間と共有することに慣れている様子だった。このような授業の積み重ねが、思考を深めることにつながっていくのではないかと感じた。

II <展開>参観のポイント ③生徒の「なぜ」を引き出す発問の工夫

④生徒の主体的・探究的・協働的に取り組む学習活動

- ・動植物を参考にして商品開発をするという秋田商業の生徒にとって興味のある題材が大変よかったと思います。Google Formsでの意見集約・共有もよい方法だと思いました。もし可能ならば、自分たちの考えた文章を録音して

投稿して全体で共有すると、英語を話す時間が増えることと全体にもスピーカーを通してはっきり聞こえるのではと感じました。Canvaにもすぐさま録音して貼り付けられる機能があると聞いたことがあるので、そのようなツールの活用もありだと思います。

- ・ウィル先生に発音してもらったり、スペルを確認したり、TTが成立していると思いました。ドライバーなど製品の画像を黒板に貼り付けて常に生徒が見られる状態にしている生徒が困らない環境を提供していると思いました。
- ・生徒が意欲的に問題について発言したり、課題を探究的に調べ、回答していく姿が見て取れた。課題や生徒の回答の提示を、プロジェクターを使って効果的に行っていた。
- ・英作文を生徒が段階を踏んで書けるような工夫がなされており、素晴らしかったと思います。Google Formsで回答することによってクラスでアイデアをシェア出来る点が非常に良いなと思いました。生物模倣は動物や植物の特徴を知っていないと製品のアイデアを出すのが難しいと思うのですが、生徒から良い回答をうまく引き出していたと思います。ALTをもう少し活用してもよいかと思いました。
- ・ペアで独創的な案をだしていたので、主体的に取り組めていたと思う。
- ・生徒は主体的に探究的に、協働的に取り組んでいました。

特に、whistleをすぐに「笛だよ」、と教えるのではなく、最後に自分たちで気づくようにもっていった流れが素晴らしかったです。

- ・今何をするのかということが、先生の英語での指示に加えて、スクリーンにわかりやすく提示されていて、

II 校内職員研修

生徒が授業に参加しやすい環境が整備されていたと思う。

III <整理>参観のポイント：本時の目標に対する振り返り

- ・ Google Formsを用いて入力させて、それを全員で見て、英語と日本語で発表するというとてもしっかりと組み立てられているまとめ方ですごいと思いました。
- ・ 振り返りの時間はあまりとれていなかったように思います。次回以降の授業で行われるのでしょうか。
- ・ 最後に示した、企業のHPから引用した文の英訳による本時の復習は、「上手い！」と心の中で叫んでいた。生徒達も皆、授業終了間際にも関わらず集中して臨んでいる様子であった。
- ・ 声が出ていて良かった。
- ・ 生徒にアイデアを出させることが大変難しいと感じています。今回は、様々な視覚教材を用いるなど、生徒がアイデアを出したり、書かせたりするための工夫がたくさんあり、とても参考になりました。慣れればそうでもないかもしれませんが準備が大変なのではと思いました。

☆授業全体を通して、感想や気づいたこと

- ・ 生徒たちが興味をもって、意欲的に参加する素晴らしい授業でした。参観させていただき、ありがとうございました。
- ・ 教室環境も素晴らしく、生徒が前向きに積極的になれるような雰囲気は今野先生は作られているなど思い、とても勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ 全体的に生徒が主体的・意欲的に授業に取り組む姿が見られ、素晴らしい授業だと感じた。発言も多かった。課題が難しいように感じたが、生徒が教科書やインターネットを参考にしながら、なんとか形にするよう頑張る姿が印象的だった。
- ・ 授業の雰囲気がとても良く、生徒と先生のやり取りがスムーズでした。お疲れ様でした。
- ・ ICTをお互いに効果的に活用しており、テンポがものすごく良く、互いのフィードバックや確認が素早く行われていた。生徒も必要に応じて適切に調べる習慣が身に付いており、ICTの指導や授業での活用が定着していると感じた。参考にしたい。今野先生ありがとうございました。
- ・ 「協働」と「個別」の学びの往還が計画的になされていた。
 - △ペアでの作文のとき、時間の区切りを明示してもよかったのではないか。
 - △授業においてALTが果たす役割が、今ひとつ不明瞭だったように感じた。
 - △生徒の発言時の声量が小さいと、特に教室の端の生徒には聞こえにくい。
- ・ ALTの使い方は難しいところだ。
- ・ 日本語の使用も必要最小限だったし、ALTの先生の活用の仕方なども含め、すべてが大変参考になり、学びの多い1時間でした。ありがとうございました。
- ・ 英語を楽しみながら学ぶという授業だったと感じた。座学でありながら動きのある授業で生徒は終始顔を上げて授業に参加しており、自分の授業でもそのような授業を目指していきたい。

道徳 学習指導案（略案）

授業者：櫻 田 伸 吾

- 1 実施日時・場所：令和6年10月31日(木) 3校時 1年D組教室
- 2 実施科目：道徳
- 3 学年・クラス：1年D組
- 4 単元名：一冊のノート
- 5 本時のねらい：資料や他者の考えから家族への思いを巡らすことができる。
- 6 学習の流れ

学習活動（50分）	指導上の工夫・留意点	評価方法
○導入(15分) <ul style="list-style-type: none"> ・音楽を聴く ・(1)を答える。共有。 ・(1)の模範解答を書く。 ・(2)を答える。共有。 ・映像[11年捜し続けた父(日テレNEWS)]を見る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家族についてはデリケートな内容であるので、生徒個人の深い部分に入り込み過ぎないように注意する。 ・答えさせる内容は正解があるものではないので、教室内全体が生徒の考えや意見を尊重できる環境を、声かけを通して作り出す。 ・認知症の知識を与えることで、この題材が生徒にとって、身近な問題であることを認識させたい。 	プリントへの記入
○展開(25分) <ul style="list-style-type: none"> ・一冊のノートを黙読。「僕」の気持ちに傍線をする。 ・(3)を答える。共有。 ・(4)を答える。共有。 		
○まとめ(10分) <ul style="list-style-type: none"> ・(5)を答える。共有。 		



☆「生徒の様子」や「ICT活用」について、感想や気づいたこと

I <導入>参観のポイント ①本時の目標 ②授業の流れ

- ・導入部分で、生徒たちが引き込まれる工夫がなされ、参考になった。
- ・授業前と授業後で同じ問いに対して、生徒の答えが変化しているのを見て取れた。
- ・生徒にテンポ良く自分の考えを答えさせていた。

II <展開>参観のポイント ③生徒の「なぜ」を引き出す発問の工夫

④生徒の主体的・探究的・協働的に取り組む学習活動

- ・動画や読み物を活用することで、生徒自身が自分の内面に深く入り込んで考えている様子を感じることができた。
- ・2024新語・流行語大賞の候補に触れながら、今年のニュース・話題を紹介していました。
- ・先生の話聞きながら、生徒同士がニュースの内容について確認し合う場面も見られました。トクリュウ・ホワイト案件に触れる際には、前時に扱った闇バイトの動画に関連付けて補足説明するなど、深まりのある授業でした。
- ・生徒がリラックスして自由に発表できる環境がつくられ、良かった。
- ・授業時間だけでなく、その後も自分に問いかけられるような内容だった。
- ・③④テーマは難しく、それぞれの考えが違う内容になりそうであったが、音楽、ドキュメンタリー動画、教科書など多様なイメージを使って生徒の様々な感性に訴える手立てがあり、生徒の素直な考えを自然と深め引き出す工夫があった。生徒も意欲的に自分の考えを記入していた。

III <整理>参観のポイント：本時の目標に対する振り返り

- ・授業前と授業後で、自分自身に変化を感じた生徒が多かったのではないかな。
- ・教科書の教材で同じテーマで考えをまとめることで、難しいテーマをクラス全体で確認できる展開となっていた。指示が的確で生徒が今やるのがわかりやすいため、生徒も意欲的に考えを記入していた。

☆授業全体を通して、感想や気づいたこと

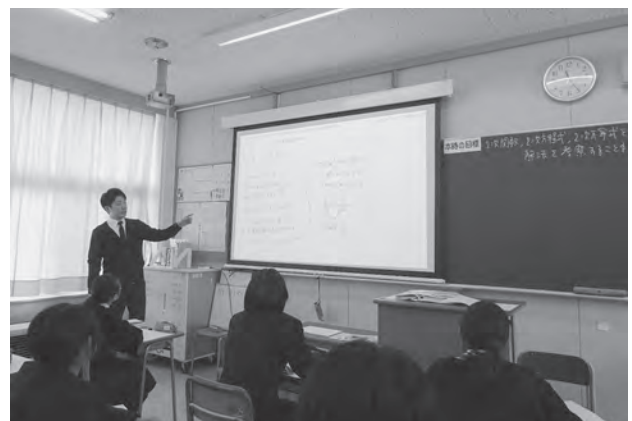
- ・生徒に世の中の動きについて興味関心を持たせる授業づくりをされていました。授業づくりにおいて、題材の設定が大事だと感じられる授業でした。
- ・心揺さぶられる、良い授業だった。
- ・授業時間を通して、常に自分への問いかけを引き出す工夫された授業だった。
- ・ICTを効果的に活用し、本時のテーマについて深く考えさせる授業が展開されていた。「家族」という身近なテーマを設定することで、どの生徒も真剣に取り組んでいる姿が印象的であった。
- ・家族との在り方、自分の在り方を振り返ることができ、今までの自分を振り返ることで今後の行動に変化が出てくると感じた。私自身も考えさせられました。ありがとうございました。

数学科 学習指導案（略案）

授業者：宇佐美 圭 介

- 1 実施日時・場所：令和6年11月1日(金) 3校時 1年E組教室
- 2 実施科目：数学I
- 3 学年・クラス：1年E組
- 4 単元名：2次不等式の応用
- 5 本時のねらい：2次関数、2次方程式、2次不等式を関連づけて解法を考察することができる。
- 6 学習の流れ

学習活動（50分）	指導上の工夫・留意点	評価方法
前時の復習（7分）	2次関数、2次方程式、2次不等式についての既習事項を確認させる。 使用するプリントをタブレット端末で投影し、確認しやすくする。	数学的な表現をすることができる。
応用例題5（15分） グラフを用いて考察しようとする。	発問：この問題を解くために何をイメージしますか。 2次関数のグラフを用いて考えさせる。 2次不等式の解がすべての実数であることと、2次方程式が実数解をもたない条件を混同しないように気をつけさせる。	グラフを用いて考察することができる。
練習42（10分）	生徒の解答をタブレット端末で投影する。	
応用例題4（7分）		
練習41（6分）		
まとめ（5分）	2次方程式の実数解の個数と2次関数のグラフの概形の関係について気をつけさせる。 生徒の解答をタブレット端末で投影する。	



☆「生徒の様子」や「ICT活用」について、感想や気づいたこと

I <導入>参観のポイント ①本時の目標 ②授業の流れ

- ・①わかりやすく示されていた。
- ・②変更があっても臨機応変に対応していた。
- ・本時やることが明示されており、安心感があった。タブレットペンやスクリーンを用いており板書の効率がよいと感じた。
生徒は明るい雰囲気興味を持って取り組んでいた。
流れや目標をスクリーンに写して確認しており、板書するよりも時間短縮できて、よいと思った。特に授業の流れが分かりやすく、見通しを持つことができよかった。
iPadを上手く活用し、生徒自身に考えさせながら解を導き出していたため、生徒の学習意欲を自然と引き出せていた。

II <展開>参観のポイント ③生徒の「なぜ」を引き出す発問の工夫

④生徒の主体的・探究的・協働的に取り組む学習活動

- ・③前時の学習内容も踏まえるなどいろいろ工夫されていた。
- ・④スクリーンに表示することで双方向的なやりとりができていた。
- ・「どういうイメージを持つか」は抽象度の高い問いだと感じた。これが数学的センスの壁か……！生徒間に積極的に発言・思考する雰囲気が見られた。授業をリードする生徒の存在が大きいと感じた。
- ・「これ分かったらすごいよ」等の発言で、難しい課題にも生徒はチャレンジしようとしていた。
- ・発問するタイミングもよく、直後に話し合う時間を設定しており、生徒同士が主体的に話し合うことができていると思う。
- ・生徒の目線に合わせて、iPadを活用しながら丁寧に進めていた。
- ・自分から先生に質問したり、発言したりする主体性も見られた。また、仲間同士で教え合う姿もみられ、協働的に取り組む姿勢もあり、日頃の指導の成果だと感じた。
- ・自前のタブレットを接続してスクリーンに映し出しながら解法を書き入れて説明する方法は、スマートかつ効果的だと思えた。
- ・生徒が過去に解いた問題を問題演習の際にスクリーンに提示する方法も、学習内容の連続性(発展性)を意識させたり、生徒の自己肯定感を高めたりする意味で効果的だと思う。

III <整理>参観のポイント：本時の目標に対する振り返り

- ・慌ただしかったが生徒は指示の通り動いていた。
- ・板書だとスペースの関係で消してしまうものも、iPadに書き込みして残っているので、振り返るのに便利だと思った。
- ・授業の振り返りをどのようにフィードバックしたり、次時の学習内容につなげたりしていくのか、気になった。

☆授業全体を通して、感想や気づいたこと

- ・今でも数式を見るだけで泣きそうになりますが、こんなふうに分かりやすくステップを踏んで教えていただけていたら、自分にも数学ができる人生があったかもしれないと生徒をうらやましく思いました。
- ・生徒が書く「振り返り」の項目・自力で分かった・相談して分かった・相談したけど分からなかった・相談せず分からなかった、が主体的な学習活動につながりそうだと感じた。
- ・難易度が高い内容だったと思うが、生徒はよく考えて授業に取り組んでいたと思う。
- ・「解法を考察する」という抽象的な目標より、「条件から立式する」など具体的なものの方が後の授業にも繋がると思います。お疲れ様でした。
- ・iPadを効果的に活用した無駄のない授業で、とても参考になりました。取り入れていければ、私も取り入れていきたいと思いました。お疲れ様でした。
- ・タイマーを鳴らして学習活動を区切らずとも、教師の声掛けだけで自然に次の学習活動に移行している様子が見られ、感心した。

保健体育科 学習指導案

授業者：佐藤 悠香

実施日時・場所：令和6年10月29日(火)

1年E組教室

実施科目：保健

学年・クラス：1年E組

- 1 本時の目標 精神疾患に関する偏見をなくすために自分が取るべき行動について考え、説明することができる。(思考・判断・表現)

- 2 授業展開 ：本時の目標 ：評価

段階	学習内容と学習活動	学習形態	教師の指導・支援
導入 (5分)	1. 社会課題として精神疾患に対する偏見があることを知る。 2. 目標を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 精神疾患に関する偏見をなくすために、自分が取るべき行動について考えよう。 </div> 3. 本時の流れを確認する。	一斉	・これまでの学習内容も復習する。 (誰でもかかりうる／高校生もなりうる／回復可能である／脳の疾患である)
展開 (35分)	4. 精神疾患の回復の過程について学ぶ。 5. 精神疾患への偏見の存在とその影響について学ぶ。(当事者インタビューの視聴) 6. 精神疾患に関する偏見をなくすために、自分が取るべき行動について考える。 ①なぜ、偏見が生まれるのか考える。 ②自分が持つ偏見をなくすために取るべき行動を考える。 ③周囲の人が持つ偏見をなくすために取るべき行動を考える。	一斉 一斉 個人 ↓ ペア ↓ 一斉	・精神疾患の有無にかかわらず、誰もが安心して自分らしく暮らすことができる社会をつくる一員であることを確認する。 ・当事者自身が持つ偏見の存在について、生徒から引き出す発問をする。 ・生徒の発言を生かし、偏見による影響について説明する。 ・当事者インタビューを視聴して理解したことも生かして考えるよう指示する。 ・机間巡視を行い、良い考えは発表させてクラス全体で共有する。
整理 (5分)	7. 精神疾患に関する偏見をなくすために、今後自分がとるべき行動についてまとめる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> [思考・判断・表現] 精神疾患に関する偏見をなくすために自分が取るべき行動を考え、説明している。(学習プリント) </div>	個人	・他の人の考えを生かしながら自分の考えをまとめるよう指示する。

☆「生徒の様子」や「ICT活用」について、感想や気づいたこと

I <導入>参観のポイント ①本時の目標 ②授業の流れ

- ・漫画「ブラックジャックによろしく」の場面を使って、生徒の興味・関心を引く工夫が見られた。
- ・生徒にとって身近な教材を取り入れることで、生徒が学習内容に興味を持って臨むことができていた。

II <展開>参観のポイント ③生徒の「なぜ」を引き出す発問の工夫

④生徒の主体的・探究的・協働的に取り組む学習活動

- ・「自分が取るべき行動」について自分の考えを書いてからペアと共有し発表する場面で、積極的に発表する場面から生徒の主体的・探究的・協働的に取り組む学習活動が見られた。
- ・「個」の活用から、協働的な学習活動への流れを通して生徒が主体的に学習に取り組める授業展開になっていたと思う。

III <整理>参観のポイント：本時の目標に対する振り返り

- ・扱いにくい単元であったが、教科書をほとんど使わず漫画の一コマを見せたり、動画を見せたりと生徒の反応が得られるような工夫が見られた。
- ・ICTを活用し、教材のひとつである漫画や動画を授業展開に合わせて取り入れることで、生徒が苦手意識を感じず、学習に臨めるよう工夫されていると感じた。

☆授業全体を通して、感想や気づいたこと

- ・教科書をほとんど使っていなかったが、「当事者インタビュー」(動画)を使っていたため生徒には説得力があったと感じている。
- ・教科書を本時はほとんど使わない授業展開であったが、先生のリードで「今何をすべきか」を生徒が意識し、学習に取り組んでいると感じました。



芸術科 学習指導案（略案）

授業者：浅野綾子

- 1 実施日時・場所：令和6年6月11日(火) 3校時 音楽室
- 2 実施科目：音楽I
- 3 学年・クラス：2年F組 音楽I 選択者
- 4 題材名：篠笛に親しもう
- 5 本時のねらい：甲音をよく響く音で演奏する方法について意識させる。
- 6 学習の流れ

学習活動（50分）	指導上の工夫・留意点	評価方法
<ul style="list-style-type: none"> ・前時の復習をする。(12分) 「さくらさくら」の冒頭二行の指遣いの確認 ・甲音をよく響く音で出す方法について考える。(15分) ・七メリの奏法について確認する。(8分) ・よく響く音で演奏する方法について意識して練習・撮影する。(10分) ・振り返りをする。(5分) 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ協議や演奏動画を観察するなどして、構え方・口の形・息の使い方などについて具体的な方法を挙げさせて共有する。 ・机間巡視をして、個別にアドバイスする。 ・撮影した動画を見て、改善すべき点を具体的に振り返らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業態度 ・振り返りプリント



☆「生徒の様子」や「ICT活用」について、感想や気づいたこと

I <導入>参観のポイント ①本時の目標 ②授業の流れ

- ・簡潔に分かりやすく流れが説明されており、生徒が取り組みやすくなっていた。
- ・生徒は最初から授業に集中しているようだった。
- ・①別紙に書いたものが、分かりやすく提示されていた。
- ・②導入、展開、まとめがしっかりと熟慮され計画されていた。
- ・目標が明確であり、生徒が意欲的に授業に参加していた。
- ・しっかりと明示され、生徒もその目標を理解していた。

II <展開>参観のポイント ③生徒の「なぜ」を引き出す発問の工夫

④生徒の主体的・探究的・協働的に取り組む学習活動

- ・タブレットを活用してYouTubeで模範演奏動画を見せたり、Google Formsで意見を集約したりすることで時間短縮や視覚化につなげ、分かりやすくなっていた。
- ・生徒に話し合いをさせる際の指示が明確で話し合いが活性化していた。
- ・生徒が取り組むべき課題を明確に示し、それについてグループ協議を行い、その内容をGoogle Formsに入力して全員で共有する。その一連の学習展開が見事だった。「主体的」「探究的」「協働的」のすべてがクリアできていた。
- ・③篠笛を上手に演奏するための疑問を、個人、グループ、全体と考えをまとめ、主体的・対話的で深い学びが展開されていた。
- ・個別指導を行い、なぜできないのか的確に指摘し、生徒も納得して練習していた。
- ・YouTubeで模範演奏をUPし、いつでもどこでも何回でも見られるので、何度も復習できる点が工夫されていた。また、自分の演奏を動画で撮り、振り返りをさせつつ、グループで共有して互いに課題を共有し、改善に努めていた。主体的・探究的・協働的な学習活動の模範的な授業であった。

III <整理>参観のポイント：本時の目標に対する振り返り

- ・短い指示を多く入れることで生徒が意欲的に活動していた。
- ・生徒は集中して授業参加していた。内容も展開も生徒が面白いと感じるものが多い授業であった。ICTの活用については、教師が生徒の学習活動を補助するために活用していた。生徒は個々のスキルを確認するために動画撮影し活用していた。グループ討議の後、全体の意見集約に使い、教師が紹介していた。
- ・ICTの活用について勉強になった。
- ・授業の導入で難しかった演奏を授業内でできるようになり、自分でどこを工夫したか振り返っていた。

☆授業全体を通して、感想や気づいたこと

- ・指示が明確であれば生徒が動きやすいことがわかりました。お疲れ様でした。
- ・ICTを非常に効果的に活用した実技指導ができていた。他教科の教員にもぜひ取り入れてほしいものだった。人数が少ないため、一人一人に行き届く指導ができていた。生徒に対する指示等の言葉がとても明瞭で分かりやすく、かつユーモアがあり、引きつけられた。
- ・グループ協議の場面で、教師はどのように・どの程度介入するか。教師が入りすぎると生徒間のコミュニケーションが深まらない。また、後列の4人について机の配置を変えるなどして意見交換がスムーズにできるように配慮したほうがよかったのではないかな。
- ・多くの教師の授業を参観してきたが、高校の授業において、1時間でここまで多くの要素を盛り込み、学習指導要領で示す授業改善の要点をすくいあげた授業はなかった。完成度も高く、内容はもちろん、担当者の力量、授業に対する覚悟、生徒に対する思いが感じ取れる授業であった。授業改善の教材として多くの教員に参観していただきたい授業であった。
- ・指導を受けた生徒達の習熟、上達には目を見張るものがあった。
- ・自分の授業でもICTを積極的に活用し、取り組んでいきたいと思う。
- ・主体的・探究的・協働的な学習活動の模範的な授業であり、勉強になった。
- ・教科書をほとんど使っていなかったが、「当事者インタビュー」(動画)を使っていたため生徒には説得力があったと感じている。

商業科 学習指導案（略案）

授業者：佐々木 一 秀 ・ 畠 沢 壮 志

- 1 実施日時・場所：令和6年6月6日(木) 4校時 105教室
- 2 実施科目：ネットワーク管理
- 3 学年・クラス：3年F組
- 4 単元名：情報通信ネットワークの構築方法(システム開発準備②) 5 / 5
- 5 本時のねらい：①3層クライアントサーバーシステムのデータベース構築ができる。
②仲間と協力しながら複数課題を解決することができる。

6 学習の流れ

学習活動 (50分)	指導上の工夫・留意点	評価方法
<p>【導入】(5分) ○前時の内容を確認する。</p> <p>【展開】(40分) ○下記の課題解決に向けて、ワークシートを確認する。 ○仲間と協力し、PC操作・プログラム入力等の処理をする。 ・Xampp・MYSQLの操作 ・SQL文の理解 ・データベース構築 ・レポート提出</p> <p>【まとめ】(5分) ○データベース構築の確認と課題提出について確認する。 ○「主体的に学ぶ」とは何かを確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・PBL (Project Based Learning：課題解決型学習) とジグソー法のエキスパート活動を応用したアクティブラーニングを取り入れた。 ・個別最適な学びができるように生徒の学習活動を観察し、生徒の習熟度に合わせた効果的な指導ができる連携されたTTに取り組み、学習内容の助言や主体的な活動等ができるアプローチをする。 ・作業にならないように教師側のアプローチは最小限に抑える。 <p>【PBL】 課題が与えられ、その課題を解決するためには、どんな知識が必要か、その知識を得るためにはどんなことを学ぶべきかを生徒が自ら考え、与えられた課題をクリアするために各方面からアプローチをする手法である。</p> <p>【ジグソー法】 自分が調べた内容を教え合い、他のメンバーに説明することを通して、学習効果を高め、自主的に考える力や積極性、協調性を培う、互いの知識を協同学習により埋めていくための手法である。</p>	<p>レポートにより思考判断表現の評価を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①指示どおりにデータベースが作成されているか。 ②レポートの作成方法は指示通りであるか。 ③レポートに工夫がみられるか。 <p>指導者の生徒観察から主体的態度の評価を付け加える。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①周囲と協力しながら課題解決を図っているか。 ②指導者役の生徒への加点評価を行う。

☆「生徒の様子」や「ICT活用」について、感想や気づいたこと

I <導入>参観のポイント ①本時の目標 ②授業の流れ

- ・本時の目標は授業の始めに確認していた。授業の流れも明確であった。
- ・対話、協働など目標が明示されていてよかった。

II <展開>参観のポイント ③生徒の「なぜ」を引き出す発問の工夫

④生徒の主体的・探究的・協働的に取り組む学習活動

- ・一斉に個々の作業に移行したので、全体に「なぜ」を促す機会は無かったが、生徒は疑問に思ったことを近くの生徒に質問し疑問を解決していた、
- ・生徒は協力して課題にあたっていた。公欠で休んでいた生徒も追いつこうと頑張っていた。

III <整理>参観のポイント：本時の目標に対する振り返り

- ・終始PCを活用しての授業だったが、使いこなしている生徒達はさすがである。教員のPC機器使用状況もよい。個々に自分の課題に取り組む生徒、他者に教を請う生徒、説明する生徒が同じフロアにいて、それぞれが皆動いていた。生徒主体の授業であった。
- ・生徒は想像以上に熱心に取り組んでいた。

☆授業全体を通して、感想や気づいたこと

- ・本時の作業内容を個々にこなしていた。難易度の高い学習に取り組んでいて、ここまで到達するのに多くの課題をクリアしてきたのだろうと感じる授業であった。
- ・出来る生徒は教える側にまわっていたのがよかった。



商業科 学習指導案（略案）

授業者：渡 辺 淳 一

- 1 実施日時・場所：令和6年6月11日(火) 4校時 201教室
- 2 実施科目：管理会計
- 3 学年・クラス：3年A・B組 基礎コース
- 4 単 元 名：業務的意思決定～内製か購入かの意思決定
- 5 本時のねらい：内製か購入かを定める際の金額を正しく算出し判断・決定する
- 6 学 習 の 流 れ

学習活動(50分)	指導上の工夫・留意点	評価方法
<ul style="list-style-type: none"> ・本時のねらいの確認 ・内製か購入かの比較 ・問題集演習<例2> ・プリント問題演習 ・問題集演習<例3> ・次時の予告 	<ul style="list-style-type: none"> ・内製か購入かの判断基準を確認する ・具体例を示して確認し比較させる ・変動費と固定費を復習し、差額原価収益分析を確認する ・条件が増えたときの意思決定を確認する ・遊休能力を転用する場合の関連原価を意識させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・アウトソーシングの考え方を理解できるか ・埋没原価も考慮して金額を算出できるか ・金額を算出し判断できるか ・<例2>、プリント問題、<例3>の違いを理解できるか



☆「生徒の様子」や「ICT活用」について、感想や気づいたこと

I <導入>参観のポイント ①本時の目標 ②授業の流れ

- ・車や飛行機の写真を交えてわかりやすい例を用いていた。
- ・「内製」か「購入」かの具体例として、自動車や飛行機について画像を示して説明していたところがとても理解しやすかったと思う。
- ・①本時の目標を分かりやすく確認していたが、板書していれば、生徒にはより理解できたと思う。
- ・②授業の流れは展開が長くなったが、内容を考慮すると、本時は例題を個人で解く時間が多くなるのもうなずける。

II <展開>参観のポイント ③生徒の「なぜ」を引き出す発問の工夫

④生徒の主体的・探学的・協働的に取り組む学習活動

- ・言語で伝えて、生徒が頭の中でイメージできるような言葉遣いだったと感じた。
- ・問題集やプリントの問題演習によって展開していくなかで、生徒達から率直な疑問・質問などの声が挙がり、その声を教師が丁寧に聞きながら工夫して説明を加えていくという「対話」が成立していた。生徒全員の授業に参加する姿勢が良好で、「学んでいる」実感を持ちながら授業に臨んでいる様子が窺えた。
- ・③内容そのものが難解で、普通に問題を解いていても「なぜ」と思う部分が多く、常に解決へと導くための教師の力量が必要である。
- ・④導入部分で教師が活用していた。生徒の活用はなかった。

III <整理>参観のポイント：本時の目標に対する振り返り

- ・生徒が学びやすい雰囲気の日頃から構築されているのだと感じた。そのため、積極的に発言していた。
- ・生徒は疑問に思うことを遠慮なく教師に質問していた。選択授業のいいところだと思う。

☆授業全体を通して、感想や気づいたこと

- ・とても勉強になりました。ありがとうございました。
- ・用語の概念をいかに正確に理解するか、専門科目の習得の難しさをひしひしと感じさせられました。
- ・全体的には教師の揺るがない力量で生徒を引っ張り上げる授業であった。内容が難しい授業であるから、本時の目標と振りかえりをしっかりすること。当然理解力が低い生徒もいるのでICT機器とグループワークをもっと活用すれば定着率が上がると思う。

令和6年度 SDGsを取り入れた授業実践例

教科名（科目名）	英語科（英語コミュニケーションⅡ）
授業者名	橘 克 明
SDGsを取り入れた場面	リユース、リサイクル、アップサイクルの教科書以外の具体例を考えさせる。（Lesson 9 From Recycle to Upcycle. 目標7.12）
生徒の反応	身近なところやよく知っているところ（ユニクロ、メルカリ、イオンなど）で行われているが、今まで気づかないでいた。
授業者の感想	身近なところで様々なSDGsの活動も行われていることも知って、生徒自身が少しずつでもSDGsの活動に取り組むようになって欲しい。

教科名（科目名）	地歴・公民科（公共）
授業者名	櫻 田 伸 吾
SDGsを取り入れた場面	<ul style="list-style-type: none"> ・内閣府 HP(Society 5.0) ・「20XX in Society 5.0 ～デジタルで創る、私たちの未来～」(経団連・YouTube)
生徒の反応	驚いている生徒が多かった。技術革新に自分自身が遅れないようにしようとする感想が多かった。
授業者の感想	技術の進歩とSDGs達成が関連付くことを感じる事ができたと思う。遠い未来の話ではないことを感じ取っていた。

教科名（科目名）	地歴・公民科（公共）
授業者名	櫻 田 伸 吾
SDGsを取り入れた場面	<p>社会権についての学習で貧困問題について動画を見せた。</p> <p>< SDGs 未来会議チャンネル (YouTube) ></p> <p>https://www.youtube.com/channel/UC2K_hsGc6gx_qW1_wrKOPdw</p>
生徒の反応	相対的貧困と絶対的貧困を理解し、貧困問題が日本でも身近な問題となっていることを理解していた。
授業者の感想	日本人が考える貧困と日本で問題になっている貧困が理解でき、生徒自ら貧困について考えるきっかけを作ることができたと思う。

教科名（科目名）	商業科（商品開発と流通）
授業者名	千葉知美
SDGsを取り入れた場面	<p>単元 第3章 商品の開発 2 プロダクトデザイン —環境問題や資源問題に配慮された商品の事例を調査し、発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タブレットを使用し、上記の調査を行う。 （商品名・企業名・概要をワークシートにまとめる） ★概要部分については、文章やスケッチで表現する。 ★その商品の事例がSDGs 17の目標のどれに当てはまるかを考える。 ・代表者3名が書画カメラをつかって発表。 ・環境、資源を配慮した企業の商品開発の事例を調べ、感じたことをワークシートに記入する。
生徒の反応	<p>生徒の振り返りより（原文のまま）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の身の回りでSDGsが多くあふれていることがわかりました。自分でできるSDGsについてできることを1つ1つ取り組んでみたいです。 ・自分がいつも使っているものでも、エコなものに変えることで地球が良くなると分かった。エコなものは意外と自分の身の回りがあると知った。 ・日本で環境のために色々活動していて安心した。普通の製品と変わらないのに工夫されていてすごいと思った。
授業者の感想	<p>想定していたよりも、生徒の中にSDGsに対する意識が広がっていることを感じた。次年度のビジネス実践で、本時で学んだことを取り入れながら活動に取り組んでほしい。</p>



教科名（科目名）	国語科（現代の国語）
授業者名	児玉 睦子
SDGsを 取り入れた場面	<ul style="list-style-type: none"> ・教材：『イースター島になぜ森がないのか』 ・活動のテーマ：倫理的（エシカル）消費を考える ・具体的な取り組み：エシカル消費とは何かを調べ、環境や社会に配慮した商品（企業）を一つ取り上げ、紹介するプレゼンテーションを行う（グループワーク）
生徒の反応	<p>本校生の環境倫理意識は高く、昨今の環境問題についても危機感を持って向き合おうとする姿勢がうかがえる。しかし、一人一人が取り組むべきエシカル消費については認知度が低く、今回の学習活動はエシカル消費を知る良い機会となった。セブンイレブンや無印良品など、身近な企業がエシカルな取り組みをしていることを知り、もっとエシカル消費を意識したいと発表する生徒が多く、今後の行動変容につながる兆しが見られた。生徒たちはグループワークを楽しんでおり、対話を重ねて役割分担を行い、学びを深めていた。</p>
授業者の感想	<p>教材の本文にある「持続可能性という倫理を支える文化を早急に築く」という主張が具体性に乏しく、曖昧だったため、「持続可能性」のために個人ができることを「エシカル消費」という形で考えさせることで、本文理解が深まったと感じる。グループによるプレゼンテーションという形も生徒には好評だった。</p>

↓生徒が作ったシート例



教科名（科目名）	理科（生物基礎）
授業者名	高 田 冬 深
SDGsを 取り入れた場面	<ul style="list-style-type: none"> ・環境問題についてタブレットを使用してレポートを作成し、グループで意見交換を行った。（①再生可能エネルギー②マイクロプラスチック③エイジズム④デコ活⑤物流 2024 問題の中から1つ選ぶ） ・「生態系のバランスと保全」の単元で、自然界には、ある程度バランスが崩れても自然浄化作用によって回復する力があるが、人間の活動が生態系に過度の負荷を掛けた結果、バランスが崩れて環境破壊が起きていることを学んだ。 <p>環境破壊がいずれは人間の生活に強い影響を及ぼすことを踏まえ、持続可能な開発を目指す必要があることを知った。 （目標 13, 14, 15）</p>
生徒の反応	生活排水や外来生物など、身近な問題が環境破壊に繋がる事や、マイクロプラスチックの問題から、レジ袋の有料化や紙ストローの推進など自分にも貢献できる場面があることを実感した。
授業者の感想	人間も生態系の一員であり、他の生物との関わりの中で生活していることを実感し、自分でも環境保全のために貢献できる事があり、小さな事でも実践できる大人になってくれることを期待している。

教科名（科目名）	芸術科（書道Ⅰ・書道Ⅱ）
授業者名	長 沢 薫
SDGsを 取り入れた場面	すべての人々がだれもが受けられる教育の提供について、「仮名」の歴史や書初めの起源に触れながら説明した。（目標 4）
生徒の反応	平安時代は貴族の間で使用されていた仮名の種類の多さと教養の高さに驚いていた。やがて江戸時代には寺子屋の普及とともに一般庶民に広まり、明治時代には学校教育法で一種類に制定され現在にいたることを理解したようだ。
授業者の感想	普段当たり前に使っている仮名について知ることは大切だと思う。

教科名（科目名）	保健体育科（保健）
授業者名	笠井 猛
SDGsを取り入れた場面	4 単元 健康を支える環境づくり ④ごみ処理と上下水道の整備 「循環型社会のすがた」の中で 3R（リデュース、リユース、リサイクル）について教科書の図を使って説明し、自分たちが取り組めることを話し合い発表させた。
生徒の反応	4 単元「健康を支える環境づくり」では、身近なところ（秋田県）から地球規模の環境問題等について勉強しており、生徒の意識も高く活発な意見交換がされていた。
授業者の感想	たくさんの意見が出されたが、実際に取り組んでほしい。何より、SDGs を意識した生活を送ってほしい。

教科名（科目名）	数学科（数学Ⅰ）
授業者名	山崎 史織
SDGsを取り入れた場面	古くから秋田県民の生活に密着し、県魚にもなっているハタハタ。秋田県内で漁獲されたハタハタの量は前の年の同じ時期に比べて 95% も減少するなど記録的な不漁となっている。そこで、ハタハタの漁獲量データについて学習内容も活用しながらデータを分析させ、「私たちにできること」について考えさせた。（目標 14）
生徒の反応	<ul style="list-style-type: none"> ・今まで当たり前のように食べていたハタハタがこんなに獲れなくなっていると知り驚いた。 ・身近な問題が数学で考えられるということが面白かった。 ・昔のようにハタハタが獲れるように、自分たちができることはないのだろうか、と考えるようになった。
授業者の感想	身近な存在であるハタハタの漁獲量について考察したことで、環境保全に改めて目を向けるきっかけとなったようだ。また、「数学の学習内容が実生活の分析に活用することができる」と感じたことも生徒にとってよい経験となったようだ。

教科名（科目名）	家庭科（家庭基礎）
授業者名	保坂 潤子
SDGsを取り入れた場面	単元：これからの食生活を考える 日本の食料はどこから食料自給率の低い日本の現状について、調べる フードマイレージやバーチャルウォーターをキーワードに、自分ができる具体的な取り組みを考え、ミニレポートを作成、発表する。
生徒の反応	<ul style="list-style-type: none"> ・食品の流通や安全を含めて、まずはニュースに興味を持つ。 ・日頃から買すぎない、作りすぎない、工夫して使い切ることが食品ロスを減らせる。 ・地産地消でおうちごはん、が一番安全安心、親に感謝。 ・お弁当に余ったおかずを入れるのも、環境にやさしい行為。
授業者の感想	遠くの他人事と捉えてほしくない！ことを導入で伝えた。生徒の反応は良く、毎日の生活の中でできること、ちょっとだけれど自己効力感が得られる積み重ねを大切にしたい姿勢が見られた。互いの意見を共有して、考えが深まった様子だった。

「AKISHOP」の取組

AKISHOP担当 教諭 千葉 知美

I はじめに

本校の「ビジネス実践(総合的な探究の時間)」では、全校生徒・職員が「ビジネス基礎講座」・「AKISHOP」・「キッズビジネスタウン」・「エコロジカルビジネス」の4つの部門に分かれて学習活動を行います。今年度23年目を迎える「AKISHOP」では、毎年、多くの保護者や地域の方々より、期待の声を頂戴し、本校と地域を結ぶ貴重な行事であることを実感しています。

昨年度より、本校のビジネス実践では、全校生徒がユネスコスクールの一員としての自覚を持ち、「SDGs17の目標」の達成を目指す活動に取り組んできました。4月に3年生を対象に実施したビジネス実践振り返りアンケートの結果では、90%以上の生徒がSDGs活動を通して、社会貢献をすることへの達成感を得ることができたと答えています。

今年度も「SDGs」をキーワードに、共通テーマ「みんなでつなぐ beautiful in the future ~変えられる運命 変えられるものなら変えてみせよう~」のもと、地域貢献とビジネス活動の両立を図っていくことにしました。

II 年間活動計画

4月

- ・ガイダンス
- ・生徒、職員への希望班調査
- ・本校教員による講話「SDGsを取り入れたビジネスについて(商品・サービス開発の基礎)」
- ・所属班の決定と連携企業調査

5～6月

- ・連携企業への挨拶および開拓
- ・秋田の消費、販売動向の分析
- ・活動計画の立案
- ・企画書の作成、企業交渉、商品開発
- ・企画のプレゼンテーション

7～8月

- ・試作品の評価、商品の写真撮影

9月

- ・チラシデータの校正
- ・商品完成、商品名、価格の最終確認

10月

- ・広報活動、出店準備、AKISHOP開催、決算報告

11～12月

- ・まとめ、活動報告会準備、報告会開催



全校で行った報告会の様子

III 各班の活動内容

生徒会執行部

ビジネス実践活動の総括、来場者アンケート。店舗投票の実施、オリジナル商品の販売、ユネスコスクール活動に取り組む他校の開発商品の受託販売、ユネスコスクールの取組紹介

開発課

地元企業と連携し、ターゲット設定を明確にした上で、SDGsに配慮した商品開発、継続開発商品の改良、秋田の魅力を発信する商品開発

広報課

ポスター制作、活動風景・開発商品の写真撮影、「AKISHOP」PRのCM制作、フリーペーパー・ラジオ・テレビ・広報・秋田市内の小中高校などでのPR活動、ユネスコスクールとしての活動及び持続可能な社会やSDGsの目標への理解を深めるための広報活動、秋商バナナボートの販売

イベント課 イベント班

「住み続けられるまちづくりを」をテーマに、秋田の郷土芸能のステージ開催や、親子が楽しめるイベントの企画

イベント課 観光班

インバウンドも意識した「秋田の魅力再発見ツアー」の企画

地域活性課

秋田の特産物をモチーフにしたゆるキャラの作成、地元商店の商品の受託販売、本校での定期市の開催、地元特産物を使用した商品開発

IV AKISHOP当日の様子

10月19日(土)に開催されたAKISHOPでは、地元企業・団体22社のご協力のもと、開発商品38種類(販売総数約3,800個)、受託販売12種類(販売総数約1,400個)の商品を販売しました。昨年度の商品数4,445個と比しても、年々ビジネス実践活動の規模が大きくなっていることがわかります。またこの数値は、この活動に賛同してくださる企業やお客様が年々増えていることや、地域振興の一助として大きな役割を担っていることを表していると考えます。

しかし、当日はあいにくの天候により、昨年より客足が伸びず、各班の活動に苦勞を強いられる一日となりました。ビジネス実践報告会でも、「天候に合わせた柔軟な対応の重要性を感じた」と話す生徒が多く、次年度に向けた課題となりました。



秋田駅前大屋根通りの様子

V 来場者アンケートの結果から

来場者アンケートでは、「秋商生の接客で良かったところはどこですか」という質問に対しては、「笑顔」「挨拶」の項目に対する評価が高く、本校生徒の明るさが販売実習でも生かされていることがわかりました。

一方で、「言葉遣い」や「商品説明」といった項目には課題が残ります。次年度は話し方や聞き方、商品説明のスキルを高める指導をしていきたいと考えました。また、「今年度のAKISHOPで良いと思ったところは何ですか」という質問に対しては、「イベント」「接客」の項目に対する評価が高く、コト消費やトキ消費の動向が高まっていることを感じました。生徒には、「人と人とのつながり」を意識させ、その場を楽しんでもらう工夫を考えさせていきたいと考えています。

VI おわりに

全校一体となって、多くの方々の協力を得ながら実施する本校のビジネス実践学習は、秋田県内唯一の単独商業高校である本校の特筆すべき魅力です。熱意と理想を持ってこの活動に取り組んできた先生方の思いを引き継ぎ、次年度以降も、生徒達の現状や社会情勢を踏まえた活動に発展させていきたいと思えます。

この活動を通し、生徒一人一人が見識や人間性を高め、商業高校で学ぶ意義を見いだせる場にできるよう、我々教員も研鑽に努めていきたいと考えています。

キッズビジネスタウンの取組

キッズビジネスタウン担当 教諭 小林 稔 幸

キッズビジネスタウンがスタートして17年目となった。今年度は、年度初めからSDGsについて学習し、一つのタウンとしてどのように取り組むかを考えて、各店舗で目標を立てて運営した。共通してSDGs12「つくる責任、つかう責任」が設定されたが、店舗によりさらに個別の目標が設定され、概ね達成されたと考えられる。

1. キッズビジネスタウンの目的

キッズビジネスタウンとは、小学生以下の子ども達が市民となり、「みなで働き、学び、遊ぶことで、ともに協力しながら街を運営し、社会の仕組みを学ぶ」教育プログラムである。小学生が模擬的に設定された街で、市民としてハローワークに行き仕事を探し、実際に働いて給料を得て、その給料で買い物を体験する教育的行事である。

本校生徒はキッズビジネスタウンの企画・運営を行う。当日は社長として子ども達の先頭に立って模擬店舗での販売などを一緒に行い、子ども達に「社会の仕組み」や「ビジネスの仕組み」を教えることを通して、学びを深めることができる。企画や運営を通して教えることの難しさや、ビジネスに必要な知識を客観的な視点から知ることができるものである。

このような活動を通して、ビジネス実践全体の目標である「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を体得し、社会人基礎力を育てることを目的としている。

2. 令和6年度の活動

今年度は本校を会場に、10月18日(金)に勝平小6年生を対象に、19日(土)には一般参加の小学生を対象に開催された。キッズビジネスタウン担当の生徒は2・3年生の28名で、以下の流れで活動した。1年生は各店舗従業員として、当日の活動に参加した。

(1) スケジュール

- ・ 5月：ガイダンス、基礎学習
- ・ 6月：店舗の模索、決定
- ・ 7月：企業への研修、交渉等
- ・ 9月：求人票、マニュアルの作成
- ・ 10月：1年生へ指導、本番
- ・ 11月：振り返りと反省
- ・ 12月：報告会の実施

(2) 今年度の開設店舗(28店舗)

分類	店舗名
公共施設	ハローワーク、銀行、税務署、警察・機動隊、こども自衛隊
小売業	コンビニ、デパート、駄菓子屋、造花屋
サービス業	広告代理店、ネイルチップ屋、習字教室、写真館、お届け屋、運動教室
製造業	フォトフレーム屋、手芸工房、消しゴムハンコ屋、ハーバリウム屋、文房具屋、紙コップクラフト屋、プラ板工房
飲食店	チョコバナナ屋、たこ焼き屋、キッズヘラ、ホットドッグ屋、りんごあめ屋、ドリンクショップ

3. 当日の様子

1日目は勝平小学校の児童93名、2日目は一般応募してくれた226名の小学生の参加があった。

今年度は280名を越す応募があり、令和になってから過去最高の人数となった。そのため各店舗で、小学生の労働時間は30分として労働の回転数を増やすよう工夫した。また、多くのお客様に対応するためにはどのような準備・段取りが必要か考えていたので当日は大きな混乱も無く、スムーズに進行した。



事後アンケートから、参加者の感想は以下のようなものであった。

<小学生アンケートより>

	はい	いいえ
楽しかったか	185	0
お金の大切さを実感	188	3
ものの大切さを実感	187	9
来年も参加したい	159	3
秋商に入学したいか	93	12

自由記述抜粋(原文のまま)

- ・楽しかった。もっといろいろやりたい。
- ・しごとのおもしろさを感じました。
- ・所得税が取られて大変だった。
- ・しょうらいのやくにたつと思いました。

<保護者アンケートより>

	はい	いいえ
満足度	185	0
来年も参加したい	188	3

自由記述抜粋

- ・ハローワーク、銀行、税務署など世の中の仕組みを学ぶのに良いと思った。
- ・お給料から税金が取られることを知り、初めは不思議がっていましたが。大人のようにお給料をもらって税金を納めるという流れを体験できて良かったです。
- ・働くことも、買い物することも親の目線とは違う子どもの価値観で動いていたので、新鮮な気持ちで見られた。

4. 実施上の成果と課題

(1) 成果

生徒たちはキッズビジネスタウンでの店舗経営を通じて、計画段階に予測できなかった問題や1日目の課題を、2日目には改善することができ、問題解決能力の成長を感じ取ることができた。



(2) 課題

業務マニュアル作成段階で様々なケースを想定することができず、当日対応ができなかったこと、同じ店舗にいる子どもでも仕事に差がついてしまったこと、仕入の見通しや在庫管理がうまくいかず、複数の店舗で売り切れにより、店舗の営業ができなくなる状況が見られた。売り切れになると、小学生が商品を購入できないというだけでなく、仕事がなくなってしまいうため、せっかく小学生が働きに来てくれたのに仕事の経験をさせられないという事態になってしまう。

今年度に出た課題を意識しながら来年度のキッズビジネスタウンをより良いものとしていきたい。

エコロジカルビジネス班の活動

エコロジカルビジネス班担当 教諭 石塚 禎子

エコロジカルビジネス班は、地球環境問題と国際協力の分野について学び、エコロジー(環境保全)とビジネス(経済活動)を両立させた「持続可能な社会」の構築のために行動する力の育成を目標にしている。一人ひとりがユネスコスクールの一員であることを意識し活動してきた。今年度はさらに人数が増え3年生8名、2年生31名で活動した。

1学期の活動

1学期は本校の事務職員である太田直主席主査主導のもと、主に発展途上国の現状について学びながら、問題解決のための手法としてワークショップという参加型学習を通して、自分の考えを述べる練習を継続して行った。昨年度までは講演形式の講座がほとんどだったが、そこから一歩進めて将来的には国際協力の道に進むような人材の育成を念頭においた。

主な講座内容

- 5/2 「ユネスコスクールについて調べる」
- 5/9 「JICA国際協力出前講座①」
- 5/23 「世界の現状と私たち」
- 5/30 「コーヒーとチョコレートの不思議」
- 6/6 「JICA国際協力出前講座②」
- 6/13 「世界基準と私たち基準」
- 6/20 「価値と価値観～豊かさとは～」
- 7/4 「JICA国際協力出前講座③」



ワークショップ(フォトランゲージ)



ワークショップ(与えられたテーマについて話す)

2学期の活動

2学期からは、それぞれの興味関心に応じて「環境対策班」21名、「国際理解班」18名に分かれて活動した。

「環境対策班」の活動

今年度もまた「一般社団法人あきた地球環境会議」の協力を得て以下の講座を実施した。

- 7/11 「企業のSDGsへの取組」
- 9/12 「環境省うちエコ診断」
- 10/24 「森林保全と木はがき作り」

また、新たな環境保全の取組みとして「コンタクトレンズの空ケースの回収」を始めた。回収を呼びかけるポスターを作



生徒昇降口に回収ボックスを設置

成し、放送でも周知した。回収された空ケースはリサイクルされ新たなプラスチック製品の材料として活用される。

AKI SHOPでは例年通り、資源の再利用を推進するというコンセプトのもと、以下の3つの活動を行った。

① ダリアの無料配布

雄和にある国際ダリア園の協力のもと、AKISHOP前日に大仙市にある農園へバスで行き、約400本のダリアを摘んできた。当日は、一本ずつラッピングし、来場者に無料で配布した。来場者からは毎年大変好評をいただいているイベントである。今年はさりげなく募金箱を設置してみた。募金箱の存在に気づいて、募金してくれる人もいた。(募金額9,453円)



② 秋田杉の端材を活用したエコ箸づくり

事前に、箸作りの講師である伊藤良治様の自宅に伺い、箸の作り方を教えていただいた。秋田杉の端材は無料で提供していただいている。AKISHOP当日は、来場者に箸作り体験を無料で楽しんでもらった。



③ フリーマーケット

全校生徒や職員に対して、ちらしの掲示と放送により、不要だけれどもまだ使える品物の提供を呼びかけた。世界の貧困等に苦しんでいる子どもたちを支援するために行うこと、売り上げは寄付することが伝わるポップ作りを心がけた。収益金(8,690円)は毎年、日本ユネスコ協会連盟へ寄付している。



「国際理解班」の活動

1学期の講座に引き続き、問題解決のためのアイデアを出し合うワークショップを中心に活動した。

また、ユネスコスクール加盟校としての活動も模索してきた。その1つとして秋田ユネスコ協会主催イベント「ユネスコSDGsユースセミナー」(11月9日実施)に、講師(ファシリテーター)として参加した。県内6校、2大学を含む約30名が参加し、「高校生が取り組む持続可能な社会づくり」と題し、ワークショップに取り組んでもらった。



AKISHOPでは、昨年度に引き続き、男鹿市にある「さとやまコーヒー」さんの協力のもと、ダイレクトトレード・コーヒーの販売を行った。



さらに2月には、国際理解班の2年生7名がファシリテーターを務め、全校の1,2年生を対象に「私たちは地球に立っている」という参加型のワークショップを体育館で実施した。世界の表面積を体育館床面積に見立てて陸地と海の比率を体感してもらったり、チョコレートを配って食糧が世界にどのように分配されているのか、その不公平さを体感してもらったりすることで、地球環境や世界の多様性、貧富の差に対する考え方を広げることを目的とした。



令和6年度ビジネス実践活動について(総括)

教諭 柏谷 亜紀子

本校のビジネス実践活動は『主体的に考え、地域に貢献できる意欲と知識を持った生徒の育成』を目標としている。仲間、学校外(企業)、自然の3つのつながりを持ちながら、1年生の「ビジネス実践基礎講座」での学習をもとに、「AKISHOP」「キッズビジネスタウン」「エコロジカルビジネス」の3つの活動を行っている。どの活動も歴史があり、秋田市内では知名度も高く、本校の特色ある教育活動の一つとなっている。その反面、開始当時とは学校を取り巻く環境が大きく変化していることや総合的な探究の時間としての役割を果たすためには、イベントとしてのイメージを脱却し、年間を通じた継続的な学習活動を行い、より質の高い探究を行っていくことが求められている。そのため、ユネスコスクールとしての理念を取り入れた持続可能な社会の実現を目指した学習活動を昨年度から実践している。

【今年度改善・変更した点】

○生徒の思考を可視化する

4月18日(木)「SDGsを取り入れたビジネスについて(商品・サービス開発の基礎)」の講話をもとに、ワークシートに「秋田商業高校として、SDGs達成のために何ができるか」、「秋田商業高校の何を伝えるか」(良いところだけでなく、どんな未来を目指し、どんな社会を作ろうとしているか)について自分の考えを記入させた。必ず全員のワークシートに目を通し、今年度の活動に活かすことを強調したことで、自分事と捉えて積極的、具体的な意見を挙げる生徒が多く見られた。全校生徒の意見を集約し全体で共有できるようにしたことで、他の生徒がどのようなことを考えているか共有することができ、協働的な学びにつなげることができた。

○見通しを持った学習を行う環境を整える

『ビジネス実践活動記録』を作成し、毎時間自己評価を行い、次回やるべきことや改善点、SDGsを意識した活動ができたかなどを記入させ、次時へのつながりを意識した学習活動になるように工夫した。担当教員が回収、点検することで生徒の動きを把握できたという意見もあり、有効に活用できた。

○最終報告会の充実

例年10月18、19日のイベントが終わると生徒の思考が停止してしまう傾向にあるため、振り返りの重要性を繰り返し伝え、充実した報告会になるように呼びかけた。昨年度は報告内容のある程度指定し、各班の発表の統一性を目指したが、今年度はプリント『よりよい発表にするためのポイント』を配付し、発表する生徒だけでなく、発表を聞く生徒の心構えなども周知し、質の高い探究を目指した。各班の発表では聞く側を意識した工夫を行い、わかりやすく楽しい発表が多かった。

○AKISHOPの組織の見直し

地域活性課の地域経済班を地域連携班に名称を変更、観光班をイベント課に移動するなど組織編成を見直し、活動の明確化・合理化を目指した。また、各課に職員のリーダーを配置し、各課内の共通理解や連携を円滑に行えるようにした。各課リーダーの横のつながりを密にすることで、他の課に対する理解を深め、連携に必要な環境を整えた。今までは総括が各課に連絡調整していたが、リーダーを配置することで、総括に依存せずに自走型の組織作りを目指した。

【アンケート結果】

★今年度のビジネス実践学習に対する職員へのアンケート(一部抜粋)

- ビジネス実践学習で身についた力、不足している力は何か？
 - ・身についたと思う力：行動力、コミュニケーション能力
 - ・不足していると感じる力：創造力
- ビジネス実践の目標を達成するためにどのような指導・工夫を行ったか？
 - ・自分の興味関心だけでなく、社会にとって必要なものは何かを考えさせた。
 - ・最初の数時間を使って目標を何度も確認し共通理解を図った。
 - ・SDGsのどの項目に関連しているか意識させた。
 - ・アンテナを高く持ち、情報を得ること。
 - ・周囲とコミュニケーションを図って、主体的に行動する。
 - ・少人数で、責任を持って活動できるように指導した。
- 生徒がSDGsを意識した活動にするためにどのような指導・工夫を行ったか？
 - ・常に意識することは難しいが、意識しなくてもSDGsにつながっていることを生徒には理解してほしいと思って指導した。
 - ・機会を捉えて担当者がSDGsを話題に出して活動との結びつきを考えさせた。
- 全体を通じた改善点や要望など
 - ・A K I S H O P 当日の各班のSDGsの紹介などが足りない。せっかくこだわって作った商品もあるが、POPや接客で効果的に伝えられていないのは課題だ。
 - ・SDGs指標達成が目的にならないように気をつけなければならない。企業(A K I S H O P)の社会的責任とは何か、企業デザインについて再考していく時間があればと思う。
 - ・3年次に総合型選抜や推薦入試で活動をアピールする人が多かったので、1年次のうちから進路を見据えて班や活動を選ぶことを全体に説明したほうが良い。

★A K I S H O P 協力企業へのアンケート(一部抜粋)

- ・単日で終わってしまうので、もう少し長い期間A K I S H O P 以外でも商品化できる等の何か提案いただけると取り組みやすい。(食品製造業)
- ・商品販売など、いつもユニークで独創的なものばかりで楽しみにしている。(マスメディア事業者)
- ・将来の人と人とのつながりの中で、うまく調整をしていき、一つの商品を作り上げていくことの難しさや大切さを知るとは、社会人となった時にどんな場面や仕事でも必要となってくるので、是非もっとコンタクトを取り、作り手に任せただけにならないよう生徒さんができることをもっとアピールしたコミュニケーションを取りたい。(食品製造販売業)

【次年度への課題】

ビジネス実践推進委員会を開催し、担当教員の意見交換や共通理解を図る機会を作っているが、解決すべき課題が多くある。特に職員アンケートにより生徒が不足していると感じる力としてあげている「創造力」は、一朝一夕には身に付かない力であり、様々な科目の学習や経験を通して身に付いていくものであるため、教科横断的な学習の充実が重要になってくる。そのため、次年度はさらに充実した委員会を開催し、チームで検討していきたい。

また、SDGsの目標を取り入れた活動を始めて2年目であり、意識の定着がまだ浸透しきれていないため、生徒も教員もどのように取り入れていくか戸惑う場面も多い。今後は各課、各班の目標をある程度明確化するなど、学習活動を円滑にスタートできるような環境を整えていきたい。

校訓：「感謝」「勤勉」「鍛錬」

2024年7月25日(木)
秋田商業高等学校
商業科
文責：栢谷亜紀子
大正9年開校
創立105年目



商業科通信

商業を学ぶことは2つの目を持つこと

新年度が始まり約4ヶ月が経ちました。新しいクラス、新しい科目、そして検定や部活動の大会など慌ただしかった1学期も終わりますが、令和6年度はどのようなスタートを切ることができたでしょうか？

特に1年生にとっては、聞き慣れない専門科目も多く、戸惑うことも多かったのではないのでしょうか。ここで、1年生だけでなく、2、3年生も「商業高校で勉強するとどんな力が身につくのか（ついたか）」について、ぜひ考えてみてください。

私たちは、普段お店に行って商品を買う、つまり消費者として生活していますが、「ビジネス基礎」や「マーケティング」、「商品開発と流通」などの科目を通して、消費者に商品やサービスを提供する側について勉強します。また、現金についても普段は現金をもらったら増え、払ったら減るという現金の増減についての感覚を持っていますが、簿記を勉強することで、現金の増減以外の部分にも気づくようになります。例えば、『備品を購入し、現金で支払った』という取引では、簿記を勉強する前であれば“現金が減った”という事実だけです。つまり、『現金は減ったけど備品は増えた』というもう1つの事実に気づくことができます。つまり、複式簿記を学習することで、一つの取引から2つ以上の事実を読み取る力が身につくようになります。

商業高校での学びは、ただ検定に合格すれば良いのではなく、より広い視野で物事を考える力が身につくことにつながります。

2学期は、ぜひ、“2つの目”を持つことを意識して学校生活を送ってください。



2学期は、学校行事や部活動だけでなく、検定試験も多くあります。全商主催検定の過去問は全商HPからも閲覧することができます。どのような検定があるか、難易度はどの程度なのかなど夏休み中にぜひ確認してみてください。

在校生の活躍 ～11年ぶり情報技術者試験合格～

3年情報コース皆川大輔さん（秋田南中学校出身、コンピューター部）が本校では11年ぶりとなる基本情報技術者試験に合格しました。この試験は国家試験で、『高度IT人材となるために必要な基本的知識・技能をもち、実践的な活用能力を身に付けた者』（ウェブページ）を対象とした試験です。受験者の内訳を見ると、大学生や専門学校生が多く、大学卒業程度の難易度と位置づけられています。

皆川さんはITパスポート試験にも合格しており、2つの国家試験に合格しています。

～皆川大輔さんへインタビューしました～

①検定の魅力は何ですか？
実際に使っているスマホやPCがどのように動いているかわかるところが勉強していて楽しいです。

②これから受験する人へのアドバイスは何ですか？
どちらも難しい試験で結果が出るままでは不安でしたが、無事合格することができてとてもうれしく思います。

勉強方法に関しては、基礎である単語から始め、過去問を解き、わからなかったものをノートにまとめました。また、基本情報技術者試験は前後半で試験内容が異なりますが、前半はITパスポートの知識も多く使えるためスムーズに勉強が進みました。しかし、後半はコードを読んで解く問題と文章を読んで取るべき対応を選択する問題があるため、記述したり、流れ図を書くことをおすすめます。

③今後の目標は何ですか？
さらにレベルの高い応用情報技術者試験に挑戦してみたいです。そのためには、授業で習っている数学や英語の力をさらにレベルアップできるように頑張りたいです。

裏面につづく

令和6年度の授業紹介

今年度も外部講師を招いた授業や、より実践的な授業を行っています

【観光ビジネス:3年流通経済コース】

今年度から新たに勉強する科目です。近年ビジネスにおいて地域の活性化や地域貢献が注目されています。そのような中でこの科目を通して、地域の魅力だけでなく課題にも目を向け、それらを地域の活性化のためにどのように活用、解決していくかなどを考える力を身に付けることができます。

6月21日(金)3、4校時にノースアジア大学の千葉隆一教授をお招きし、観光ビジネスの基本理念である「ホスピタリティ」や「コミュニケーション」について、高大連携授業を行いました。

千葉教授からは、航空会社での勤務経験から得た豊富な知識をもとに、ホスピタリティ＝“おもてなし”であり、良いサービスを提供するためには良い人間関係を構築することが必要であることを説明いただきました。中でも、「心は見えないが心遣いは見える」「思いは見えないが思いやりは見える」という言葉が印象的でした。私たちはビジネスを通して、お客様へのおもてなしの心を“かたち”にする知識と技術を身に付けることで真のサービスを提供できるのではないかと思います。

2学期以降も、旅行会社の方を外部講師として招いたツアープランの立て方など、より専門的な学習を行う予定です。

Network utilization class



2024 教室廊下に掲示しています

【ネットワーク活用:3年情報コース】

この科目も今年度から新たに勉強する科目です。この科目では、ビジネスにおいてインターネットを活用し、情報コンテンツの作成や適切かつ効果的な情報を発信するための力を身に付けることができます。1学期は、「Canvas」(グラフィックデザインツール)を利用した学校案内の表紙を作成しました。一人一人が秋商の良さをアピールするために工夫し、個性豊かな作品になりました。作成した中から、3F山野江理乃さんの作品が今年度の学校案内の表紙に採用されました。キヤッチコピーは「秋田商業〜学ぶならここがいい〜」。学校案内は今年度の本校に関係する多くの方々だけでなく体験入学で参加する中学生にも配られます。

2024 教室前には情報コース全員の作品が掲示されています。すべての作品から学校への思いがふれ出ています。ぜひ、ご覧ください。

他にも「総合実践」(3年全員)では企業と連携したビジネスマナーやイベント企画の授業など、教科書だけでは学べないより実践的な授業を行う予定です。



6月21日の高大連携授業の様子

校訓：「感謝」「勤勉」「鍛錬」

2024年12月28日(木)
秋田商業高等学校
商業科
文責：柏谷亜紀子
大正9年開校
創立105年目

商業科通信



世の中の動きを身に付けよう!!

2024年もまもなく終わります。今年も“猛暑”“大雨”“災害”など私たちの生活に大きく影響を与えるような出来事に直面することが多かったように思います。来年は穏やかで平和な世の中になってほしいと心から願うばかりですが、予期せぬことが起こる現状を考えると、私たちは“今まどと同じ”という意識を変えていくことも必要です。世の中が変化している中で、変わらないことは停滞ではなく後退につながります。世の中の動きに合わせていくことは後退しないための必須条件です。私たちは商業高校で“ビジネス”について学んでいますが、世の中の動きにあったビジネスに関する力を身に付けなければ、相手のニーズを把握することも利益を生むこともできません。

本校の代表的な活動である『AKI SHOP』『キッズビジネススタウン』『エコロジカルビジネス』は秋田市内では知名度も高く、特に『AKI SHOP』は今年23回目となり、企業で言えば老舗とまではいきませんが歴史があります。裏を返せば、始まったときと世の中の状況が大きく変化しています。そのため、近年はユニネスコスクールとして、持続可能な社会を目指してSDGsの考えを取り入れた活動を行っています。このことは世の中の動きに合わせて秋商にとつての変革ととらえています。是非、各科目で学習したこと（インプット）を世の中の変化に合わせて実践（アウトプット）していきましょう。

2025年もどうぞよろしく願います。

商業科活動紹介 ～第7回秋田県高等学校ビジネスプランニングコンテスト 1年生2チームが出場～



12月13日に行われた第7回秋田県高等学校ビジネスプランニングコンテストに本校から1年生2チームが出場しました。この大会は、秋田県の産業や観光に関わるビジネスプランを提案することを通して、地域の魅力の発見や地域が抱える課題を解決しようとする起業家精神を持つ人材育成を目的としています。全県から18チームが参加しました。残念ながら入賞は逃しましたが、2,3年生のチームがほとんどの中で、まだ商業の学習を始めたばかりの1年生の参加だったことを考えると、大健闘でした。

【タイトル】秋田の郷土料理体験フェア

【参加生徒】1F 赤平零、齋藤亮汰、鈴木詩乃、村田陸斗、本川奨大

★テーマ設定の理由

秋田県の課題として伝統文化を伝えていく人たちが年々なくなってきたことが挙げられているので、このフェアで冬の秋田の郷土料理に触れて、秋田の良さを継承することができると考えました。

★プランの内容

秋田の農家と旅館がタッグを組み、宿泊の際に料理を自分たちで作ることのできる体験型ツアーです。観光客の方々に秋田のおいしい郷土料理を一味違う形で体験してもらい、宿泊にすることで、家族での旅行客からシルバード世代までの幅広い年齢の集客を見込めます。秋田県の郷土料理は温かいものが多いので、あえて冬に開催することで、秋田県の郷土料理の魅力を最大限引き出したいです。

【タイトル】もみ殻化粧水の開発

【参加生徒】1B 傘木美結、嘉藤奈々香、長谷部夢羽

★テーマ設定の理由

秋田県の廃棄物ランキングを調べた時に、もみ殻が意外と多いことがわかりました。そのもみ殻を使って何かできないかと考えていたらシリカという成分が入っていることを知り、化粧品に代用できないかと考えました。

★発表内容をまとめるときに大変だったことは？

自分達のビジネスプランを他の班とどう差別化するかを考えるなどの商品開発を行う難しさを学びました。また、地域の活性化に向けて多くの人が考えていることがわかりました。

★コンテストに参加した感想

緊張しましたが想像以上に楽しかったです。他の学校のプランを聞いて、新しい視点で秋田の魅力を学べました。審査員の方が「すぐにもできそう」という点を大切にしていたので、美理性がもう少し高くなるようにプランを考えれば良かったと反省しています。自分たちの成長につながる貴重な経験になりました。



裏面の「卒業生の活躍」では、地元秋田の活性化に尽力している株式会社コシニクタイヤ 代表取締役社長 小西和也様（高47期）について掲載しましたのでぜひご覧ください。後輩のためにお忙しい中快諾いただきましたこと、この場をお借りして感謝申し上げます。

〇プロフィール

名前：小西 和也(こにし かずや)
 出身中学校：勝平中学校
 卒業年：1996年3月(高47期)
 在学中の所属部活名：硬式野球部



企業紹介

自動車用タイヤとホイールの専門店として、DXシステム導入により在庫管理や労務管理などの業務効率化に成功し、全国で20社しか選ばれなかった**経済産業省「DXセレクトショップ2023」優良事例に認定**されました。雪国秋田ではタイヤ交換は年中行事の一つであり、繁忙期の長時間労働が当たり前の状況でしたが、DXを活用することで新たな時間が確保でき、顧客のニーズに合わせた販売方法を検討するなどよりきめ細かい顧客対応が可能になりました。また、労働環境の改善や若手の人材育成にも力を入れ、秋田のプロスポーツのスタジアムなど地域貢献に向けて積極的に取り組んでいます。

お話を伺った際に、**地元秋田を盛り上げたい**という小西社長の強い信念を感じました。秋田の未来を支え、秋田を元気にする企業です。

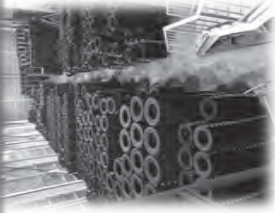
〇高校時代の思い出をお聞かせください

友達や先輩後輩との思い出です。私は学校に行くのがとにかく楽しく、今思えば友達とたわいもない話を3年間毎日していました。部活も授業も楽しく授業で寝るのがもったいない、それくらい一緒にバカな話をするのが楽しかったです。

野球部の先輩は最初(入学して半年くらい)はとても怖すぎて部活だけでなく学校もやめようと思いましたが、友達と励まし合いながら理不尽な先輩に負けるもんかと頑張りました。半年後には先輩とも仲良くなりました。

部活の練習はとてつきつくて、逃げ出したい時が何度もありましたが、友達と励まし合いながら厳しい練習に耐えて頑張ることができました。秋商では本当の忍耐力が体の芯から身に付いたと思います。また、練習後の仲間との語り合いはとて楽しく。私は友達や先輩後輩みんなが大好きでした。当時私は人を笑わせることが好きで、信頼できる仲間が必ずツッコんでくれるのがわかっていたので積極的にボケまくってみんなまで笑っていました。現在の仕事の**お宝**は**皆様に喜んでいただく(顧客満足度の向上)こと**に生きています。

10万本以上あるタイヤとホイールの在庫管理をDXで可能



綺麗でおしゃれなお客様の待合室

〇秋田商業高校で学んだことや経験したことがどのように役立っていますか？

当時は先輩たちからよくおつかいかい(バシリ)を頼まれました。多かつたおつかいかいは「購入からパン買ってこい。種類はお前のセンスに任せる」です。パンは人気商品から売れしていきます。残り物を買っていくと任せると言ってくせに「センス悪いな」と言われがっかりさせてしまいます。どうせやるなら先輩に喜んでもらいたいと思い、私は考えました。売れ残りを買うのではなく、授業が終わったらダッシュで購買に行き人気商品のパンを先にまとめ買いすることにしました。それを自分で在庫しておき、先輩の教室に持って行ってパンを並べて売ることになりました。「こんなに買ってきたのか」とどれくらいしようかなと先輩は楽しそうにパンを選んでいます。するとその光景を見て買う予定がなかった他の先輩もパンを買ってくれます。野球部の先輩だけでなくサッカー一部やレスリング部などほかの部活の先輩たちからも買ってもらえます。そのためいくらかまとめ買いをしても売れ残ることはありませんでした。

先輩に喜んでもらえるパンは何かを**見極める力**、パンが売れ切れてしまう前にダッシュで購買にまとめ買いにい**実行力**、売れ残りそうなパンを売り切るための**営業力**が身に付いたと思います。何よりも先輩(お客様)に**喜んでもらえることにやりがい**を感じていました。この高校時代の経験が経営でいきています、**お客様の求めるもの(ニーズ)**を感じとりそれを事業に活用することです。

〇在校生へのメッセージ

高校時代は、勉強や部活動、そして友達とのたわいもない会話がすべて大切な経験になります。私も波瀾万丈な日々を通じて多くのことを学びました。つらいことや理不尽なことがあります。仲間と励まし合い、乗り越えた先に得られるものもとても大きいです。その経験は今でも、経営者としての私の土台になっています。

誠に勝手ながら私は秋田の人口減少を食い止める使命を持って仕事をしています。首都圏で生活して埋もれていくよりも、田舎の秋田で1番を目指す方がはるかに価値が高く、地域に貢献できると思っています。将来は秋田県の未来を支える一員として、皆さんが地元で学び、楽しみながら力を伸ばし、地域をより良くしていく存在になってほしいと願っています。

教職5年目研修講座(高等学校)を受講して

教諭 佐藤 正志

1 はじめに

本講座の研修目標は、「学校組織マネジメントの意識を高め、学習指導や学年経営、生徒指導等についての実践的指導力の向上を図る」ことであり、各学校それぞれの環境下で、どのような目標を目指すべきか、その目標に照らして現実はどうなのか、目標にどのように近づけるのかを、考えることが必要である。

2 講座の内容

(1) 教育相談と人間関係づくり

教育相談で大切にしたいことは、常に自分たちの考えや行動を自己点検し、同僚の教職員間での継続的な振り返りを行うことが大切であるということだ。学校には様々な「人間関係」があり、何らかの問題が発生した場合、当事者に限らず、その周りの様々な人間が絡んでくる。そのため、学校での問題は「関係性」に注目するものの見方が必要であり、一つの原因だけで結果に結びつける「直線的思考」だけではなく、複数の原因を考え、疑問や想像、仮説を立てながら結果に結びつける「円環的思考」に伴う行動も大切である。

人間関係づくりにおいては、「自分も相手も大切にする」という考え方から、ソーシャルスキル(人付き合いのコツ、人とうまくやる方法)トレーニングを積極的に行い、これまで学んでこなかったことを学ぶ、間違えて学んだことを学び直すことで問題解決スキルの向上に繋げるよう努めることの必要性を再確認できた。また、周囲の大人自身が自分も相手も大切にしながら生徒たちと接することで、「自己信頼」と「他者信頼」を育むことに繋がり、相手を尊重しながら感情交流できる関係や自己肯定感を高めることに結びつくことを学んだ。

(2) 学校組織の一員として — マネジメントの視点 —

学校組織マネジメントとは、学校が有している能力や資源(人・もの・金・情報・ネットワーク・時間)を活用し、学校に関与する人たちのニーズに適応させながら、学校教育目標を達成していく活動である。そこで、学校全体を構造的に見渡し、自校が今どのような状態にあり、どんな理想を目指しているのかを考えるため、保護者に学校全体の取組を説明することを想定し、学校プレゼンテーションシートの作成を行った。経営方針や地域の実情(強み・弱み)により、各学校それぞれに特色があり興味を抱かせる講義・演習であったと同時に、学校全体が進むべき方向性が明確であるからこそ、教職員はチームとして目標を達成する喜びを感じたり、その過程で切磋琢磨しながら、生徒に踏み込んだ指導ができるということを確認できた。

(3) 発達障害のある生徒の理解と支援

～支援の第一歩は理解から～(適切な実態把握)という観点から、①生育歴や家庭環境を考慮する②関係性に目を向ける③肯定的に捉える、ことを核とし「見えている姿の背景に目を向ける」ことが大切である。また、授業のユニバーサルデザイン化にも着目し、生徒の授業でのつまづきを軽減させるために「つまづきやすい部分」「あいまいな部分」を取り除く配慮ができることで、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業展開に繋がることを学んだ。

(4) 生徒の実態を踏まえた授業改善

①地域に根差したキャリア教育の充実、②“「問い」を発する子ども”の育成の二つを最重点課題に設定し、マンダラシートを用いて授業改善策を考案した。他教科の教諭とグループ協議及び演習を行い、各学校の課題や授業を行う上での悩みなどを共有し、考案した課題解決策を自校で行うことでの成果と課題を検証した。他教科の授業改善に関する取り組み状況を知ること、違う視点から自身の授業を見つめ直すことができた、非常に有意義な時間であった。

3 まとめ

教員としてミドルリーダー的な立場になってきている時だからこそ、今回の研修は意義のあるものであった。再度、自身の役割を考え、研修で学んだことを今後の学習指導や生徒指導に繋げ、学校全体が良い方向に進んでいくよう努めていきたい。

実践的指導力向上研修講座(高等学校8年目)を受講して

教諭 石崎 絵里香

1 はじめに

本講座の研修目標は、「自己理解に基づき、個々の個性・適性、分掌等に応じた資質能力の向上を図る」ことであり、自身の指導と自校のカリキュラム・マネジメントのつながりを改めて意識するきっかけとなり、自身の教員としての質の向上に努めていこうと思う。

2 講座の内容

(1) いじめや不登校の未然防止と対応

不登校と思われる生徒への対応を行う中で、「前日の夜は学校へ行こうと思うが、朝になると何となく行きたくない」ということを本人が話していた。保護者とも連絡を取り合い、本人の様子を見守る中、何が原因(要因)かが本人の口から語られることがなく、いじめや友人関係の悪化などもなく、保護者も理由が分からずに困っているという様子であった。休みが続くこともあるが、登校した日は友人と楽しそうに話す姿も見られ、来たり来なかったりという状況が続いている。研修のなかで、本人の心情に寄り添うことはもちろん、保護者との関わりの中で「どのようなゴールを設定するのか」を考えながら登校以外のゴール(小さな目標)設定を行い、社会的自立の支援の大切さを再確認することができた。

(2) 教育活動全体を通じたキャリア教育

商業科目には、職業人としての倫理観や遵法精神、起業家精神などを身に付けさせ、経済社会を取り巻く環境の変化に適切に対応してビジネスの諸活動を主体的、合理的に行い、地域産業をはじめ経済社会の健全で持続的な発展を担う職業人を育成するという教科の目標がある。商業科目は普通科目に比べ、学習内容が社会生活や職業生活で活用される場面をイメージしやすい科目である。ただし、知識を教え込むだけになってしまうのは、教科の目標や特性を踏まえたものにならず、キャリア教育に生かすこともできなくなってしまうと考える。実社会と結び付けた指導や、様々な場面で教科横断的に学校として「生徒にどのような力を身につけさせるか」を共通理解のもと様々な教育活動の中で伝えていくことが大切であると再確認した。生徒のキャリア教育の振り返りシートの記入をチェックする際にも、社会生活や職業生活に繋がりを持たせていく指導をしていきたい。

(3) 学校組織の一員として ―自己理解に基づく目標設定―

学校という組織で働くうえで私自身大切にしていることは、「教員間のコミュニケーション」である。生徒・保護者と良好な関係を築くためにも、他教員との情報交換が有益である。私自身、教科指導における知識不足や、生徒指導における保護者対応力が不足していると考えている。他の先生方から学べる所が多くあるため、自身の授業内容を構成する力量や

生徒を理解する力量を向上させていくためにも、1時間の授業を大切に「生徒のために」という信念を忘れず、授業改善や生徒指導を行っていきたい。まだ、自身の教員としての資質能力に自信を持っていない部分が多いが、周囲の先生方に支えられているだけでなく、自身も「学校組織のために」具体的な取り組みを考え、実行しなければいけないと感じた。

(4) カリキュラム・マネジメントを軸にした授業改善

カリキュラム・マネジメントに取り組むとは、「自校の目的・目標に沿った生徒を育てるために、学校全体で各目標の達成に向けた授業改善を行い、より良くしていくこと。」と確認することができた。日々の業務に追われ、目的・目標を意識した授業改善が不十分であることを痛感した。これからは、はっきりと目的・目標を意識し、生徒の実態に合った指導をしていこうと思う。

3 まとめ

教諭としての経験を重ね、学校全体の理念を意識した指導をしていかなければいけないと再認識することができた有意義な研修であった。自身の立場や役割を理解し、カリキュラム・マネジメントを意識した日々の指導・職務に専念していきたい。まだまだ未熟な点が多いと感じることもあるため、日々研鑽に努めていこうと思う。

実践的指導力向上研修講座(高等学校8年目)を受講して

教諭 佐藤 悠香

1 はじめに

本研修講座の目標は、「自己理解に基づき、個々の個性・適正、分掌等に応じた資質能力の向上を図る」であり、自身の資質向上につながるよう研修に臨んだ。

2 講座の内容

(1) いじめや不登校の未然防止と対応

研修の中で、不登校の未然防止のためには生徒の自己有用感を高めることが大切であり、そのために「ほめる」より「勇気づけること」が有効であると学んだ。普段生徒のできていない所に目を向けてしまうことが多いため、今後は勇気づけの手立ての中でも、特に「できていることに注目して声をかけてあげること」を心がけていきたい。

(2) 教育活動全体を通じたキャリア教育

キャリア教育の目標を確認した上で、専門教科を学ぶ意義について考えた。活力ある充実した人生を送っていくためには、心身ともに健康であることが基本であり、健康を自己管理するための知識等を育む保健体育の重要性を改めて実感した。今後は、教科指導に関わらず、あらゆる教育活動の場面でキャリア教育の視点を意識し、生徒の社会的自立につながる指導をしていきたい。

(3) 学校組織の一員として —自己理解に基づく目標設定—

資質能力分析シートを活用し、自己分析を行った。その結果、チームで連携しようという意識や役割に対する責任感、生徒を理解し成長させたい思いは強いが、それらを形にするための知識や経験が足りないとわかった。思いを実現していくために、学び続ける姿勢を持って資質の向上を図りたい。

(4) カリキュラム・マネジメントを軸にした授業改善

カリキュラム・マネジメントを軸にした授業改善を行う上で持つべき視点として、「①学校教育目標の具現化の視点 ②教科横断の視点 ③人的又は物的資源確保の視点 ④PDCAサイクルという視点」があることを学んだ。それらの視点から自分の授業を振り返り、教科横断や人的資源の活用を取り入れることで、生徒の学びをより深めることができると感じた。今後の授業改善に活かしたい。

3 まとめ

本研修を通して、自分自身を多角的に見つめ直したことで、改善すべき点が明確になった。さらに、自分の強みについても改めて考える良い機会となった。中堅教員としての資質をより一層向上できるよう今後も研鑽を積んでいきたい。

中堅教諭等資質向上研修講座(高等学校)を受講して

国語科 柴田 佳代子

1 校外研修について

① センター研修

I期	6月25日(火) (オンライン)	【開講式】中堅教諭等への期待 ○教育公務員の服務 ○学校の危機管理 ○質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略
II期	8月2日(金)	○高い専門性に基づく教科指導の充実と推進
III期	9月19日(木)	○人間としての在り方生き方を考える道徳教育 ○いじめの理解と対応 ○気になる生徒の事例を通した具体的対応の理解
IV期	10月17日(木)	○学校全体で取り組む情報教育 ○学校組織の一員として「キャリアデザイナー」 ○これからの学校教育 【閉講式】中堅教諭等資質向上研修を終えるに当たって

I期では、「質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略」として、秋田大学大学院教授の成田雅樹先生の講義を受講し、授業研究における具体的なポイントを確認することができた。授業研究には①授業観②価値判断・評価③方法が必要であり、その重要度は①授業観>②価値・判断>③方法である。①②を話し合わずして、③ばかりを議論しても的外れであり、①②を磨くことが大切だと先生は述べている。また、②価値判断・評価における重要ポイントは、・目標達成(資質能力の育成)・子どもが主体的に学ぶ・子どもが学ぶ意欲を高める・メタ認知(見方考え方)が育つ・常に再構築(更新)の余地がある学びであるということも改めて確認することができた。授業研究のための授業を気負うのではなく、生徒教員それぞれの授業観を大切にしながら、日々の授業に丁寧に取り組んでいきたいという気持ちを新たにした。

II期は教科指導の研修で、指導主事の細谷林子先生からご指導いただいた。国語科教員が研修者として5名参加し、各研修者が事前に録画した授業映像を視聴しながら評価し合う形式であった。生徒の特徴や教材は異なるが、他の先生方の授業における取り組みを参観したり、自分の授業についての評価をいただいたりしたことで、国語科教員としての考えや思いを共有することができた。

III期は生徒指導に関する研修で、主にいじめと気になる生徒の事例研究を行った。本校の事例に対して、「日常生活の中で、普段通りの行動でうまくいったという経験を増やす」「他者認知力を伸ばすために構成的グループエンカウンターを行い、他者の思いや感情に触れる機会を持つ」「アイメッセージで伝える」「保護者や他の支援者との関わりを大切にしながら自立を促す」など、たくさんのアドバイスをいただき、その後の指導に生かすことができた。

Ⅳ期では、「これからの学校教育」として、秋田県総合教育センター副所長の齊藤正稔先生から具体的な経験を交えたお話を伺った。教育現場を取り巻く状況は日々変化し、私たちに求められる教師像も「変化を前向きに受け止めて学び続ける教師」「子ども一人一人の学びを最大限に引き出す役割を果たす教師」「子どもの主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている教師」となっている。研修を通して、自分を客観的に見つめ直し、自己理解を深めるとともに、今後のキャリアプランを練ることができた。齊藤先生の「謙虚な姿勢を忘れない、人はいくつになっても新芽が出る」という言葉を忘れずに、学校組織の一員として、自分の職務に真摯に向き合っていきたい。

② 選択研修

選択研修では、活字離れが進む中高生に対して、読書の魅力をどのように伝え、読書を日々の学びにどのように効果的に活かすことができるのかを具体的に学びたいと考え、秋田市立中央図書館明德館の大石様に研修を依頼した。

普段から利用することが多い施設ではあったが、改めて、専門的な知識や技術を持っている数多くの職員の方々が、様々な業務を分担して行うことで成り立っているということを実感した。

近年力を入れているYA（ヤングアダルト）サービスからは、活字離れ対策に取り組む私たち教員にも学ぶべきことがたくさんあった。また、夏期休業中夏のイベント（課題研究向け特設コーナー、エコバッグ作り、スタンプラリー等）も積極的に行われており、「本を読もう」と勧め、待っているだけでは読書推進活動とは言えないと考えさせられた。本を手にとってもらうための具体的な働きかけについて、情報を共有しながら自校の図書館司書や他の国語科教員と一緒に進めていきたい。

③ 授業研修

授業研修は、9月4日(水)に秋田高校の1年生のクラスで実施した。他校での実施ということと、45分1コマの授業を2人の教員で分担して行うということで、いつも以上に細かい配慮や準備が必要となったが、授業の組み立てを細かく再確認する良い機会となった。和歌が教材だったため、どの和歌を取り上げるか、作者の心情を生徒が考える上で効果的なものは何か等を他校の先生と繰り返し話し合い、授業を組み立てていく過程は非常に新鮮であり、勉強になった。

授業後の協議では、指導主事の物部長幸先生からご助言をいただいた。言葉では言い表せないほどの作者の心情を、何とか言葉で表現しようと思える生徒の姿を引き出した授業展開を評価していただき、思考を通して知識を身に付けること、そして思考を深めるための知識を身に付けることの重要性を教えていただいた。また、古典の学習においては、ねらいを達成するためにICTを効果的に活用することがより必要になっていくとアドバイスいただいた。

2 これまでの10年を振り返って

中堅教諭等資質向上研修を通して、ミドルリーダーに必要とされる資質について、「あきたキャリアアップシート」による評価をもとに、自身のこれまでの取り組みの確認や評価を行うことができた。

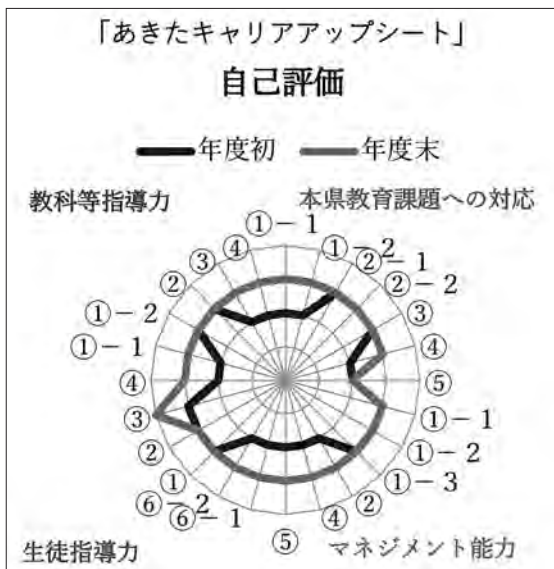
秋田県教職員キャリア指標で最終評価を行ったところ、求められる資質能力において、本県の教育課題への対応やマネジメント能力の分野で課題の残る評価が多かった。今後も学校運営に主体的に参画してことや校外研修への参加など、積極的かつ継続的に研修に取り組んでいきたい。

第3ステージ（目安：11年目～）実践的指導力充実期

個人情報

所属	校種	氏名	教職経験
秋田市立秋田商業	高等学校	柴田 佳代子	11

	本県の教育課題への対応							マネジメント能力							生徒指導力				教科等指導力						
	①-1	①-2	②-1	②-2	③	④	⑤	①-1	①-2	①-3	②	③	④	⑤	⑥-1	⑥-2	①	②	③	④	①-1	①-2	②	③	④
年度初	2	2	3	3	3	2	2	3	3	3	2	2	2	2	2	2	3	3	3	2	2	3	3	2	2
重点	0	0	0	0	○	0	0	0	○	0	0	0	0	0	0	○	0	0	0	0	0	◎	0	0	
年度末	3	3	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	3	3	3	3	3	
	2.43 2.86							2.33 3.00							2.75 3.25				2.40 3.00						



研修のあしあと

期 日	研修名	主な研修内容
6月 25日～	中堅教諭等資質向上研修講座Ⅰ	・教育公務員の服務・学校の危機管理 ・質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略
8月 2日～	中堅教諭等資質向上研修講座Ⅱ	・高い専門性に基づく教科指導の充実と推進
8月 6日～ 8月 8日～	選択研修	・図書館業務について・書架整理・カウンター業務・本の装備、修理・移動図書館 ・POP作成
9月 4日～	公立高等学校中堅教諭等資質向上研修「授業研修」	・授業実践、授業参観、研究協議
9月 19日～	中堅教諭等資質向上研修講座Ⅲ	・人間としての在り方生き方を考える道徳教育・いじめの理解と対応 ・気になる生徒の事例を通じた具体的対応の理解
10月 17日～	中堅教諭等資質向上研修講座Ⅳ	・学校全体で取り組む情報教育・学校組織の一員として（キャリアデザイン） ・これからの学校教育

選択研修報告書

所属校	秋田市立秋田商業高等学校	職・氏名	教諭 柴田 佳代子
研修先	秋田市立中央図書館 明德館		
研修期間	令和6年8月6日(火) ～ 令和6年8月8日(木)		
<p>1 研修の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・館内見学、図書館業務(一般書、児童書、郷土資料、行政資料等)の説明、図書分類の説明 ・読書活動推進計画(電子書籍、こどもの読書、YAサービス等)の説明 ・書架整理 ・カウンター用務(1、2階) ・イベント(夏休み児童マイバッグ作り講座)の準備 ・本の整備、修理、背ラベル貼替え作業 ・フォンテ文庫見学、読み聞かせ実習 ・移動図書館イソップ号乗車 ・POP作成 <p>2 研修の成果(今後への生かし方も含むこと)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・普段利用することが多い場所ではあるが、改めて、専門的な知識や技術を持っているたくさんの職員の方々が、様々な業務を分担して行うことで成り立っているということを実感した。また、表からは見えない部分での業務が多岐に渡っているということも実感した。 ・市立図書館と県立図書館とでは、扱っているものや担っている役割が異なる。 ・電子書籍の導入や、更に細かな分類による背ラベルの貼替え、また、今年度から新聞や郷土資料のフィルム保存が廃止となるため、どのような手段で残していくのか等、今がまさに変革期である。 ・本や資料はどんなに古くなくても廃棄の対象ではない。必要とする人にいかに効率よく提供していくのが課題である。 ・レファレンスに力を入れている。図書館として課題の答えや見解を示すものではなく、あくまでも解決のための手段を提供する。その手段として、市立図書館だけではなく、県立図書館や国会図書館も活用する。 ・YA(ヤングアダルト)サービスに近年は力を入れている。活字離れが進む中、私たち教員にも共通する課題である。 ・イベントは読書活動推進のための大切な事業の一つである。 長期休み中の子ども向け講座、近隣文化施設との共同スタンプラリー、竿燈期間中の実演コーナー、自由研究コーナーでのレファレンス等、職員の方々の工夫が様々な面で見られた。 ・フォンテ文庫、移動図書館それぞれに大きな役割があり、市民にとってなくてはならない存在である。特に移動図書館は暑い中でも年配の方や子ども連れのお母さんがたくさん訪れてくれ、必要とされていると実感した。職員の方の配慮も素晴らしかった。 <p>〔今後に向けて〕</p> <p>本を手にとってもらうために、そして地域の図書館や自校の図書室を生徒に利用してもらうために、どのような働きかけが必要なのかを改めて考えさせられた。「本を読もう」「この本がおすすめ」だけでは読書活動推進とは言えない。「本を読む」以外の視点からのアプローチも含めて、自校の図書館司書や他の国語科教員と一緒に、「本を読む意義」「本を読む楽しさ」を生徒に伝えていきたいと考えている。</p>			

第一学年 国語科(言語文化)学習指導案

日 時：令和6年9月4日(水)

対象クラス：1年E組

使用教科書：「探求 言語文化」(桐原書店)

指導者：柴田 佳代子、柴田 淳 司

1 単元名 作品世界を豊かに想像する(新古今和歌集)

2 単元の目標

- ・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解することができる。
〔知識及び技能〕(2)ウ
- ・作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈することができる。
〔思考力、判断力、表現力等〕B(1)イ
- ・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとしている。
〔学びに向かう力、人間性等〕

3 単元と指導観

言葉の働きを理解することを通して、言葉の価値を認識するとともに、文法事項や表現技法の理解をもとに、さまざまな作品に表れた世界を豊かに想像できるようにする。そして、理解を通して作品に表れるものの見方、感じ方、考え方などを尊重すべき文化価値として認識して、後世に伝えようとすることを目指す。

4 単元の指導計画と評価計画(1時間)

時	評価規準			学習活動
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	
1	古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解している。	作品の内容を解釈することにおいて、根拠をもって見解をまとめている。	言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとしている。	「三夕の歌」を音読し、表現技法や文法事項、語句の意味を理解しながら、それぞれの歌を解釈し、作者の思いを言葉でまとめる。

5 本時の計画(1時間)

- (1) 本時のねらい ・「三夕の歌」を解釈し、作者の思いを自分の言葉でまとめることができる。
- (2) 授業の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・「三夕の歌」を音読する。 ・本時の目標を理解する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">「三夕の歌」を解釈し、作者の思いを自分の言葉でまとめる。</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・リズムを意識して音読するよう促す。 	
展開 (35)	<ul style="list-style-type: none"> ・表現技法、文法事項、語句の意味を理解し、現代語訳する。 ・それぞれの歌を解釈し、作者の思いを自分の言葉でまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・三句切れや体現止めなどの技法に気付けるよう、共通点を見つけさせる。 ・脚注を確認させたり文法事項を提示したりして、現代語訳に取り組ませる。 ・新古今和歌集の特徴を確認し、解釈の参考にするよう促す。 ・表現技法や文法事項、語句の意味を再度確認させ、解釈の視点を与える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの歌を解釈し、作者の思いを自分の言葉でまとめている。 (ワークシート、発表)
まとめ (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の振り返りをする。 		

特定課題研究レポート

所 属 校	秋田市立秋田商業高等学校	職・氏名	教諭 柴 田 佳代子
研究内容	A：本県の教育課題に関する研究 B：マネジメントに関する研究 C：生徒指導に関する研究 ④：教科指導に関する研究 E：道徳教育に関する研究 F：特別活動に関する研究 G：総合的な学習の時間に関する研究 H：特別支援教育に関する研究 I：その他 (選択したものに○を付けること)		
研究テーマ	文学国語における定番教材の工夫と効果		

1 研究の概要

本校では2年次から3年次にかけて「文学国語」(『新編文学国語』大修館書店)と「論理国語」(『新編論理国語』大修館書店)を学習している。「論理国語」は生物の進化、文化と価値観、人工知能との共生、情報社会、環境問題、政治の本質など、高校生にとって自分の生活や進路に直結する題材が多いため、興味関心を持って授業に臨む姿が見られた。それに対して、「文学国語」では「文章が長い」「登場人物の心情を考えるのが難しい」「作者が読者に伝えたいことが分からない」などと、文学作品や「文学国語」の授業そのものに苦手意識を持っている生徒も少なくない。

「定番教材」として読み継がれてきた作品にはやはり大きな魅力があり、教員も「豊かな感性を育てたい」「作者の意図を読み取り自身の成長につなげてほしい」という願いを持って授業を行っている。生徒と教員間の「文学作品を授業で読む意義」における溝を埋めるために、現3年生にどのような工夫を用いて「定番教材」の授業を行ってきたかや、それに対する生徒の反応や理解度をまとめた。

	主題	読み	授業における工夫	生徒の感想
①『ナイン』 井上ひさし 1987年 全文	<ul style="list-style-type: none"> 友情・信頼関係・絆・連帯感・誇り 子ども時代の体験がその後の人生に残したもの 	<ul style="list-style-type: none"> 黙読(全文) ペア読み(段落) 	<ul style="list-style-type: none"> 少年野球団のナインそれぞれの過去と現在を詳細にまとめさせる 登場人物関係図 自分の部活動経験と照らし合わせる→感情移入を促す 	<ul style="list-style-type: none"> 登場人物が多い。 野球のポジションが分からない。 なぜ正太郎を許せるのか。すっきりしない。 感情移入できない。
②『山月記』 中島敦 1942年 全文	<ul style="list-style-type: none"> 自身の内面 自意識過剰の心理 非人間性 不条理な運命への嘆き 	<ul style="list-style-type: none"> 音読CD(全文、段落)→繰り返すことで漢文訓読体のリズムを捉えさせる グループ読み(指定段落) 	<ul style="list-style-type: none"> NHK 高校講座 イラスト化 便覧の活用 印象深い場面を四コマ漫画化 李徴と袁愴の対比(色分け) 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の内面にふさわしい生き物になるとしたら・・・ 袁愴がいい人。 李徴が可哀想。 長いけれど面白い。 「尊大な羞恥心」「臆病な自尊心」の矛盾に気が付いた時、すごいと感じた。
③『鞆』 安部公房 1975年 全文	寓意 <ul style="list-style-type: none"> 日常における「自由」「選択」 現代人の根源的な不安 	<ul style="list-style-type: none"> 黙読(全文) ペア読み(段落) 	<ul style="list-style-type: none"> Youtube 自主映画映像を通して『鞆』の世界観を感じさせる→「分からない」「難しい」で終わらせない 『100分de名著』(NHK) 	<ul style="list-style-type: none"> 不思議な文章。 自分の鞆の中には自分が選択したものが入っていて、それが自分を導いている。例えば、「高校」「部活動」など。 「性別」など生まれ持ったものもある。 今後の進路についても考えさせられた。
④『山椒魚』 井伏鱒二 1929年 全文	寓意 <ul style="list-style-type: none"> 人間の弱さ・不安・屈折・孤独 絶望・焦り 	<ul style="list-style-type: none"> 黙読(全文) ペア読み(段落) 	<ul style="list-style-type: none"> イラスト化 山椒魚と他の生き物のやり取りを詳細にまとめさせる→心情の変化 	<ul style="list-style-type: none"> 語句が難しくて内容が頭にはいつてこない。 自業自得。 うっかりしていると身動きがとれなくなる状況は自分にも当てはまる。

⑤『こころ』 夏目漱石 1914年 長編小説三部作 一部抜粋	・エゴイズム ・恋愛と友情 ・孤独	・黙読（全文） →クラスによって偏りあり ・グループ読み（指定段落）	・NHK 高校講座 ・『100分 de 名著』（NHK） ・登場人物関係図 ・便覧の活用 ・「私」とKのすれ違いに焦点を当てる ・キーワードの整理	・長い。読み切れなかった。 ・結局「私」って誰？ ・登場人物は少ないけれど、混乱する。 ・単純に「三角関係の恋愛小説」ではない。 ・Kの自殺の場面に驚いた。 ・全員すれ違い。あの時あの一言が言えれば・・・と思う。 ・全文を読みたくなった。
--	-------------------------	--	--	---

2 成果と課題

どの教材も、まずは「どのようにして全文を読ませるか」に工夫が必要となる。教材によっては、クラスの読書環境に合わせて読ませ方や授業展開を変えることもある。また、クラスや個々の生徒によっても、主題のとらえ方や理解度も様々である。作者が意図する主題を強要するのではなく、「自由に読ませたい、その結果として主題を読み取って欲しい」とは思うものの、なかなかその通りにはいかず、悩む場面が年々増えてきていると感じる。

多くの人々が読み継いできた文学作品を、「教科書にあったから授業で読む」という手段であったとしても、そこから普遍性を持った教養に高校生を導いていくことは大きな意義のあることだと考える。しかし、その長大な分量に圧倒され、読むこと自体を難儀だと感じている。また、取り扱われる時代や社会が高校生の現在から相当離れているため、内容の複雑さや深さを理解できないまま、学習を終えてしまう生徒が一定数存在するのが現状である。だからこそ、教員の授業展開における創意工夫、生徒に思考を促す発問、さらなる教材研究が必要だと強く感じている。

その一つとして、ICTの活用は欠かすことができない。例えば、本文の分量に苦手意識を持つ前に、ICTを活用して時代背景や物語の概要を説明したり、登場人物を整理したり、作者の情報を提供したりすることで、授業への取り組み方や理解度を向上させることができた。ただ、信頼度が不正確な情報も多々あるため、どの情報を生徒に提供するか取捨選択することも課題の一つである。また、国語便覧も紙媒体だけではなくQRコードで視覚的、聴覚的に情報を提供している。そちらも生徒自身が積極的に活用するよう、働きかけが必要である。

定番教材ではないが、『離さない』（川上弘美作）は実際の授業を通して、非常に魅力的な文学作品だと感じている。偶然拾得した人魚に魅了され、日常生活が破綻していくというストーリーだが、私自身も読んだ時心が沸き立った。そして、この作品を読んだ生徒がどのような反応をするのか、楽しみになった。この教材に関しては、あえて先入観をもたせないようにし、授業の中で生徒の表情が変わり、「怖え〜」「先生、これどうなるの?」という反応を見た時、これが国語教師の醍醐味だと感じた。主題も生徒自身が「執着（依存）すること、されること」と的確に理解し、実生活に照らし合わせて考えていた。ファンタジー要素を通して、現代社会の問題点を鋭く描いている「新定番教材」だと感じている。

選択研修でお世話になった明德館図書館の方も「中高生の読書生活を豊かにするということは本当に難しいことだ」とおっしゃっていた。今後はさらに授業でICTをより効果的に活用することや、現代の生徒に何を身に付けさせたいかということを明確にし、アレンジを加えていくことが求められている。

最後に、「あなたが考える文学の意義」に対する生徒の考えを抜粋して紹介する。生徒の考えを真摯に受け止め、私自身の文学作品に対する価値観をブラッシュアップさせながら、一つひとつの教材と向き合っていきたい。

- ・時代や地域、世相によって変わる価値観を作品として残すことに意義がある。それを読む人間が文学を通して異なる価値観を知ることによって新たな発見があり、人間として豊かになれる。人間として広い視野が持てれば、世界は何百倍も面白い。
- ・私はその時代の人たちの考えや、何を軸にして生きているのかについて興味があり、文学はそれを感じることができる唯一の媒体である。また、その時代を生きる人にも後世に生きる人にも考えや思いを伝えることが文学の意義だと考える。
- ・文学の意義とは、想いを形に残すことだ。文学作品には様々な種類があり、その中で全く同じものはない。それは、語り手や書き手の想いが形になるからだ。そして、言葉の美しさを知ることができる。
- ・文学は人の素晴らしさ、また愚かさを表現している。例えば『山月記』では謙虚さを失ってしまった人はどうなるのかを表現している。主人公と比べて自分はどうかと見つめ直すことができる。
- ・文学作品はその時代の価値観や人々の思いを、現代を生きる我々が共有できる貴重なツールである。
- ・登場人物の言動から心情を読み取り、そこに共感できる力は日常生活においても大切である。人の心情を考え共感できることはより良い人間関係を築く上で必要である。
- ・新しい本を読むたびに、新しい自分になれたような気がする。文学は常に新しい可能性を持っている。
- ・結論というものはなくても、作者が私たちに対してメッセージを送っていて、それを読み取るのが文学の楽しさである。
- ・生き方だと考える。文学作品を通して、生きていく上での大切なことや考えさせられるようなことを学んだ。

中堅教諭等資質向上研修講座(高等学校)を受講して

英語科 今野千佳

1 校外研修について

① センター研修

I期	6月25日(火) (オンライン)	【開講式】中堅教諭等への期待 ○教育公務員の服務 ○学校の危機管理 ○質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略
II期	8月2日(金)	○高い専門性に基づく教科指導の充実と推進
III期	9月19日(木)	○人間としての在り方生き方を考える道德教育 ○いじめの理解と対応 ○気になる生徒の事例を通じた具体的対応の理解
IV期	10月17日(木)	○学校全体で取り組む情報教育 ○学校組織の一員としてーキャリアデザインー ○これからの学校教育 【閉講式】中堅教諭等資質向上研修を終えるに当たって

I期はオンラインで行われ、主任指導主事石川政昭先生より「学校の危機管理」についての講義・演習が行われた。事前のリスク・マネジメントによる危機の未然防止は他の研修でも多く取り扱われてきたが、この研修では事件・事故発生時のクライシス・マネジメントに焦点を当てていることが新鮮であり、中堅教諭として新たなステージに上がったことを実感させられる研修であった。事件・事故の発生時には「最悪の状態を想定し」「慎重に」「素早く」「誠意をもって」「組織的に」対応するというクライシス・コミュニケーションの「さしすせそ」を意識し、冷静な判断を心掛けたい。

II期は教科指導の研修で、同じ英語科の研修者と事前に録画した授業のビデオを見ながら協議した。この研修を通して授業者としての学びももちろん多かったが、参観者として客観的に他者の授業を評価する力のなさを痛感した。授業の細部で気付くことはあっても大枠を見て評価する力が乏しい。校内研修の一つである若手教員への指導・助言の機会にはねらいや評価の方法まで広く一貫性をもって見られるよう、自分自身の成長に繋げる研修にしたいと気持ちを新たにした。

III期は生徒指導に関する研修で、指導主事八柳英子先生の「人間としての在り方生き方を考える道德教育」に関する講義を受講した。平成30年から始まった小中学校における道德の特別教科化について聞くと、私自身が受けてきた道德の授業とは大きく異なっており、主体的に自分との関わりの中で「考える」こと、多様な考え方、感じ方と出会い、交流して「議論する」ことが大きな柱になっていると学んだ。道德が教科化していない高校だからこそ発問に工夫を入れることで積極的に授業にも取り入れ、アメリカや中国、韓国の高校生と比べて自尊感情や自己肯定感の低い日本の高校生の「道徳的判断力」「道徳的心情」「道徳的实践意欲」「道徳的態度」を養成できる教員を目指したい。

IV期は情報教育、キャリア教育の研修で、指導主事小西一幸先生の「学校全体で取り組む情報教育」について生成AI活用やBYOD、GIGAスクールに関する講義を受講した。生成AIの教育的利

用に関して「使うと生徒が考えなくなる」という考え方を脱し、「使って考えさせる」指導方法が必要になっていると再認識した。生成AIの使用の際には的確なプロンプト(指示)やハルシネーション(幻覚)が起こる可能性を踏まえたファクトチェックの必要性など具体的に学ぶことができ、指導するイメージが湧くようになった。一方でBYODやGIGAスクールなど学校・行政段階での管理設定も重要である。その点は専門性のある商業科の先生方の指示を仰ぎながら、商業高校である利点を活用して学ぶ機会を増やしたい。

② 選択研修

教育現場における多文化共生の実現に向けて教職員・生徒の理解や適切な対応を促すため、秋田県の現状を把握し、実践的な対応力や指導力を養成したいと考え、公益財団法人秋田県国際交流協会(AIA)で3日間研修を行った。秋田県在住の外国人は中国・フィリピン・ベトナムの順に多く、英語よりも「やさしい日本語」を求める傾向が高いという話が印象的であった。また、育成就労制度への変更に伴い、日本語が不自由な就労者家族の移住の増加が予想される。そうした加速度的に進むグローバル化の中で簡単な英語や「やさしい日本語」での異文化コミュニケーションに苦手意識なく向かうことのできる姿勢をもつ生徒の育成が英語科教員の使命であると感ずる研修であった。

③ 授業研修

9月5日(木)に秋田中央高校の1年生を対象に英語コミュニケーションⅠの授業を行った。面識のない生徒を相手に他校で勤務する教員と協働でTTを行うのは時間配分や指導内容に関する意思疎通など難しい面が多くあったが、一人で授業を組み立てるのとは違う多くの刺激があった。秋田県教育庁高校教育課指導主事浅野朋央先生からは技能統合について、自分の意見を言ってスピーキングのみで終わるのではなく、その後にライティングを行い、一人で集中して自分の考えと向き合わせることが重要であると助言をいただいた。また、中学校でよく話題に挙がるという「もくばじょう」という言葉も印象に残った。言語活動を行う際には「目的(もく)・場面(ば)・状況(じょう)」を設定して生徒が教室で英語を使う必要性を高めることで学習内容をより自分に近づけ(Personalization)、学習の動機付けをするというものであった。同期の教諭の授業から刺激を受け、指導主事から新たな知識を学んだこの研修は、教員の第一義である教科指導に真摯に向き合う重要な時間となった。

2 校内研修について

校内研修では年間を通して、基礎的素養、教育課題への対応、マネジメント能力、生徒指導力、教科等指導力について様々な先生方から指導していただいた。

副校長佐藤かおる先生からは「ユネスコスクールについて」の講話をしていただいた。秋田県で3校しかないユネスコスクールである本校だからこそ、その意義や課題について改めて学び、学校のマネジメントについて考えるきっかけになった。特に国内外の他の高校との交流を盛んにすることは県内の他の高校との差別化にも繋がり、他県の商業高校との交流は本校生徒にとって商業高校生としてのアイデンティティを高め、社会に対する視野を広げる機会になると感じた。英語科教員として、その先に待つ国外交流に向けて生きた英語を身に付けさせられるよう授業に力を入れたいと教科指導力向上の必要性を再認識した。

教科指導については10月29日(火)にアピール授業を行い、本校の先生方に加えて秋田市教育委員会学校教育課副参事指導主事工藤香苗先生と秋田県教育庁高校教育課指導主事浅野朋央先生にも参観後に助言をいただいた。今年度の校内研修テーマを基に授業のねらいを「ICT活用」とし、Google ClassroomやGoogle スライドを活用した授業を行った。生徒はICTの使用に慣れており滞りなく進めることができたが、ICTの活用に気を取られ、個人でのスライド作成に多くの

時間を割いてしまったことによる言語活動の偏りが反省点として指摘された。英作文のフォーマットを与えたり、ペアやグループでの協働的な活動にしたりなど様々な助言をいただいたので、効果的なICT活用と言語活動のバランスを目指して今後の参考にしたい。

3 これまでの10年を振り返って

中堅教諭等資質向上研修に当たる今年度の6月と12月に「あきたキャリアアップシート」による評価を行い、「本県の教育課題への対応」「マネジメント能力」「生徒指導力」「教科等指導力」に関して客観的に自己の能力を確認した。

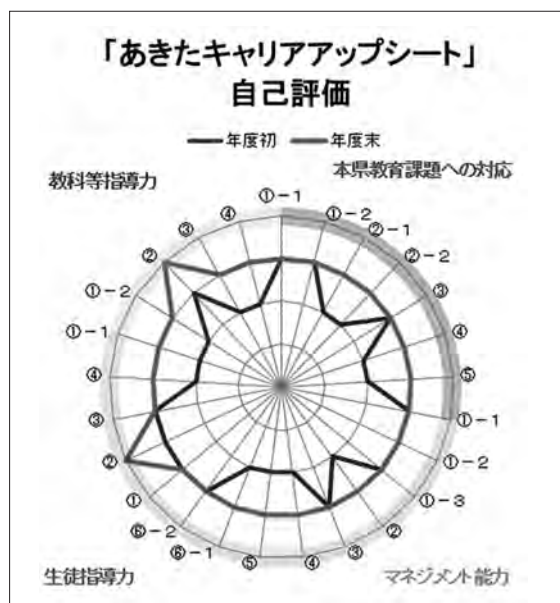
今年度は苦手意識のあったICT教育を意識し、積極的に行動に移すことで重点課題に向き合うことができた。今後は学校運営にも主体的に参画できるようミドルリーダーとしての役割を理解し、意欲的に研修に取り組みたい。

第3ステージ（目安：11年目～）実践的指導力充実期

個人情報

所属	校種	氏名	教職経験
秋田市立秋田商業	高等学校	今野 千佳	11

	本県の教育課題への対応							マネジメント能力							生徒指導力				教科等指導力						
	①-1	①-2	②-1	②-2	③	④	⑤	①-1	①-2	①-3	②	③	④	⑤	⑥-1	⑥-2	①	②	③	④	①-1	①-2	②	③	④
年度初	3	3	2	2	3	2	2	3	3	3	2	3	2	2	2	3	3	3	3	2	2	2	3	2	2
重点	0	0	0	0	0	0	◎	0	0	0	0	0	○	0	0	0	0	○	0	0	0	0	0	0	○
年度末	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	3	3	3	4	3	3
	2.43							2.56							2.75				2.20						
	3.00							3.00							3.25				3.20						



研修のあしあと

期 日	研修名	主な研修内容
6月 25日～	中堅教諭等資質向上研修講座Ⅰ	・教育公務員の服務・学校の危機管理 ・質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略
8月 2日～	中堅教諭等資質向上研修講座Ⅱ	・高い専門性に基づく教科指導の充実と推進
8月 7日～ 8月 9日	選択研修	・秋田県国際交流協会の事業内容説明・秋田県の国際化の現状・国際協力 ・やさしい日本語・多文化共生に関わる事務
9月 5日～	公立高等学校中堅教諭等資質向上研修「授業研修」	・授業実践、授業参観、研究協議
9月 19日～	中堅教諭等資質向上研修講座Ⅲ	・人間としての在り方生き方を考える道徳教育・いじめの理解と対応 ・気になる生徒の事例を通じた具体的対応の理解
10月 17日～	中堅教諭等資質向上研修講座Ⅳ	・学校全体で取り組む情報教育・学校組織の一員として（キャリアデザイン） ・これからの学校教育

選択研修報告書

所属校	秋田市立秋田商業高等学校	職・氏名	教諭 今野千佳
研修先	公益財団法人秋田県国際交流協会(AIA)		
研修期間	令和6年8月7日(水)～令和6年8月9日(金)		
<p>1 研修の概要</p> <p>8月7日(水) 10:00～ 実習内容及びAIA事業紹介 11:00～ 「あきた国際フェスティバル」ワークショップ説明文作成 13:00～ 「あきた国際フェスティバル」ワークショップ準備</p> <p>8日(木) 10:00～ 「やさしい日本語」について 13:00～ 「あきた国際フェスティバル」チラシ発送 15:00～ 「インターナショナルデイ」参加</p> <p>9日(金) 10:00～ 外国につながる子どもへの日本語学習支援について 13:00～ 「あきた国際フェスティバル」ワークショップ準備 15:00～ 実習まとめ</p> <p>2 研修の成果(今後への生かし方も含むこと)</p> <p>私は自分の興味関心が深い国際交流・国際協力の分野で自らの専門性や得意分野を伸ばしたいと思い、秋田県国際交流協会での研修を希望した。今までも保護者が外国籍の生徒や外国にルーツのある生徒の対応はしたことがあったが、秋田県全体や他校種での現状はどうなっているのか、実際にそうした児童生徒・保護者はどのような困難を抱えているのか、また、教員としてどのような対応が望ましいのか、実践的な対応力や指導力を養成したいと考えた。</p> <p>私自身の考えがこの短い研修の中で大きく変化した。そのきっかけになったのは、2日目の「やさしい日本語」について教わったことである。英語科の教員として外国につながる生徒やその保護者の対応には、英語ができればある程度は可能であるという奢りがあった。しかし、秋田県の在住外国人は中国・フィリピン・ベトナムの順に多く、英語よりも「やさしい日本語」を求める傾向が高いことを学んだ。高校でよく作成するプリント(志望理由書)を「やさしい日本語」に直す演習では、日本語をかみ砕いて伝えることを意識した。教わったウェブサイト「やさしにチェック」で自分が直した文章が「やさしい日本語」として認められた時には達成感を感じたが、一方で「学部」や「職種」といった言葉をどのように言い換えて伝えるべきかは難しかった。実際に対応が必要な場面では、その生徒・保護者の日本語レベルや文化的・宗教的背景を考慮して文書等を作成するよう心掛けたい。</p> <p>また、3日目の「外国につながる子どもへの日本語学習支援」の講話における佐藤次長の「外国につながる子どもをドロップアウトさせてしまうか、地域社会で活躍する人材に育てるか」という言葉も大変印象的であった。弘前大学を中心として先進的な対応をしている青森県と比較すると、今の秋田県の教育現場でも必須の考え方だと感じた。「技能実習生制度」から「育成就労制度」に変更するにあたり、多くの外国人が家族を呼び寄せて永住する可能性が高まるという。そうした中で英語も日本語も不自由な児童生徒・保護者が増加する可能性があり、その対応について早急に検討すべきである。少子高齢化や人口流出が激しい秋田県においては、多様な問題解決に多文化共生の考え方は重要である。特に、インバウンドが進む昨今、双方の言語や文化を理解していることはプラスに働く。秋田県の活性化のためにも、外国につながる子どもの居場所を学校でも社会でも確保すべきである。</p> <p>学校や社会が多文化共生の道を確保するだけでなく、個人の考え方や向き合い方も時代とともに変わっていくべきだと思う。それを生徒に指導するのが学校であり、私のような英語科教員が一番近い存在であると感じた。このように感じたきっかけは、この研修期間中に起きた南海トラフ想定震源域内でのマグニチュード7.1の地震である。こうした予期せぬ災害時に使用されるのが初日に見せてもらったヘルプカードで、日本語がわからない、地震という災害の知識や経験がない外国人在住者が、その状況に困惑したときに近くにいる人にこのカードを見せて助けを求めることができるというものである。その際に、言語や文化の壁を恐れずに落ち着いて対応してくれる人はどれだけいるだろうか。ヘルプカード自体は指差し会話ができるような作りになっているが、慌てた状態の外国人に対して冷静に対応することは決して容易ではない。困っている外国人に怖れを感じずに手を差し伸べる姿勢を育てるのはもちろんのこと、英語科教員として、英語での簡単なやり取りに苦手意識を持たないこと、英語以外の言語話者であっても相手の意図をくみ取るような姿勢をもつことを日頃の授業で生徒に指導することは可能だと考える。秋田にいてもグローバル化を避けられない現代を生きる高校生にこそ、そうした姿勢は不可欠である。英語科教員としての新たな役割を実感する貴重な3日間であった。</p>			

英語科「英語コミュニケーションⅠ」学習指導案

日 時：令和6年9月5日(木) 2校時
 場 所：秋田県立秋田中央高等学校 1年 F組 教室
 対 象：秋田県立秋田中央高等学校 1年 F組
 指導者：今野 千佳(秋田市立秋田商業高等学校)
 指導者：ミハイロヴァ アンナ(秋田県立能代松陽高等学校)
 教科書：LANDMARK English Communication I (桐原書店)

1 単元名 Lesson 4 Eco-Tour on Yakushima Part 1

2 単元の目標

屋久島についての英文を読んで、その特徴や歴史について知る。さらに、日本の世界遺産や環境保存に対して意識を高める。生徒の実生活と結びつけて、この単元の文法・語彙を使って生徒各自の好みや興味のあることについて会話し意見を言えるようになる。

3 単元とCAN-DO形式での学習到達目標との関連

事実や意見などを簡単な英語で述べるができる。【1年 話すこと(発表)】

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを伝えるために必要な語彙や表現等を理解している。 世界遺産の魅力とその保護について、論理的に話して伝える技能を有している。 	聞き手に自分の考えをよく理解してもらえるように、世界遺産の魅力とその保護についての情報や考えを、聞いたり読んだりしたことを基に、論理的に話して伝えている。	聞き手に自分の考えをよく理解してもらえるように、世界遺産の魅力とその保護についての情報や考えを、聞いたり読んだりしたことを基に、論理的に話して伝えようとしている。

5 単元観

本単元は世界遺産である屋久島の環境保全とエコツアーの取り組みについての内容である。旅行について発問やペアワークをしてから内容読解を行い、それについて自分の意見を言えるように指導したい。扱われている言語材料は、日常生活でも利用できる表現や単語(There are two.. One is... The other is ... / orientation / responsible / to be responsible for...)である。自分の考えを話したり書いたりする際に、適切に表現できるように理解させたい。

6 生徒観

和やかな雰囲気であるが積極的な生徒が多い。英語に対する苦手意識を持つ生徒もいるが、ペアワーク・グループワークなどのクラスメイトとのコミュニケーション活動に積極的に取り組み、教師の問いかけに対する発言も活発である。与えられた課題等によく取り組む反面、英語の学力を伸ばす姿勢としてはまだ受け身な面が見られるので、自主性・主体性の涵養が今後の課題である。

7 単元の指導と評価の計画(総時間：8時間)

主な言語活動等 (◎本時の内容)	評価方法
◎本文を読む前に、秋田県でのエコツアーを外国人に提案するプレゼンテーションをペアで作成し、グループやクラスで共有する。 ・説明文を読み、屋久島の特徴やエコツアーでの取り組みについて理解する。 ・読み取った内容に関する自分の考えを、ペアで話して伝える。 ・エコツアーの意義や世界遺産の価値について考え、ペアやグループで伝え合う。聞き手は疑問点などを質問する。	<ul style="list-style-type: none"> 活動の観察 ワークシート 定期考査

8 本時の計画(1/8)

(1) 目標

秋田県でのエコツアーを外国人に提案するプレゼンテーションを簡単な英語で行うことができる。

(2) 本時の展開

過程	学習活動	教師の支援及び留意点
導入 7分	<ul style="list-style-type: none"> あいさつ ウォーミングアップ 発問 <ul style="list-style-type: none"> 授業の流れと本時の目標について 	a) 当日のテーマについて生徒に質問し、スムーズに展開に移れるよう支援する。 Look at the picture. What can you see in it? Trees/forest/nature/Yakushima など生徒の答えを拾って次の発問に繋げる。 b) What World Heritage sites have you visited / do you want to visit and why? P 76 例: "I want to go to Yakushima because I want to hike and to swim, what about you?" ペアワーク 屋久島と他の場所の写真を提示し、簡単なクイズをやる。→ 必然性のある言語活動
展開 38分	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習課題を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の「授業の流れ」と「目標」を提示し、1時間の見通しを持たせる。エコツアーの意味について確認する。
	Propose your eco-tour to foreigners.	
	<ul style="list-style-type: none"> 教師のモデルから活動の流れを掴む。 それぞれ決められたツアー地について情報を読み取って表を埋め、足りない部分はインターネットで調べる。 ペアで紹介する練習をする。 グループで発表を行う。 いくつかのペアに全体に発表してもらう。 プレゼン内容を生かして紹介文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 「田沢湖」について T1 が生徒役、T2 が外国人役になり、モデルを示す。 ツアー地として「白神山地」「風の松原」「六郷湧水群」などをペアで重ならないように割り当てる。 各ツアー地の情報を書いた紙を渡し、足りない情報についてはインターネットで調べるよう指示する。 机間指導を行い、必要に応じて助言する。 聞くときのポイントについて説明する。 必ず次のペアがコメントや質問をするよう促す。 回収時に終わっていない場合にはノートに書くよう指示する。
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> 本時のまとめと振り返りを行う。 次の時間からの学習について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 良い発表や姿勢についてクラスに紹介する。 次の時間からの学習内容について説明する。

特定課題研究レポート

所 属 校	秋田市立秋田商業高等学校	職・氏名	教諭 今 野 千 佳
研究内容	A：本県の教育課題に関する研究 B：マネジメントに関する研究 C：生徒指導に関する研究 ④：教科指導に関する研究 E：道徳教育に関する研究 F：特別活動に関する研究 G：総合的な学習の時間に関する研究 H：特別支援教育に関する研究 I：その他 (選択したものに○を付けること)		
研究テーマ	英語の指導における生徒の生成AIの活用について		
<p>1 研究の概要</p> <p>県内唯一の商業単科高校である本校ではコンピュータを活用する授業が多くカリキュラムに組み込まれている他、その他の授業や課外活動においても1人1台端末の積極的な活用が促されている。しかしながら、半期ごとに行われる生徒のアンケートでは「授業ではタブレットなどのICT機器が積極的に使われている」という項目に対する回答が他項目に比べて低く、課題を感じる。そこで、この特定課題研究においても「教科指導におけるICT活用」を大きなテーマにしようと考えた。作文の課題提出やパフォーマンステスト時のスライド作成以外の時間ではあまりタブレットを使用していないのが現状であり、その理由を改めて考えると授業のマネジメントや評価の妥当性の難しさが自分の中では難点となっていることに気付いた。タブレットを使用すると生徒の表情や手元が隠れてしまうため、授業の理解や進度を測ることに難しさを感じる。生徒の統率を取り、授業に引きつけるには十分な手立てや準備が必要であり、タブレットを使用しない授業と時間対効果を比べてもタブレット使用に強い魅力を感じることができない。また、評価については、英作文を例にとると自分の力で作成したのか検索システムや生成AIを使用したのか判断ができず、その妥当性が確保されないという結論に行き着く。</p> <p>一方、私自身にも生成AIを使用して英訳する機会があり、今までの翻訳アプリ等とは異なる文章生成の精度の高さを実感した。既習事項を用いて構成を考え、自分の力で作文することはもちろん重要であるが、Society5.0を生きる現代の高校生にとって生成AIは想像以上に身近なものであり、AIをどのように活用してどのように共存していくかという議論は避けられないと改めて感じた。しかしながら、先に述べた不安材料は解決できていないため、今回の研究は教科指導ではなく総合的な探究の時間で実践することにした。本校の総合的な探究の時間ではビジネス実践学習「AKI SHOP」を行っており、地域の企業や団体の協力の下、商品開発やイベントの企画運営を行っている。私は昨年度から継続して「イベント課観光班」を担当しており、外国人をターゲットに秋田市内外を観光するバスツアーを計画している。参加者を募るポスター作成からバスの中でのレクリエーション、観光地での案内まで全てにおいて英語を用いるため、その中でルールを設けて生成AIの活用を許可し、そのことについて考察することにした。</p> <p>2. 成果と課題</p> <p>担当1年目の昨年度は指導が不十分であり、英文作成に関する適切な指示をしなかったため、検索エンジンで調べた単語を切り貼りしたことによる堅苦しく理解しづらい印象の文章となってしまった。ツアー後の参加者アンケートの自由記述欄には英語ガイドに関して以下の助言が書かれていた。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>Q.7 Was it easy to understand the English guide? <input checked="" type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> No</p> <p>Q.8 Please write any other comments or suggestions.</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p style="text-align: right;">Thank you so much ♡</p> <p>It was such a fun tour!! Thank you ~ ♡ Thank you for all your hard work! おつかいさまでした! About the English guide, I think you should use simple English so it's not as hard to read! Maybe it would be too difficult but it would have been nice if you translated some of the apple picking farms' staffs? (sorry I forgot his name)</p> <p style="text-align: center;">greeting!! please continue the good work ~~~~~</p> </div> </div> <p>この反省を受け、2年目である今年度は決められたルールの中での生成AIの活用を許可した。</p>			

<英訳作成時のルール>

- (1) 生成AIは総合的な探究の時間内に教員の指導の下、使用すること。
- (2) いきなり生成AIに頼るのではなく、まずは自分で英訳してみる。難しい場合には日本語をより簡単な表現に直して考えること。
- (3) 生成AIで英訳された内容・文章に間違いがないか自分で理解できるまで確認すること。
- (4) 説明する本人が理解できない語句や表現は伝わらないため、調べたり担当教員に聞いたりして理解した上で使用すること。もしくは使用を避けること。

この結果、昨年度は難しい語句が一貫性なく並んでいた説明が端的で伝わりやすくなり、参加者からの評価も良かった。

Q8. Please write any other comments or suggestions.

The English was easy to understand and helpful.
I liked the locations we visited.

Q8. Please write any other comments or suggestions.

It was amazing! Students' English is great!
Thank you so much for today! 😊

生徒自身も自分の中で理解した上で発信することで自信をもつことができ、よりスムーズな説明に繋がった。生成AIの利用についての生徒の感想は以下の通りである(抜粋)。

- ① 「生成AIを使ったら言いたいと思っていたことがすぐに変換されてすごいと思った。自分で英語にする時は難しいと思ったが、生成AIの英文を見たら習った表現が使われていた。」

ルール(2)で定めたとおり、生成AIを使用する前に自分で考えるよう順序を意識して指導した。こうすることで日本語と英語の語順の違い等のつまづきポイントに気付くきっかけとなった。また、英語運用能力がある程度高い生徒は、既習事項で理解していてもアウトプットするには難しい受動態や無生物主語構文等の実践的な使用法を学ぶよい機会となっていた。

- ② 「入力した日本語が曖昧だったため言いたかったことと異なる英文になってしまった。」

ルール(3)の見直しをしっかりと行ったことで間違いに気付くことができた。今回は入力した日本語に問題があったが、生成AIが常に正しいとは限らず、誤情報を生成する「ハルシネーション」が起こる可能性もある。そうした時のためにも内容や英文が合っているかのチェック体制について指導することができたと思う。

- ③ 「私たちはレクリエーション担当で「多数決クイズ」で聞く簡単なYes/No疑問文しか必要がなかったため、自分たちで英語にして先生に添削してもらった。直しは多かったが生成AIの必要性は感じなかった。」

自分の力で英文を作成することができる生徒には「生成AIを使用しない」という選択肢も正しいことであると言える。今回は指導しなかったが、①と同様、英文作成時には不要であっても比較対象として他の案を生成AIに求める勉強法も指導する価値があると思う。

中堅教諭等資質向上研修講座でも総合教育センター指導主事である小西一幸先生の講義「学校全体で取り組む情報教育」の中で生成AIの活用が取り上げられた。生成AIを使うと生徒が考えなくなるという考え方から脱却し、「使って考えさせる」流れを作るべきであるという話が印象的であった。その点においては今回の研究は得るものが多く、指導のイメージが湧くよい機会になった。今回は英文を作成する過程において生成AIを活用したが、文部科学省の『初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン(Ver.2.0) (令和6年12月26日公表)』には「英会話の相手」や「一人一人の興味関心に応じた単語リストや例文リストの作成」など多様な活用方法が挙げられている。個別の能力に応じた柔軟な指導など従来の授業形態では実現が難しい教育活動をサポートする道具として生成AIの積極的な活用を検討してみたい。そう考える一方で、授業内での教科指導としては前述した不安要素の解決には至らなかった。今後教育現場における生成AIの利活用に関する制度設計が進み、校内外でも研修が増えると予想される。そうした機会を積極的に活用し、中堅教諭として知識や経験を増やしていきたい。

最後に、今回のAKISHOPでは生成AIによる翻訳に加えてグラフィックデザインツール「Canva」を活用したしおりの作成にも挑戦した。例年手書きで作成していたが、授業でデザインを学習している情報コースの3年生が中心となって初めての生徒に教えながら、写真や情報を英語も交えて盛り込んだしおりが出来上がった。始めは無理難題を言ったと思ったが、デジタルネイティブ世代である生徒は我々の想像以上に対応力・創造力があると実感させられた出来事であった。生徒が成長する機会や可能性を摘まないよう柔軟な考えを持って学び続ける姿勢を忘れずに、今後も日々精進していきたい。



実践的指導力発展研修講座を受講して

教諭 児玉睦子

1 はじめに

この研修の目標は「豊富な経験を生かして積極的に学校運営に参画し、学校改善や若手教員の育成を推進する資質能力の向上を図る」である。同世代の人たちとの交流を通して、教職の意義を改めて考え、自分自身のキャリアを振り返る良い機会となった。

2 期 日 令和6年8月5日(月)

3 内 容

(1)〈講義・演習〉「実践的指導力発展講座①ーキャリアデザイナーー」

秋田県総合教育センター 主任指導主事 伊藤 文子 先生

(2)〈講義・演習〉「実践的指導力発展講座②ーコーチングの基礎ー」

秋田県総合教育センター スーパーアドバイザー 戸田 信彦 先生

(3)〈講義・演習〉「学校組織の一員として」

秋田県総合教育センター 主任指導主事 伊藤 文子 先生

4 成果と感想

コーチングについて学び、生徒の意欲と自発性を引き出すコミュニケーションのあり方を考え、コミュニケーションスキルを向上させることができた。コーチングとは、問いかけて聴くことを中心とした双方向のコミュニケーション。その根底にあるのは、生徒の成長を願う気持ちと生徒が解決方法を持っていると信じる気持ち。対等な関係性の中で、「どうすればうまくいくか」を考えさせ、「行動」を引き出すコーチングは、受身で承認欲求が強く、叱られることに慣れていない昨今の若者の傾向を踏まえると、今後一層求められるコミュニケーションスキルであると感じる。

グループワークでの協議から、この年代は役職にかかわらず職場のメンター的存在として果たすべき役割があることを再認識した。若手教員への支援を自分自身の課題とし、最善の形を模索しながら、自分自身のスキル向上にも努めていきたい。また、自校の課題を言語化し、システムの改善点についても積極的に発言していく必要があると感じた。現状に甘んじることなく、常に自分が何を為すべきかを考え続け、職場のよりよい雰囲気作りに貢献していきたい。

高等学校新任学年主任研修講座を受講して

教諭 鈴木 恵 一

1 はじめに

本講座の研修目標は、「学年経営に関する理論と実践の在り方についての研修を通して、実践的な指導力を高める」ことである。学年部全体を俯瞰してマネジメントできる能力が必要であるとともに、生徒と教師の双方向のコミュニケーションが重要であることを感じる貴重な時間となった。

- 2 期 日 第1回 令和6年5月28日(火)
第2回 令和6年6月27日(木)

3 内 容

- 第1回 (1)＜講 話＞ 「望まれる学年主任像と学年主任の役割」
秋田県総合教育センター スーパーアドバイザー 湯澤 寛 先生
- (2)＜実践発表＞ 「学年経営の実際」
秋田県立湯沢高等学校 教育専門監 平田 恵子 先生
- (3)＜講義・演習・協議＞ 「学年経営と組織マネジメントの基礎」
秋田県総合教育センター 主任指導主事 山田 直康 先生
秋田県総合教育センター 主任指導主事 鈴木 紀子 先生
- 第2回 (4)＜講義・演習＞ 「生徒指導における学年主任の役割」
秋田県総合教育センター 指導主事 高橋真理奈 先生
- (5)＜協 議＞ 「学年経営における課題への対応」
秋田県総合教育センター 主任指導主事 鈴木 紀子 先生
- (6)＜講 話＞ 「思春期の揺れと成長を共に歩む」
秋田赤十字病院心療センター 臨床心理士 丸山真理子 先生

4 まとめ・感想

研修内容を踏まえて、本校の課題として挙げられる「SNS等による生徒指導案件」と「整容の乱れ」の解決に向けて、学校と保護者の連携はもちろんのこと生徒たちも巻き込みたい。まずは「一部の満足感のために他者を傷つけるのは許さない」、「爽やかで清潔感のある身だしなみ」が本校のあるべき姿だという空気感を生徒たちに纏わせたい。そして生徒たちが地域や周囲から応援される存在になるよう指導していきたい。

高等学校新任道德教育推進教師研修講座を受講して

教諭 櫻田 伸吾

1 はじめに

本講座の研修目標は、「高等学校における道德教育について理解を深めるとともに、各校における道德教育の実践的な推進力を身に付ける」ことである。高等学校における道德教育の推進について、深く考えることができる良い機会となった。

2 期 日 令和6年7月3日(水)

3 内 容

- 〈実践発表〉 道德教育推進のための取組
秋田県立横手清陵学院高等学校 教諭 沼倉 健 先生
- 〈講義・演習〉 道德教育の今日的な課題と推進のための取組
秋田県総合教育センター 指導主事 八柳 英子 先生
- 〈公開講演〉 道德教育推進上の課題と道德教育推進教師の役割
十文字学園女子大学 教授 浅見 哲也 先生
- 〈協議・発表〉 道德教育推進に向けた課題と改善策の具体化
秋田県総合教育センター 指導主事 八柳 英子 先生

4 まとめ・感想

科目として設定がなく、高校で道德教育を行う認識がない中ではあるが、人間として大切なことを個々の先生がそれぞれ生徒に伝えている現状は、まさに道德教育であると思う。そうした個々の先生の指導をどう共有し、つなげていくかが本校においての課題であると感じた。

今年度のアピール授業で、家族をテーマにした道德の授業を実践させていただいた。普段とは違う表情で授業に取り組む生徒の様子や、想像していた以上に相手を思いやって様々なことを考えられていることに驚いた。本校の生徒に手応えを感じることができた時間であった。

現代社会が多様化する中で、高校教育においても「今までこうしてきたから」や「前例では…」は通用しない時代になってきている。混沌とした世の中だからこそ、道德教育の存在が非常に重要であると感じている。

「『話す力・聞く力』を育む指導の工夫」を受講して

教諭 糸田 由香子

- 研修の目標** 児童生徒の「話す力・聞く力」を高めるための実践的な研修を通して、指導力の向上を図る。
- 期 日** 令和6年9月20日(金)
- 場 所** 秋田県総合教育センター
- 参加者** 小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教員

【日程と内容】

講 義

「『話す力・聞く力』を育む指導の工夫について」

ABS秋田放送アナウンサー 賀内 隆弘 様

- ・聞き取りやすい音量や丁寧な話し方を心がけることが基本となる。
- ・インタビューでは身近な話題をもとに相手から言葉を引き出す。
- ・「上手に話す」ためには同時に「上手に聞く」ことも大切である。

演 習

児童生徒の実態をふまえて「話す力・聞く力」を育む効果的な指導方法を学ぶ(ペアワークとグループワークを併用)

- ・アナウンサーによる専門的な視点からの助言は的確で校種や教科が異なっても円滑に演習を行うことができた。
- ・児童生徒の実態として、特に小学校の先生方から聞いた内容が印象に残っている。近年は思いをうまく言語化できない子どもたちが増え、教室での人間関係に少しずつ影響しているとのことだった。
- ・思いをうまく言語化できないため、教室内で発表する時など、極度に緊張して周りに遠慮しすぎたり、逆に周りに何も配慮しなかったりする場面も見られることが話題にのぼった。
- ・今年度は午後からの半日の講座として実施したため、多くの先生方の受講が可能になったと説明された。
- ・最後に全4校種から1名ずつが選ばれデモンストレーションが行われた。高校からは私が指名されて緊張したが、与えられたテーマに沿って4名で和やかに話せたのは貴重な経験である。

感 想

- ・「相手を思いやり言い方に気を配ること」の重要性を再確認した。
- ・国語科だけでなく、どの教科にも役立つ内容である。
- ・他校種の先生方との交流は新鮮で、今後の指導に活用できるスキルが数多くあった。

「学校におけるICT活用の基礎」を受講して

臨時講師 佐藤 珠美

研修の目標 ICTの活用方法について理解を図るとともに、機器操作等について基礎的な知識と技術を身に付ける。

期 日 令和6年8月8日(木)

場 所 秋田県総合教育センター

- ・ **講 義** ICTの活用場面と方法
秋田県総合教育センター 主任指導主事 鈴木 紀子 先生
- ・ **講義・演習** タブレット・電子黒板・実物投影機の基本的な操作・活用
秋田県総合教育センター 指導主事 小西 一幸 先生
- ・ **講義・演習** オンライン授業の実際
秋田県総合教育センター 指導主事 斉藤 誠良 先生

○ICTの活用場面と方法

Society 5.0時代、デジタル化、オンライン化、DX加速の必要性。

授業改善につながるICT機器の活用【5つの視点】

- ①指示を明確にする場面で活用する。
- ②モデルを提示する場面で提示する。
- ③情報を共有する場面で活用する。
- ④繰り返しによる定着を図る場面で活用する。
- ⑤子どもの意欲を高める場面で活用する。

ICT環境は、教育現場において不可欠であり、デジタル社会で活躍できる生徒、成長分野の学部へ進学する生徒、企業などのDX化や成長産業を支える人材、自ら「問い」を発し、他者との関わりを通して主体的に問題を解決していく生徒の育成が必要である。

○タブレット・電子黒板・実物投影機の基本操作・活用

接続演習、Google Jamboardを利用し活用方法について意見交換

○オンライン授業の進め方

下準備が必要(機器の接続・教室にいるときから慣れさせておく)
学びの保障のためのオンライン授業

「いじめの理解と対応」

「不登校や集団不適応の悩みを抱えた児童生徒の支援」を受講して

教諭 佐々木 一 秀

講座名 C-40 いじめの理解と対応

研修の目的 いじめに関する諸課題に対応するため、必要な理論及び実践の在り方等について理解を深める。

期 日 令和6年6月28日(金)

場 所 秋田県総合教育センター

【日程と内容】

講 義 「危機管理、保護者対応、児童生徒支援からいじめ問題を考える」

神田外語大学 客員教授 嶋 崎 政 男 先生

◎ いじめの理解と対応 「いじめ問題の危機管理」

I 生徒指導の危機管理の3段階

(1) リスクマネジメント(未然防止)

①発達支持的機能：自己存在感・リテラシー

②予防的機能：危機管理、予知予測、危機回避、危機準備、安全教育

③早期発見機能

(2) クライシスマネジメント(危機対応)：①組織的初期対応 ②連携協働機能

(3) ナレッジマネジメント(再発防止)：「他校で(過去に)起こったことは自校(現在)でも起こりうる」

II いじめ問題のリスクマネジメント

(1) いじめの定義(いじめ防止対策推進法第2条)

「児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為(インターネットを通じて行われるものを含む。)であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているもの」をいう。

(2) 開発的指導

①「いじめに向かわない態度」の育成(基本方針)

②法第15条：豊かな情操・道徳心・対人交流の能力

③援助希求力の向上：SOSの出し方

④改正案に示された：規範意識の醸成

(3) 早期発見=いじめ認知の「3ルート」

①発見：「小さなサインに大きな問題」⇒ハインリッヒの法則1←29←300

②訴え：日ごろからの人間関係の構築=カウンセリングマインド

「論より同行」：「3つの共かん」=共汗・共歓・共感

③通報：校内組織の確立、保護者との良好な関係、地域・関係機関等との連携

(4) いじめ防止の学校体制

- ①学校いじめ防止基本方針の策定(法第13条)
- ②いじめ防止等対策のための組織(法第22条)：教職員＋心理・福祉＋関係者

III いじめ問題のクライシスマネジメント

(1) 法第23条による措置

- ①いじめの通報義務：「いじめを受けたと思われる」
- ②確認・報告義務：「速やかに、いじめの有無の確認・防止、設置者報告」
- ③被害者及びその保護者への支援、加害者への指導、加害者保護者への助言
- ④学習環境の整備義務：別室指導
- ⑤警察との連携・警察への通報

(2) 学校・教師の責任(判例より：日本弁護士会)

- ①安全保持義務 ②「いじめ」の本質を理解する義務
- ③動向把握義務(早期発見・早期指導) ④「いじめ」の全容解明義務
- ⑤「いじめ」防止措置義務 ⑥保護者に対する報告義務・保護者との協議義務

(3) 初期対応での失敗事例

- ①三大禁句：「気にしすぎ」・「あなたにも悪いところがあったのでは」・「強くなりなさい」
- ②保護者への「報告」、保護者との「協議」をしない。
- ③「目に見える具体的行動」：「最悪想い、慎重・速やかに誠意をもって組織対応」
- ④組織対応：複数の教職員によって、心理、福祉等の協力を得る
- ⑤聴取、アンケート等での配慮：6過多指導：人数・時間・詰問・反省・謝罪・罰則
- ⑥記録：不完全な5WIH、評価(判断)・子供の気持ち無記入、情緒的表現は×

IV いじめのナレッジマネジメント：「100の点検」(例)

【いじめ防止の学校体制の注意点】

- ①いじめ防止等の組織は、生徒指導部会のメンバー構成ではないか。
- ②いじめ対策委員会はいじめの問題が生じたときだけの開催にしていないか。
- ③いじめ防止基本方針の保護者周知は「学校ホームページ」のみか。

【いじめの認知をめぐる問題における注意点】

- ①「悪口を言われた」ような軽微なものは、本人から訴えがあってもいじめではないとして扱っていないか。
- ②いじめの認知は担任の判断に任せていないか。
- ③いじめの加害とされた者に発達障害や過敏等の特性がある場合には、いじめではないとして扱っていないか。

V 保護者からの訴えに対する対応における注意点

【いじめを察知したときの初期対応】

アンケートに「いじめられている」と記載があっても、はっきりするまでは保護者に連絡しないという雰囲気はないか。

【アンケート・聴き取り調査】

- ①聴き取り対象が多数いた場合、複数人を一緒に聴き取りしていないか。
- ②女子児童生徒から聴取を行う場合、複数の男性教員で行っていないか。

- ③アンケート・聴き取り調査のまとめは、校長までの決裁としているか。
- ④不登校児童生徒へのアンケート調査は実施しているか。
- ⑤担任や部活顧問が行うアンケートや聴き取りメモをすぐに廃棄していないか。
- ⑥担任の負担軽減のため、アンケート結果の集計は支援員に任せていないか。

【関係児童生徒への指導・支援】

- ①「加害」「被害」を明確に分け、報告書にも「加害者・被害者」と記入しているか。
- ②加害者から被害者への謝罪があった時点で「解消」と判断していないか。

【重大事態への対処】

- ①卒業生が訴える重大事態調査は、在籍していなくとも必要である。
- ②「いじめ」の要件を満たさない保護者の申立でも重大事態となる場合がある。
- ③不登校重大事態は、欠席数が30日に達しなくても調査する場合がある。
- ④退学・転学した場合は調査をする必要性がなくなるわけではない。

【「第三者委員会」の問題】

【関係機関等への対応・関係機関との連携】

- ①いじめが把握できても、設置者(教育委員会)への報告は月末の定例報告で行っているか。
- ②日本スポーツ振興センターへの災害共済給付申請は、保護者からの要請を受けてから判断している。

【自死事案への対応】

- ①「事故死(または転校等)としてほしい」と遺族から要望があったら従う。
- ②自殺の連鎖が心配されるので、児童生徒には事実を伝えない。
- ③遺品等の返還は自宅に送付(または処分)する。

◎ いじめ理解と対応

I 家庭の役割

「教育という川の流れの、最初の水源の清冽な一滴となり得るのは、家庭教育である。…家庭は厳しいしつけの場であり、同時に、会話と笑いのある『心の庭』である」(「教育改革国民会議報告」平成12年12月)

II 学校・家庭の連携の必要性

「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚自覚するとともに、相互の連携及び協力に努める」(「教育基本法」第13条)

III 保護者との連携・協働の「前段階」

大切な日ごろの人間関係づくり：「3つのR」

Respect (尊敬・尊重) Relation (人間関係) Resource (資源・良さ)

講座名 C-41 不登校や集団不適應の悩みを抱えた児童生徒の支援
 研修の目的 不登校や集団不適應など生徒指導上の課題を抱える児童生徒について理解を深めるとともに、具体的な支援の在り方を学ぶことで、実践的な指導力の向上を図る
 期 日 令和6年8月8日(木)
 場 所 秋田県総合教育センター

＜講義・演習＞ 「気になる子」が溶け込む学級づくり

＜講義・演習＞ 不登校の理解と支援

＜公開演習＞ 保護者との関係づくり ―気になる子を取り巻く保護者と学校の連携―
 かかわりプログラムSimple 代表 曾山 和彦 様

＜講義・演習＞ 「気になる子」が溶け込む学級づくり

・インクルーシブ教育とは

中教審答申：共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進「障害のある子ども、障害のない子どもができるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべき」という方向性が明示されている。

1994年のサマランカ宣言により連続性のある「多様な学びの場」を用意する必要がある、全ての子どもを最初は通常教室に包み込み、その中で子ども一人ひとりの教育的ニーズに応じて必要なサポートを講じる教育

・全ては学級づくり

「気になる子の指導・支援」「不登校・いじめの予防・改善」「学習状況の改善」「保護者対応・支援」等を講じて学級を全ての子どもの居場所にする。(ハンカチ理論)

※ ハンカチのほつれた糸を持ち上げても、糸が切れハンカチは持ち上がらない。ハンカチ全体を持ち上げれば糸も上がる。

・「気になる子」が通常学級に溶け込むための整備条件

特別支援教育や発達障害等について理解を示す。「今や知らないでは済まされない。」

a 学級づくり

マズローの欲求階層説を条件に「ルールとふれあい」が全ての子どもの居場所になる。

b ASDに対する「理にかなう」支援

①視覚情報の活用・・・フォトグラフィックメモリー

②一度にひとつ・・・短期記憶の弱さ

③予定の伝達・・・見通しの持ちにくさ

④肯定的表現・・・苦手な禁止、注意

⑤文化に寄り添う・・・感覚の過敏性と字義性への理解

c SST (social skill training:行動の教育)とSGE(structured group encounter:感情の教育)の組み合わせ

エクササイズ&シェアリング

エクササイズをやりっ放しにせず、「○○に気づいた、○○を感じた」等、個々の気づきをうながすシェアリングがとても大切

d 学校という一枚岩づくり

教員同士の思考の一枚岩はできることに越したことはない。

教育基本法第1条により教育のプロである教師は、より良い教育をめざし、校内はもちろん、校外の専門家も含め、議論を重ね、その方向性がおおよそ定まったならば実行する。

また、それができなければ、「学校のチーム員」とは言えないのではないか。まずは一緒に「行動」する。「いつまでも立ち止まってはられない。」行動した上で、疑問などが生じたならば、再議論すればよい。

e チーム学校 ～チームとしての学校の在り方と今後

1. 専門性に基づくチーム体制の構築
2. 学校のマネジメント機能の強化
3. 教員一人一人が力を発揮できる環境の整備

最後に、「A男を支える周りの友だちの力は、教師一人の支援を遙かに超える。」

<講義・演習> 不登校の理解と支援

・チーム学校による生徒指導体制

学校が抱える現代的課題に応えるために、学校がチームとして機能することが求められている。生徒指導と教育相談を一体化させて、全教職員が一致して取組を進めることが必要。

チームの要は教育相談。困難課題対応的生徒指導(リアクティブ)と発達支持的生徒指導(プロアクティブ)を支える課題予防的生徒指導の確立

・なぜ不登校が増え続けるのか

現代の子どもたちは「かかわり体験が不足」している。それ故、「かかわりの力(自尊感情&ソーシャルスキル)」が育ちにくく、不登校が増え続ける。自分にOKと言えなければ自信は生まれず、かかわりから下がる。また、「挨拶ができない、笑顔になれない、うまく話せない。」と置いていけば、同様にかかわりから下がる。かかわりの中から「他人に対する態度の表現」のシャワーをたっぷり注ぐことが必要である。

・不登校の子どもの現状理解

「そうせざる負えない」「強い不安」「娯楽に没頭」「一番安全な夜」「暴力にも理由」「嘘ではない言葉」を理解してはじめて支援が考えられる。

・不登校の子どもへの基本支援

頷くだけでできる勇気と言葉かけ…肯定 I メッセージ&勇気づけと「ありがとう」の言葉
かかわりが人を癒やし、かかわりが人を育てる。

<公開演習> 保護者との関係づくり 一気に子を取り巻く保護者と学校の連携―

・オニの心を引き起こす家庭・地域における人と人との「かかわりの糸」の弱さ

自己評価の感情(セルフエスティーム)自分を大事にできない人は周りを尚更大事にできない乏しい自尊感情や人とスムーズに関わることができない適切なスキルが身に付いていなければ、オニの心が出現する。三世代同居減少、核家族・一人親世帯増加、地域社会の「私事化(プライベート化)」が原因と考えられる。

・オニの心の鎮め方

①名前を大切にす ②カウンセリングマインド ③ありがとうをなじませる ④保護者と一緒に子育てという「登山」をする ⑤うまくやれているときを逃さず言葉をかける ⑥笑顔を瞬間的につくる ⑦「私」の思いを語る ⑧「手柄」はすべて保護者に返す。

・保護者と学校の連携

教育センターの活用と特別支援学校のセンター的機能の利用をする。

- a 教育相談機能と学校支援機能 b 教員研修機能と教材教具や施設設備提供

令和6年度

第16回 全国商業教育指導者研修会に参加して

教諭 石田 雄 哉

1. はじめに

今年度、全商会館において、第16回全国商業教育指導者研修会に参加する機会をいただいた。各都道府県から1名の教員が参加するもので、各県の状況や課題を共有する貴重な機会を通して、自分の認識や学びを深めたいと思い、参加した。研修のほんの一部ではあるが、簡単にまとめた。

2. 日程

【1日目：7月31日(水)】

- (1) 開講式
- (2) 理事長講話「全商協会と商業教育」
東京都立大田桜台高等学校長
小川 孝 氏
- (3) 文部科学省講話「商業教育を取り巻く状況」
講 師：
文部科学省 初等中等教育局参事官
(高等学校担当)付
産業教育振興室教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター・研究開発部 教育課程調査官
岩館 良伸 氏
- (4) ワークショップ「商業教育の課題」

【2日目：8月1日(木)】

- (1) ワークショップ「商業教育の魅力」
- (2) 講 話
「教育DX・データ利活用の現状と今後」
講 師：文部科学省総合教育政策局
教育DX推進室教育DX企画係長
(併)初等中等教育局学校デジタル化PT
学びの先端技術活用推進室係長

(併)初等中等教育局

修学支援・教材課 専門職

児島 紗季 氏

- (3) 講話「DX時代におけるリーダーの在り方を探る」

講 師：

城西大学経営学部・経営学科研究科

教授 栗田 るみ子 氏

- (4) ワークショップ「商業教育の魅力」

【3日目：8月2日(金)】

- (1) 講話「生徒たちが働く未来 急速に変容するワークスタイル」
講 師：
日本経済新聞総合解説センター・
編集委員 石塚 由紀夫 氏
- (2) ワークショップ「商業教育の良さを伸ばすため、明日から商業高校は何をすべきか」
- (3) 発表「商業高校への提案」

3. 講話について

- (1) 理事長講話「全商協会と商業教育」
 - ・校長協会：研修や校長のサポート、表彰関係を実施。全商協会：検定を中心に運営、サポートを実施。
 - ・情報処理検定：令和8年度より改訂し、1科目合格＝3級、2科目合格＝2級、3科目以上合格＝1級となる。部門としては、情報基礎、情報処理、ソフトウェア活用、プログラミングを予定している。
 - ・これからの商業教育は「商業を学ぶ価値(Value)」を高める必要がある
 - ・必要なスキル

- ①課題解決能力＝論理的思考＋デザイン思考
- ②コミュニケーション能力＝英語
- ③情報スキル＝ネットワーク技術＋セキュリティ
- ・ Essential Professional Skill
 - コラボレーション
 - コミュニケーション
 - 分析的考察
 - 自己管理能力
 - モチベーションの維持
 - リーダーシップ
 - 責任感
 - 興味を持つこと
- ・ 実践的思考力
 - Logical Thinking（論理的思考力）
 - Critical Thinking（批判的思考力）
 - Quick Thinking（迅速な思考力）

(2) 文部科学省講話「商業教育を取り巻く状況」

- ・ 商業科のミッション：地域経済を担う人材育成 → 県内就職低下の現状
- ・ 教員採用：社会人経験者が増えてきている
- ・ 指導力向上
 - ①指導力とは何か
 - ②指導力を向上させることは必要か
 - ③視座(立場)や視点(段階)でマトリクスを考える
 - ④ロジックツリーで課題を構造的に捉える
- ・ カリキュラム・マネジメント
 - 探究活動を軸としたカリキュラム編成をどの科目でも取り入れる

(3) 講話「教育DX・データ利活用の現状と今後」

- ・ GIGAスクールの目指すところ
 - ①個別最適な学び＝一人一人の興味、理

解度に合わせた学習

- ②協働的な学び＝クラス内、学校内、地域、大学

・ 1人1台端末の活用

- ①意見交換、人の意見を参考にして自分の意見を見直す
- ②リアルタイムで共有
- ③コミュニケーションの機会が増える＝子どもたちも慣れてくる

・ 教育DXの段階

- ①第1段階：「デジタイゼーション」アナログや紙をデジタル化
- ②第2段階：「デジタルライゼーション」データ活用による学習指導、業務改善
- ③第3段階：「デジタルトランスフォーメーション」学習モデルが変容し、価値を創出

・ 文部科学省CBTシステム(MEXCBT:メクビット)

- ①デジタル学習用CBTシステム
- ②オリジナル教材も可能
- ③全商検定も過去問題を提供→いずれ活用可能に

(4) 講話「DX時代におけるリーダーの在り方を探る～ICTを利活用したルーブリックの活用～」

- ・ 不特定多数のアンケートの集計に役立つ無料利用可能なライブアンケートサービス「slido」の活用
- ・ チームで成果を出す技術：PMBOK Project Management Body of Knowledge
- ・ 社会人基礎力をルーブリックで評価する。ルーブリック評価とは「ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具」である。学力テストだけでは測定できない基礎力に対する質的保証が求められる。

- ・ループリック：質問を対象に合わせて変える
- ・数値部分は定量分析として、ポートフォリオ分析を行うことが有効
- ・記述部分は定性分析として、テキストマイニングを行うことが有効。無料で利用可能なウェブサービス「KH Coder」の紹介。
- ・生産性という観点でチームを分類すると、生産性の高いチームは仕切りたがり（リーダー）のいるチームで、生産性の低いチームは話をしないチームとなる。

(5) 講話「生徒たちが働く未来 急速に変容するワークスタイル」

I. 「金の卵」争奪戦が過熱

- ・高卒の採用計画伸び率が大卒を超える
- ・高卒就職者数は減少し、求人倍率は過去最高水準に
- ・初任給の賃上げも進む
- ・内定辞退者を止める取り組み

II. 日本の雇用慣行は限界に

- ・日本は少子高齢化で若手が激減。生産性もG7最下位となる。
- ・企業価値の源泉は無形資産、人的資本（人を価値を生み出す資本と見なす考え方）へ
- ・従業員の成長支援、働きやすさ・働きがい向上へ
- ・休めないという常識を破る動き
- ・勤務地や転勤・単身赴任も見直しの動き
- ・副業促進、チャレンジを促す創意

III. 変化に負けないキャリア術

- ・消滅する職種、人手不足でも失職リスク
- ・AI・テクノロジーに奪われる仕事
- ・外国人労働者は戦力だが、ライバルにも
- ・雇われる能力（エンプロイアビリティ）

が重要に

- ・一生安泰な仕事はない。柔軟に対応していく覚悟と力が必要。

4. ワークショップについて

ワークショップは全参加者を10名程度の5グループに分割して行った。私が所属したCグループの参加者は以下の通りである。この先生方とさらに2グループに分かれてメンバーを入れ替えながら、与えられたテーマについてワークショップを行った。

茨城県立水戸商業高校	柏崎 寛之先生
埼玉県立皆野高校	千島 拓実先生
新潟県立新発田商業高校	小島あゆみ先生
福井県立坂井高校	野口 大輔先生
大阪府興國高校	大山 直樹先生
和歌山市立和歌山高校	金丸 央先生
山口県下関商業高校	白石 雄飛先生
徳島県立阿南光高校	板東 多恵先生

話し合う中で、話題となったキーワードは次の通りである。

【1日目：「商業教育の課題」】

- 生徒数の減少、入学希望者の減少→商業科目のPRが重要
 - ・結局中学生(中学教員)は学力の輪切り
 - ・部活動中心の考え
 - ・中学校への魅力を伝える→体験入学で中学生に簿記講座を実施(福井商業)
 - ・学んだことが社会につながっている感覚
 - ・入学したあとの魅力づけ
 - ・出前授業の実施：商業のアピール+販売実習の割引券→来校するきっかけづくり
 - ・保護者へのPR、中学校の先生へのPR(体験入学にも参加)
 - ・入学した生徒(保護者)へのアンケート、インタビューを参考にする
- 探究活動 地域連携・実践活動をどうするか
 - ・地域連携をする教員の温度差

- ・労力が大きい＝属人化する、普通の授業のほうが楽
- ・残す手間、引き継ぐ手間、続かない→教育委員会との連携・協力ができないか
- ・坂井高校：浴衣の試着会
- ・和歌山高校：全校生徒一斉で市高デパート(他学科も一緒に行く)
- ・阿南光高校：地元の人も入って販売、企業から委託されて販売、発表の場として
- ・皆野高校：地元のイベントに出ていく、利益は寄付
- ・予算問題：利益がないと潰されかねない。
- ・地元の意見を吸収して実践
- ・他学科との連携(仲良く連携するには)
→商業の役割：プレゼン、パッケージデザイン、チラシの作成、同じ商品を高く売る戦略、広く販売する戦略の立案

○評価方法

- ・今まで通りの点数だけではだめなのか(調査書には観点別を記載しない)
- ・あるべき姿=A、B、到達していない=C
- ・観光ビジネスで「記述テスト」、「小テスト」
- ・阿南光高校：専門科目だけ定期考査無し、普通科目は定期考査あり→生徒は評価の基準がわかりづらくなるという課題

○指導助言

- ・生徒減少は当たり前。そのうえで対策を考える。
- ・スクールポリシーの見直し
- ・3年間の学びの内容＝魅力ある学びになっているか、PRは十分か
- ・専門高校のミッションの一つ＝地域に残る人材を育成する(地元産業の担い手)

【2日目：「商業教育の魅力」】

- ・魅力が伝わらない→伝える努力が必要
- ・農業・工業は短期的に成果が出るが、商業は働かないと分からない(地味)
- ・農業・工業はイメージがあるが、商業は

イメージしづらい(分野が多岐)

○一般社会向け

- ・普通科でも総合的な探究の時間で商品開発・起業家教育→実は商業に魅力、より充実
- ・常時販売される商品→学校のPR、認知度アップにもなる
- ・企業にも商業高校生の良さをPR→魅力的な企業の求人＝生徒の意欲に

○高校生(在校生)向け

- ・資格取得を通してやりがいを感じる(点数アップ、合格)
- ・販売実習を通して、学んだことが生きる経験、やりがいを発見
- ・ビジネスプランコンテスト
- ・あいさつ、清掃→ビジネスでも基本
- ・アイデアを出すための技術・トレーニング
- ・3年生になると、結びついてくる。身についてくる→先輩から後輩へ伝達
- ・企業人講話で、商業の学びを評価してもらう
- ・ビジネスマナーの指導→商業科の特色・魅力
- ・コミュニケーションの重要性
- ・卒業生の声：公認会計士、起業した人など

○中学生向け

- ・簿記、情報処理、マーケティング→ビジネスの基礎的要素
- ・保護者に理解があると、生徒も必要性を感じている場合が多い
- ・生徒から魅力を伝えてもらう(先輩から後輩、高校生から中学生、卒業生から)
- ・キャンパスツアー：学生がツアーを企画・運営、質問自由
- ・体験入学を1日ではなく、複数日使って魅力を伝える工夫→簿記講座など
- ・小学生向けに商品開発講座

- ・ターゲットを絞ったPRが必要
 - ①学力が高い層へのアピールを増やす
 - ②美容師、看護師、保育士へのアピール
 - ③職業が決まっている中学生
 - ④普通科と迷っている中学生
- ・高校卒業後のメリットを伝える(入試、単位認定、昇給、高給取り)

○指導助言

- ・商品を開発するのは商業ではない。商品計画は商業科の分野。
- ・商業科で教えるのは、ビジネス金融(家庭科では消費者金融)。

【3日目：「商業教育の良さを伸ばすため、明日から商業高校は何をすべきか」】

○教員の意識改革

- ・研修の機会：先輩教員の指導方法(コツ)を学ぶ
- ・県内教員で相互研修(先輩から新人へ)
- ・資格だけでなく、教科書の内容、協働的な学び
- ・時代の変化を学ぶ研修
- ・コミュニケーション、根回し
- ・変化させることを諦めずに続ける→生徒に関わる部分を大切に
- ・検定は検証しやすいが、体験的・実践的活動は検証しにくい(成果が見えない)

○生徒へ

- ・各種コンテストへの参加
- ・プレゼンテーション、ディベート、ビジネスプランの考案、グループワーク→アウトプットの機会を増やす(主体的、協働的な学び)
- ・商業科としてのスクールミッション、目標、育成する力
- ・意識改革：ただの知識、単純作業は無くっていく(事務職)

5. おわりに

短い期間ではあったが、様々な先生方と意見交換を行うことができ、大変有意義な3日間となった。実感としては、日本全国どこでも同じような課題に突き当たり、どの先生方も創意工夫しながら生徒のために努力している姿があった。商業科の学びが生徒の将来のため、日本の将来のために有意義である認識を改めて持ち、これからも頑張っていきたいと思える研修であった。

校内研修の充実を図る取組～一番大切な研修を探して～

教諭 山崎史織

1. 主題設定の経緯

本校研修部では、毎年テーマを定めて研修を実施してきました。また、教員から意見を募りながら研修内容について検討したり、情報提供を行ったりしてきました。しかし、秋田県教育委員会の「教職員の働き方改革推進計画」にもあるように教員の多忙な現状があります。そのため、本校に限らず、研修が自身の専門性向上に役立つと理解してくれてはいるものの、忙しさのあまり、校内研修に対して時間的拘束を感じたり、負担感を感じる方もいるように思います。また、授業準備や分掌業務、部活動指導などの日常業務の中で、個人で研修に割く時間を確保することが難しいと感じる教員も多いと思います。こうした現状から、限られた大切な時間だからこそ、校内研修の質の向上に向けた改善、工夫も改めて求められていると、感じるようになりました。

そして、研修部としての取組と向き合う中で、現在の「教員が必要を感じている研修を中心にこなすスタイル」で本当に十分なのだろうか、と考えるようになりました。そこで、文部科学省の方針を踏まえ、「本校にとって、最も必要な研修とは何か」を追究することにしました。

2. 本校での取組

(1) 継続的に行ってきた取組

本校で少しずつ形を変えながら、継続的に行ってきた研修は、以下のとおりです。

本校で継続的に行ってきた取組

1. 授業公開週間(前期・後期 年2期)
2. 授業アンケート(年2回)
3. 研修の奨励・案内等
4. 研修集録発行
5. 救急救命講習



(2) 3年間で新たに行った取組

本校で継続的に行ってきた取組に加え、この3年間で必要に応じて新たな取組も行ってきました。

① 時勢や学校事情に合わせた研修等の取組

3年間で新たに行った取組① (時勢や学校事情に合わせた研修等)

1. Google Classroom「研修部の部屋」の開設と活用
→研修の奨励・情報提供
2. 「研修部の本棚」の開設と活用
3. 新教育課程の評価について情報提供
4. 研修記録制度についての情報提供
5. SDGsを取り入れた授業実践例の共有 など

② ICTについて行った新たな取組

本校では、3年前に教員・生徒にタブレット端末が導入されました。それを受け、以下の研修を行いました。

3年間で新たに行った取組②(ICT)

1. 校内研修:Google Classroom
2. 校内研修:Google Forms
3. 校内研修:Google Jamboard
4. ICTを活用した授業実践例の共有 など



1～3は、授業等で活用する場面も多いことから、ICT推進委員会と連携し、全職員を対象に行いました。4については、ICTの輪を広げるために、得意な方の授業実践例を教員間で共有し、授業改善への足がかりとなることをねらいとして行いました。こちらは、職員会議や研修集録を活用し共有を図りました。ここまですべて全職員を対象とした取組です。

③ 希望者を対象とした新たな取組

本校は、商業高校であるため、商業科の先生方を中心にICTが得意な方もいます。しかし、ICTに苦手意識を持つ方もいました。そのため、全体の説明を聞いただけでは難しさを感じたり、授業に取り入れたいけれども難しい…という声をいただくことも少なくありませんでした。そこで、希望者の方を対象に、以下の研修を行いました。

3年間で新たに行った取組③(希望者対象)

1. ICTおさらい会(2～3日/年)
2. Googleスライド勉強会 など



この写真は、ICTおさらい会の風景で、年2～3回行っていきます。研修部・ICT推進委員会の先生が講師役として、講師役1人につき、ICTについておさらいしたい方1～2名を担当し、質問に答える形で実施しました。

Google スライド勉強会は、先生方の「使っていたけど使い方が分からない…」という声に応える形で、開催しました。こちらも希望者のみの実施の呼びかけでしたが、10人ほど参加していただき、学びの場を設けることができました。

3. 疑問

このように、今まで継続してきた研修に加え、必要性に合わせて本校では様々な研修を実施してきました。

しかし、今一度立ち止まって考えてみた際に、「研修部が時勢や学校事情を鑑み必要と思った研修」と、Google Formsを活用した職員アンケート結果などから「先生方が必要と感じた研修」を行うだけで本当十分なのだろうか、と感じるようになってきました。

また、私たちが見えていない、気づいていない課題が本当はあるのではないかと考えるようになってきました。

4. 本校に必要な研修の洗い出し

そこでまず、本校の現状を把握することが必要であると考えました。すなわち、教員に必要な研修の洗い出しです。

検討した結果、観点ごとに分かれており、項目例も載っていることから令和3年に出された文部科学省『教師に求められる資質能力の再整理』を参考に、以下の5観点について質問項目を設け確認することにしました。

教員として求められる資質能力

1. 教職に必要な素養等に主として関するもの
2. 学習指導に主として関するもの
3. 生徒指導に主として関するもの
4. 特別な配慮や支援を必要とする子供への対応に主として関するもの
5. ICTや情報・教育データの利活用等に主として関するもの

(参考資料:文部科学省『教師に求められる資質能力の再整理』)

5. アンケートの実施

<質問テーマ>

- ①能力について(5観点)
- ②職員が必要だと感じている研修について

として、全職員を対象にGoogle Formsを用いてアンケートを行うことにしました。

テーマ①として、まずは教員に必要な研修の種類を洗い出すために、本校職員が十分にできていない項目(能力)がないか確認することにしました。アンケートは、先ほどの5観点についてそれぞれ質問項目を設け、

- ①当てはまる
- ②まあまあ当てはまる
- ③あまり当てはまらない
- ④当てはまらない

の4つの選択肢から最もご自身に当てはまるものを選んでもらう形で行いました。

テーマ②は、『職員が必要だと感じている研修について』です。こちらは様々な研修分野から、必要だと感じるものを選んでもらう形で行いました。

6. アンケート結果

テーマ① アンケート結果

本校教員の能力について見えてきた課題順位は、以下のとおりです。

結果 ①能力について見えてきた課題順位

1. 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体化した授業展開ができる。
2. 授業や校務等にICTを効果的に活用することができる。
3. ICTを活用した授業デザインやきめ細かな指導・支援を行うことができる。
4. 生徒の情報活用能力(情報モラルを含む。)を育成するための授業実践等を行うことができる。
5. 本校のグラデュエーション・ポリシーについて理解している。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体化した授業展開が「できる」と回答した方が、他の項目と比べて非常に少なく、全質問項目を通して、自信のある人が最も少ない結果となりました。

テーマ② アンケート結果

本校職員が必要だと感じている研修順位は、以下の通りです。(複数回答可)

結果 ②職員が必要だと感じている研修順位 ※複数回答可

1. ICT
2. 新教育課程の評価
3. 生徒指導
4. 教育相談
5. 救急救命
6. 教科指導
7. 協働的、探究的な学びの実践例

1位の「ICT」については、3年前に教員・生徒にタブレット端末が導入されたこともあり、約7割の教員が必要を感じているという結果になりました。これは、3年前から不動の一位になります。反対に、「教科指導」や「協働的、探究的な学びの実践例」の順位は低い結果となっています。

この結果は、先に示した3年間で研修部が新たに行った研修の取組とも合致するものとなりました。先生方の需要に研修部として少しは応えることができたかな、と安堵いたしました。

しかし、反面、見えてきた課題がありました。

7. 本校の課題

先程ご紹介したように、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体化した授業展開が「できる」と回答した方は少なく、全体の10.3%しかいません。これは教科指導的課題です。

それにも関わらず、「教科指導についての研修が必要だ」と回答した方は、わずか14%という結果でした。

今まで本校では、「1人1台タブレット導入への対応」という目の前の問題に先生方も研修部も必要性を感じ、さまざまな形で研修を行ってきました。しかし、実は見えていない課題があったのだ、と気づく機会となりました。

8. 本校の課題を受けての取組

この結果を受け、見えていなかった課題に対して、「全体に対しての研修」と「個人に対しての研修」の二段構えで取組を行うことにしました。

全体に対しての研修

<Step1>校内研修

はじめに、先生方に課題を課題として認識していただくために、アンケートによる検証結果の周知を行い、本研修のねらい・意義を説明しました。



次に、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体化した授業展開について、各自に自分なりに考えをまとめてGoogle Formsで回答してもらうことにしました。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体化した授業展開についてできる方・わかる方は、自分なりに考えや実践例を回答してもらいました。内容を確認したい方は、Google Classroomの課題に添付した文部科学省の資料を参考に自分なりに考えをまとめてもらいました。また、実際の授業イメージを見たい方は、各自視聴もできるように文部科学省YouTube授業実践例の動画リンクも紹介しました。

<Step_2>考え方・授業実践例の共有

Step 2として、先生方からいただいた回答をスプレッドシートにして職員会議で紹介し、全職員で共有を図りました。以下は一例です。

① 全体に対して(Step_2)

3) 考え方・授業実践例の共有

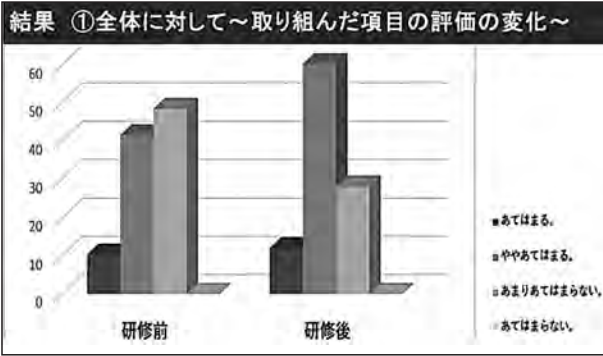
個別最適な学びは個々の学習の理解度を理解することから始まる。まずは生徒個々に自分の考えを持たせる。考えがまとまらない生徒にはICT、資料、アドバイスするなど支援して考えを持たせる。ここが個別最適な学び。対話を経て、一つの考えがまとまる。正しさを再確認できる生徒。間違いに気づく生徒。が生まれる。

- ①授業を通して具体的なテーマを設定する。
- ②そのテーマについて、個人個人で考え、意見をまとめる。
- ③グループ(1班4~5人)ごとに役割分担を決めさせる。
- ④役割は班長(司会者)、記録者(発表者)、プレゼンテーション(パワーポイント使用)作成者とする。
- ⑤班長(司会者)がメンバーの意見を発表させ、記録者(発表者)がそれぞれの意見を記録する。
- ⑥班の中で討論して意見をまとめる。
- ⑦班ごとにパワーポイントを使用して、意見を発表させる。
- ⑧最も発表内容が良かった班に、個人で投票させる(その際、各班には投票させない)。
- ⑨結果を発表する。その際、誰が投票してくれたか、何が良かったかを披露すると投票された班はうれしい。
- ⑩このクラスにおける、テーマに対する意見を再確認する。

個々の先生方の考え方に触れられ、複数の方の授業実践例を学べたことは私自身大変勉強になりました。

全体に対しての研修後の変化

研修前に、「できる」と回答した方が他の項目と比べて非常に少なく、自信のある人が最も少なかった項目である、『「個別最適な学び」と『協働的な学び』を一体化した授業展開ができる』について、研修後に再調査したところ、以下のとおり結果となりました。

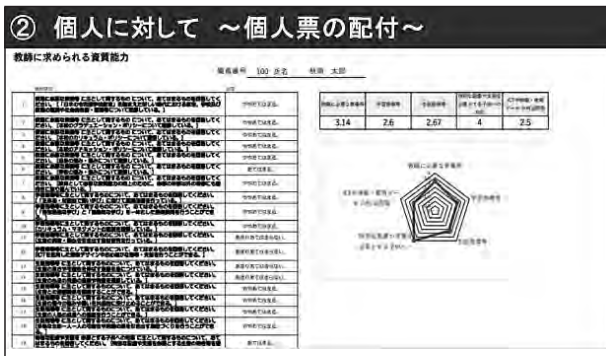


「できる」・「まあまあできる」を合わせると72%となり、研修を通して自信を持ってくださった方が増えたことをとても嬉しく思います。

しかし、これで安心するのではなく、このように見えていない課題に対して、継続的に働きかけを行うことが大切だと感じました。

個人に対しての取組

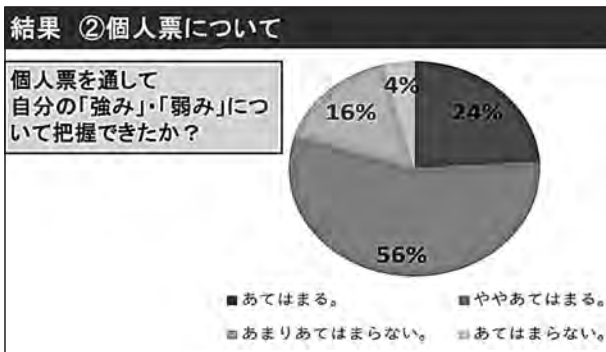
個人に対しては、レーダー表示を入れた個人票を作成し、配付しました。



配付すると、「あ～、生徒指導だめだ～」、「教員としての資質ない～」などと多くの先生方が反応してくれました。なかなか通常業務の中で、自分自身を見つめる機会がないので新鮮に受け止めていただけたようで、やってみてよかったですと感じました。

個人に対しての取組後の変化

個人票配布後、「個人票を通して、自分の『強み』・『弱み』を把握できたか？」という検証を行ったところ、以下のとおり、「あてはまる」・「ややあてはまる」を合わせると、80%という結果になりました。



9. まとめ

今回の検証を通して、「教員の資質・能力」として様々なことが求められていても日々の業務に追われるあまり、必要性に気づけていない、課題が存在することもあると学ぶことができました。

また、教員に求められる資質・能力についても理解度に個人差があることから、学校として、個人としての弱み・強みを検証する機会を持つことの大切さを感じました。そして、教員ひとりひとりが自分の弱みと向き合い、教師が自らの研修ニーズを把握することで、研修受講履歴システムの活用にあたって、主体的に学びを進めることができるのではないかと感じました。

今回、校内研修も質の向上に向けた改善、工夫が求められていると感じ、主題として、本校に一番大切な研修を探しました。

教育現場のニーズや環境が急速に変化している現在、教育課題は多岐にわたります。しかし、教員の多忙な現状を考慮すると、ともすれば目の前の課題だけに目が行きがちです。だからこそ、学校としても、個人としても「課題意識をもってもらう研修」・「次につなげてもらう研修」が一番大切なのではないかと、今回の検証を通して感じました。

10. 今後の課題

第一に、「気づき・変化があるか」の長期的追跡だと思えます。今回、自身の強み・弱みを認識いただいたのは、最初の一步だと思えます。その次のステップとして、課題意識を持って実践・学びにうつせるか、そして変容につなげていけるか、について長期的な検証が必要だと思えます。

第二に、校内研修の場だけではなく、学校全体として「学び合いのコミュニティ」が醸成できることが理想だと思えます。今後、学校全体として一層学びに前向きになれる環境づくり・きっかけづくりができればいいのではないかと考えます。

(参考資料)

- ・ 文部科学省 『教師に求められる資質能力の再整理』
- ・ 秋田県教育委員会 『教職員の働き方改革推進計画』

編集後記

今年度はICTの効果的活用を考え、授業での利用も含め、各場面でのICTの利用が増えたと思います。ICTの活用は難しく感じてしまうところもありますが、今後も積極的に授業等で利用し少しでも慣れ、来年度に活かせるようにと考えています。

山崎 翼

専門科目はもちろん様々な場面でのICTの活用を目の当たりにし日々の研修、研鑽の必要性を痛感した一年でした。今年度の経験を活かし積極的に活用できるよう支援できたらと考えております。ご多忙の中教えて下さった方々に感謝申し上げます。

佐藤 珠美

ICT機器の活用やSDGsを取り入れた授業実践など、指導方法や指導内容がめまぐるしく変化していると感じています。その中で、研修を通して授業改善を行い、生徒にフィードバックすることで生徒の資質・能力が向上することに期待しています。

宇佐美 圭介

おかげさまで「研修集録 第39号」がまとまりました。お忙しい中、寄稿いただいた先生方には深く感謝いたします。ありがとうございました。

先生方には、様々な研修へのご参加とご協力をいただき、心より感謝しています。本当にありがとうございました。この1年を次年度につなげていただけますよう、本研修集録を今後の研修・研鑽の場に役立てていただければ幸いです。

山崎 史織

令和6年度 研修集録

発行日 令和7年3月
発行者 秋田市立秋田商業高等学校
〒010-1603 秋田市新屋勝平台1-1
TEL 018-823-4308
FAX 018-823-4310
印刷所 株式会社 塚田美術印刷

表紙デザイン：小笠原千沙(本校生徒)



校訓

感謝

勤勉

鍛錬

過去3年分の研修集録はこちらのQRコードから！

令和5年度

令和4年度

令和3年度

